
科学な異世界記録

佐藤 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学な異世界記録

【Zコード】

Z3083Z

【作者名】

佐藤 和樹

【あらすじ】

自称スーパー科学者というじいさんと共に異世界へ行くことになった青年、白河輝彦。しかし、いざ行って見たら異世界は魔王やら秘密結社やらに狙われていて……！？

大切な異世界の仲間たちを守るため、弱気な青年がぶつ飛んだ敵と戦う！

プロローグ

プロローグ

闇の堆積した、いざこにあるとも知れぬ部屋。

その中心に一人の男が座っていた。つやのない銀髪、いや白髪で室内の闇に溶ける黒い服を身に附けていた。その顔は高い筋の通った鼻と大きな眼が特徴的で大変整っていた。

だが、乾燥してかさついた肌と獸のよつた眼光によつて男の顔はその美しさを根こそぎ奪い取られていた。

そんな男は木目の浮いた光沢のある机の上に紙の束を広げ、ウンウン唸りながら目を通していた。

「ほう……」これは

男の目がある資料の上で止まる。男はその資料を手に取ると食い入るように読み漁り始めた。

「はは、素晴らしい、これこそ私の求めていた結果だ」

男は資料を机の上に放ると、笑い始めた。狂気に染まつた声が室内の濁んだ空気を揺るがせる。

「これが成功すれば私は至高の存在になれる！ 失つたものを再びこの手に取り戻すのだ！ もう一度、もう一度あの日に戻れる！」

男は立ち上がり、拳を突き上げる。その快哉の叫びは深い闇に吸い込まれていった。

今、何かの歯車が回り始めた。

第一話 旅立ち（前書き）

電波が飛んで来て書きました。

駄作ですが読んで下さるとありがとうございます。

第一話 旅立ち

第一話 旅立ち

僕は解雇された。

もともと小さな運送会社で働いていたがリストラされたのだ。

一十歳にもなつて実家の世話になるのも気が引けて、夜の街を歩く。

「異世界調査の人員募集中？ 秋葉科学研究所？ 本当かな？」

僕はビルの壁に張られたおかし過ぎるチラシに目を止めた。目を疑いたくなる内容だ。ありえない。でも貴重な求人広告だ。今を逃したら職にありつけないかもしれない。とりあえず僕はチラシに書かれていた住所に向かうこととした。

- - - - -

チラシの住所に行くと古い洋館が建っていた。大正とかそういう時代の建物といった感じだ。

「すいませーん。チラシ見て来ましたー」

呼び鈴を鳴らすと中から白髪の老人が出て来た。もじやもじや頭で背は低め。田つきが鋭く気難しそうだ。

「ここのスーパー科学者秋葉文明になんのようだ？」

老人は実に不機嫌そうな顔をした。僕は何も悪いことしてない

のにな。というか自分で自分をスーパーって言つたよこの人。ある意味尊敬出来そうだ。

「求人広告見て来ました。ここが秋葉研究所ですよね」

「おお、求人広告を見て來たのか。てつきり役所の人間がわしに苦情を言いに來たのかと思つてな。すまんすまん」

秋葉さんは頭をかくと、僕を研究所の中に招き入れた。

研究所の中は外観通りレトロな感じで、その中に未来的なデザインの研究機材らしきものが置かれている。

「さつそく君に仕事の説明をしよつ。まず君は異世界を信じるかね」

居間のような部屋のソファーに腰かけた秋葉さんが、うれしそうに話かけて來た。ずいぶんせつかちなようだ。

「一応、まあ」

信じてているわけではなかつたが当たり障りのない返事をしておいた。

「そうか！　今まで誰も信じてくれなかつたからな！　感動した！」

僕が秋葉さんのテンションに圧倒されている間に、秋葉さんは機関銃のよつに話続けた。

「信じていろなら話は早い。君の仕事はわしと共に異世界の調査をすることだ。君はこの間の電波障害のことは覚えておるかな？」

わしはあがれが異世界からの干渉によるものだと考えた！

なんという珍説。太陽活動が原因ではなかつたのか。

「そしてわしは異世界への入口を作ることに成功したあ！」

拳を振り上げ秋葉さんはシャウトする。耳に響いて大変だ。

「説明よし！ それでは調査に出かけるぞ！」

「え、待つて下さい秋葉さん！」

秋葉さんはいきなり部屋から飛び出して行こうとした。僕は慌てて止める。

「秋葉さんではない！ 博士と呼ぶんだ助手ア！」

「僕には白河 輝彦って名前があります！ つてそういう問題じゃない！」

秋葉さん、訂正、博士は怪しい階段を下り地下へと向かつた。僕は全速力でそれを追つ。

「ふふふ、これがわしの開発したスーパー異世界トリップくんだ。これは量子テレポートの理論を応用したもので……」

博士は大きな装置の前で立ち止まり、難しい説明を始めた。僕にはよくわからない。暇なので装置の観察をすることにする。装置は銀色のリングのような形のものと四角い箱のような形のものがたくさんの中で繋がっている。大きさはリングが大人一人余裕で

通れるくらいで箱の方は大きめの箪笥くらいだらうか。

「……とこりのがこの装置の説明だ。理解できたか？」

博士が説明を終えたようで僕に話を振ってきた。

「ええ、なんとか」

「では出発するぞー！」

「ちよつとタンマー 準備しないで良いんですかー！？」

博士は小さな巾着袋を白慢げに取り出した。

「ははは！ 荷物ならこの無限巾着に入つておるわ！ では次元の果てへ、さあ行くぞー！」

博士は装置につけられていた赤いボタンを老人とは思えぬ気合いとともに押した。

装置が轟音を立てて建物が揺れ始めるやがてリングの内側が七色にきらめいた。すると視界が白くなり、僕の意識は飛んだ。

僕は博士に起こされた。辺りをゆっくり見回す。

大人が抱えられそうもないほどの大木の群れにひんやり心地好い清浄な空氣。本当に僕は異世界に来てしまったようだ……。なんてことだ。せめて友人たちに挨拶ぐらいしたかった。

「大丈夫か。おい！」

もつとも信じてくれなかつただろうが。

「ふむ、気がついたか。それにしても深い森だな。街へ行きたいのだが……近くに誰もおらんようだ。仕方ない、このレーダーで探そ
うかの」

博士はパラボラアンテナのような形のレーダーを取り出した。

おかしいな。僕はそう思った。今さつき、木の影に女人の人を見
たような気がしたのだ。僕はもう一度辺りを良く見回す。いたいた、
民族衣装のような服を着た女人の人だ。

「博士、あつちに人がいますよ。あの人に街までの道を聞いたらど
うですか？」

博士は僕の指差した方角を見た。博士は怪訝な顔をする。

「なんじや、誰もおらんではないか」

おかしい、確かにいるではないか。博士は老眼なのだろうか。
それにしても限度がある。

女人の人はどんどん接近してきた。綺麗な人だ。目鼻立ちがはつ
きりしていて風を孕んだ黄金色の髪がすばらしい。体型もメリハリ
がきいていて理想的なバランスだ。

「博士！　目の前にいるじやないですか！」

女人人はついに博士の目の前まで来た。それにも関わらず博士
はレーダーを手に唸つてゐる。まさかあの女人人は幽霊なのか。嫌
な考へが頭を過ぎつたとき、彼女が言葉を発した。

「私が見えるのか？」

それがこの世界で初めての出会いだつた。

第一話 旅立ち（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一話 精靈れどもりがむー（前書き）

タイトル通りの内容です。

第一話 精霊さんあらわるー

第一話 精霊さんあらわる！

僕は怪奇現象に遭遇していた。目の前に女の人がいるのだが、僕以外には彼女が見えないようなのだ。

「あなたなんですか！」

僕はどうにか声を搾り出した。その声は恐怖で震えてしまつている。

「私は精霊だ。それにしてもお前、私が見えるのか？」

「精霊？ なんてファンタジーな存在だ。異世界に来たとはいえこんなに早く出会いつとは。

「見えますよ。博士には見えないようですが

「やつぱり『氣のせい』ではなかつたか。見える人間に会つのは久しぶりだ。うれしいぞ」

精霊さんは嬉しそうに笑つた。僕も釣られて笑う。

「ここで博士が僕の様子がおかしいことに気づいた。

「どうしたのだ？ さてはその辺の笑い茸でも食べたか？」

精霊さんの見えない博士は不審者でも見るような目をした。

「いや、精靈さんと話しているんですよ。博士には見えないよつですけどね」

博士は極限まで田を見開き僕を見つめた。

「なんだと……そんな興味深いものが……。見せる、見せるんだ！
わしの脳細胞が研究対象をよ」せと言ふんでおるッ！」

博士は血走った田で僕を押し倒した。必死にもがくが博士の力
は信じられないほど強い。
死ぬ！ 死んでしまう！

「な、なあそちらの御仁は私が見たくて騒いでいるのか？」

「やつですよ！ なんとかしてー！」

精靈さんは顎に手を当てて何やら考え始めた。早く、早くなんとか
して！ 意識がなくなりそうだ！

「仕方ないな、放置して置いたら殺されそудаし……」

精靈さんはぱぶつぱぶつとつぶやくとまばゆい光を放つた。光が収
まると博士は鼻息を荒くした。

「おお、素晴らしいー！ わすが異世界、精靈が実在するとはな！」

精靈さんが見えるよつになつたよつだ。博士はやつやく恍惚と
した顔をして精靈さんを見る。

「すまないが、もつそろそろ元に戻つていいか？ 実体化は力を

使つのだ

しばりくして精靈さんは申し訳なさそうに博士に切り出した。
すでに機材を巾着から取り出して調べる気マンマンだった博士
は顔を真つ青にする。

「そんなん、あともう少しなんとかならんのかー」

博士に懇願された精靈さんは急に僕の方を向いた。

「君が私と契約してくれるならあることは……」

そんなことこきなり言われても……。

困った僕は博士の方を見てアイコンタクトで助けを求める。

「契約するのだ。しなかつたら人間核燃料として原子炉に入つても

「うひ

博士はにこやかに言つた。光線が出せそつな目をしていた。

「精靈さんー、ぜひ契約しましょーー！」

「わうかやつてくれるかー！」

精靈さんは指を噛んだ。赤い血が少しづつ出てくる。

「君も早く血をだすんだ」

痛いのは嫌だが命には代えられない。僕は指を噛み血を出した。

「私の血を吸つてくれ」

精靈さんの血を吸うと少し甘かった。僕が血を吸い終えると、精靈さんは僕の指を見つめる。指を差し出して欲しいようだ。僕が指を差し出すと、彼女は血をおいしそうに吸つた。

「この人、実は吸血鬼じゃないのか。

「あとは私に名前をつければ契約完了だ。良い名前を期待するぞ」

「名前ねえ……。神話とか読まないから精靈の名前なんて知らないしなあ。どうしよう。期待を込めた目で見てくる彼女に変な名前つけたくないし。僕は脳内辞典を全力で探した。

「スフィアなんてどうだろ?」

「スフィアといつのはゲームの登場人物だ。僕の脳にある名前のストックなんてこんなものである。

「スフィアか。悪くないな。良いだろ? 契約完了だ」

「スフィアはほほえんだ。僕はホツとため息をつく。

「よしよし、上手くいったようだな。えらいぞ白河君」

博士は手をパチパチと叩いて僕とがつしり握手をした。

「さて、スフィア君だつたかの。街までの行き方を知つてあるか? わしらは街へ行きたいのだが」

「待つて待つて！ 契約しましたけど副作用とかないんですか？ すぐ心配ですよ」

僕は心配だつたので我慢できずに聞いた。スフィアは自信ありげに胸を張る。大きな胸が強調された。青少年には刺激的すぎる姿だ。

「副作用なんてとんでもない！ 精霊との契約は人間にとつていいくことばかりだぞ」

「例えばどんなことですか？」

「魔力が上がつたり、身体能力が上がつたりするな。あと精霊魔法を使えるようにもなるだぞ」

やつぱりあつたか魔法。どこまでもファンタジーなんだな。

「あと一番重要なのは……」

スフィアが僕にしな垂れかかつて來た。大きな膨らみが当たり、僕は顔を赤くする。

「私が君のものになっちゃうことだぞ。これからはいつも私と一緒にだな」

何ですと……。かわいらしくしかもサラリととんでもないことを言ったよこの精霊さん。

「スフィアが僕のものになるってどういうことなんだー！ それいつも一緒に……。ありえませーん！」

「ありえないってどういうことだ？」 私はそんなに魅力ないのか？」

スフィアは涙目で僕を見つめる。その目つきはさすが。

「そういう訳ではないんですけど……。スフィアさんの方は良いんですけど？」

「見える人間との契約は名誉なことだからな。私はまったく構わないぞ」

スフィアは僕に腕を絡ませて来た。さらに居心地良さそうに抱きついて来る。正直血圧が上がりすぎてやばいです。

「わしも良いぞ。研究対象が近くにいてくれるのはありがたい」

博士！ 一応僕はあなたの助手って扱いなんですよ！ 助手の危機を助けて下さいよ！

「さて決まったな。さつき街の場所を聞いたよな。もう田が暮れそうだ、続きは街についてからにしよう」

スフィアがその場を仕切つて街へと歩き始めた。

僕と博士もすぐに後について行く。こうして僕らは街へと向かった。

第一話 精靈をとめらるー（後書き）

作業がはかどることははかどること。 いつこう話は作者大好きです。
ぜひ感想よろしくお願ひします。

第三話 街に着きました（前書き）

すいません！主人公が強くなるのはもう少し後になります

第三話 街に着きました

第三話 街に着きました

僕らは街の前まで来ていた。森の近くの草原にある街で、周囲を大人の背丈より高い塀で囲まれている。

「あれがこの辺りで一番大きな街、リンドンだ」

「まさにファンタジー！ 素晴らしいぞ！」

博士は顔を真っ赤にして心臓に悪そうなほど興奮している。

そういう僕もテンション上がっているけれど。

スフィアはお上りさんのような僕らに苦笑しながらも、街の入口のところまで案内してくれた。

「ここのが街の入口だ。門番に顔を見せて犯罪人かどうか調べてもらえば通れるぞ」

スフィアは門の横にいる大柄な門番の男を見て言った。

「精霊なのにずいぶん詳しいですね。

何かあつたんですか？」

「いや、暇だから時々街を覗くんだ。人間の街は退屈しないからな

この世界で犯罪なんて犯しているはずのない僕らは無事に門を通り抜けて街の中に入った。街には一階建てぐらいの石造りの建物が建ち並び、道路には石が敷き詰められている。もう夕方なのだが

人通りは多く、中には酔っ払いのような人もいた。

「つおおつー 中世の町並みそのままではないか。」

博士、呼ばないで下さい。周囲の人の視線が冷たいです。異世界に来て早々、変質者扱いされたくありません。

「さつきからあの御「は叫んでばかりだが」主人様たちはよっぽど田舎からきたのか?」

「なんというか、うーん……。そのうち話しますからとりあえず」
主人様はやめてください。白河で良いです」

そのうちとは言つたが話すべきだらうか。異世界なんて現実的でないしなあ……。

「そのうちと言わば今教えてやれば良いだらう。スフィア君、わしらはわしのスーパーな科学力で異世界からきたんだ」

博士? こきなり爆弾発言はやめて下さい! スフィアだつていきなりのこと引いてますよ……。あれ、どうしてスフィア目を輝かせているの?

「す、じ、い! 異世界から来るなんてあなたは大賢者なんですね!」

スフィア適応力高いのですね。博士のテンションについて行つてますよ……。

「ははは! わしは知能指数四桁だからな! 尊敬したまえ」

あの、知能指数四桁つて人間じゃないと思いますよ？

「知能指数つてよくわからないがすゞいんだな！」

スフィア、博士をのせたらダメですよ。何をするかわからないんだから。

「そりだらそりだら。よし、わしのすゝみを分からせてやるわ！」

博士は怪しげな銃みたいな物体を取り出した。博士の目が不気味に光る。

「特別にわしが最近開発したこの波動銃の威力を見せてやるー。」

博士は波動銃の部品をいじつた。銃口に光が集まってくる。銃が澄んだ金属音を発し始めた。やばい気配がする！

「博士！ やめて下さい！ そんなやばそうな武器使わないで下さいー！」

「そ、そりだな。すゞいさんは十分わかつたから使わなくて良いー！」

「なんだ、つまらん」

博士は残念そうに波動銃を巾着にしまった。世界の危機は救われたようだ。

「あ、危なかつた。とにかく宿へ行つて今日のところは休みませんか？」

早く落ち着けるといひに博士を連れて行かないと危険だ！
危険すぎる！

「それもやうだな。宿を探すとするか」

博士は納得したよつで、僕らは宿を探すことになった。

僕らはベッドのマークの看板のかけられた大きな建物の前に着いた。

「やうえばお金ひつするんですか？　円しか持つて無いですか？」

僕はここに来てお金が無いことに気がついた。スフィアも困った顔をする。

「私もすまないが金は持つて無いなあ……」

「大丈夫だ。わしが貴金属を一通り持つてある。どれか価値があるだろうて」

博士は巾着から大量の金や銀を取り出して見せると宿のドアを開けて入つて行つた。

僕とスフィアもついて行く。

「いらっしゃい。一泊一万ルーツだよ

髪を生やしたおじさんがあくまで挨拶してきた。ルーツと書つの

は通貨単位らしい。

「「」それで足りるか」

宿屋のおじさんは大量の財宝を前にして皿を丸くした。

「「」、「んなこりねえよー…… ちょっと待つてな」

おじさんはカウンターの奥から天秤ばかりを持つてきた。そして金塊をわずかに削り、重さをはかる。

「「」んだけで十分だ。じいさん、悪いことは言わねえから両替屋でルーツに換金してもらうんだ。そんで銀行に少しあずけるといい。」のままだと無用心あざるぜ」

「ふむ、ありがとう。やつするだ」

「部屋は一階の左はじだぞ」

親切な宿屋のおじさんに感謝しつつ、僕は階段を登った。部屋の内装は質素だったが、家具はしつかりとした作りになつていて、ベッドはきちんと三つある。うん……？

「スフィアさんと僕たち同じ部屋じゃましくですよー…… 別に部屋取つて来ます!」

「いいじゃないか。私の覗いた冒険者たちはだいたい男女一緒に泊まつていたぞ。それに私と白河の仲じゃないか」

スフィアは部屋のドアをしつかりと塞いで動かさない。し

ようがないな。

「着替える時はちゃんと言ひてくださいよ。您の方をむかますから」

「照れなくてもいいの?」

スフィアは一緒にいられるとわかつて安心したのかベッドに腰を下ろした。僕も腰を下ろす。やれやれ、やつと落ち着いた。

「さて、落ち着いたことだし、質問良いかの?」

博士が待つてましたと言わんばかりの口調でスフィアに尋ねる。

「ああ、私の知つていることはまだほゞないが、できるだけ答えよう」

「まずこの世界との国の基本的なことを教えてくれんか?」

「まずこの世界の名前はルーセリアと言つて、約三億人の人間との他たくさん種族が住んでいる」

その他つてエルフとかなのかな。会つてみたいものだ。

「ほつほつ、続けてくれ」

「この国の名前はハイランド王国。大陸にたくさんある人間の国。一つだな。私は他の国に行つたことがないからよくわからないが商業で栄えているらしい」

王国だったんだなこの国。どういとは王様がいるわけか。ど

うこう人なんだろうか。

「私は人間ではないから」「れぐらいしかしらないな」

スフィアは意外とこうか当自然とこうかほとんど世間にについて知らないらしい。

「かまわんぞ。他は自分の手で調べるからな。とにかく先程から思つておつたのだが、どうして言葉が通じるのだ?」

「そう言えればそうだ。今までどうして言葉が通じたんだろ?」
異世界パワーのおかげなのか?

「それは私の加護のおかげだな。契約してよかつただらう白河?」

スフィアがいきなり僕を押し倒す。
やめて、理性が飛ぶから!

「わしは空気が読める男だから下の酒場に行つてくるだ」

変なところで空気読まないで!——普段は読まないくせに!——

「ふふ、夜は長〜い」

スフィア落ち着いて!——抱きしめないで!

——うじて異世界で最初の夜は更けていった。

第三話 街に着きました（後書き）

感想・評価をお願いします！

第四話 魔力が最強ですと……！（前編）

やつすきたかも……。

第四話 魔力が最強ですと……！

第四話 魔力が最強ですと……！

翌日、僕らはこれからどうするのかを宿屋で話し合っていた。

「冒険者になるべきだと私は思つた。白河たちはこの世界のことを知りたいのだろう？ だったら冒険者が一番だ」

スフィアが昼近いのにまだ眠そうな顔をして言う。『じいろなし
か僕への目がきつい。求めに応じなかつたからつてひどい。

「冒険者か。良いのう。わくわくするのう。白河君、スフィア君、
さつそく冒険者になるのだ！」

博士は元気に叫ぶと巾着から新しい白衣を取り出して着た。白衣は博士の正装らしい。まずいぞ、このままでは冒険者なんて危険極まりない職業にされてしまう。

「あの、博士、スフィアはともかく一般人の僕が冒険者になるのは
厳しいと思うのですが？」

僕の進言に博士は不適な笑みを持つて答えた。

「なにをへタれておるのだ！ 男なら戦いや冒険にロマンを感じ
るはずだぞ！」

さすがに博士だ。人の意見はほとんど聞かない。この人と出会
つてから一日ぐらいしか経つてないが、行動パターンが読めてきた

ぞ。

博士はその後宿屋のおじさんから冒険者になる方法を聞き出し、宿屋を飛び出して行った。

「見ろ、ヒーローが冒険組合だ！」

博士はある建物の前で立ち止まつた。

こじんまりとしていて、ヨーロッパの田舎の役場といった雰囲気の建物だ。僕はヨーロッパに行つたことないけど。

博士は建物の扉を勢いよく押し開け、中に威風堂々と入つていつた。僕とスフィアも後に続く。

中では木製のカウンターに受付の人が座つていて、待合席のようなスペースにガタイの良い男たちがたむろしていた。

「いらっしゃいませ。何かご用ですか？」

受付の人が僕らに声を掛けてきた。赤い制服のよく似合つ人だ。加えて目が大きくて全体的にかわいらしい。

「新しく冒険者としてこの一人を登録して欲しいのだが

博士は僕とスフィアの方を示した。自分はならないらしい。ずるいぞ博士。

「わかりました。ではまずこの書類に必要事項を書いて下さい

受付の人は書類を差し出してきた。困ったな、読めないぞ。スフィアを近くに引き寄せ耳打ちする。

「スフィア、代筆してくれないかな。字が書けないんだ」

「私も人間の文字は不得手でな。精霊文字なら書けるのだが……。
すまないな」

精霊さんたち人間のことにもつと興味を持とうよ。

どうしよう、受付の人に素直に字が書けないと言ひべきなのか。

「もしかして、あなたたち字が書けないんですか？」

ペンが動いていないことに気がついた受付の人が話し掛けて来た。僕とスフィアは恥ずかしげに小さく頷く。

「やつぱり。そういう人結構いるんですよ。最初から言つてくれればいいのに」

受付の人は笑いながら書類とペンを自分の手元に引き寄せた。

「名前と年齢、出身地を言つて下さい」

出身地なんてどうすればいいんだ？　日本なんて言えないぞ。

「名前はスフィア、歳は十八、出身地は二カラ村だ」

「結構です。そちらの方もどうぞ」

スフィアはよどみなく答えた。どうしてそんなにすりすりと答えられるんだ。

参考にしようと思つた僕は受付の人に少し時間をもひつとスフィアに話を聞いた。

「どうして精霊のスフィアが質問に答えられるんだ？」

「名前以外は全部出まかせだからな。なに、英雄クラスの活躍をしている者でも出身がよくわからないのがいるとさえ聞いたことがある。大丈夫だらう」

そうするしかないな。僕は受付の人に出まかせを言つことにした。

「用はすみましたか？」

「まあ、なんとか」

「では改めて。名前、年齢、出身地を答えて下さい」

「名前は白河、歳は二十歳、出身地はウルト村です」

受付の人は適当な地名を言つたにもかかわらず、疑問は感じなかつたようだ。すぐに大きな水晶球を取つて来る。

「次は能力の測定です。この水晶に触つて下さい」

スフィアが水晶に触れた。水晶に文字が浮かび上がり、ちらりとどんどん変化していく。

「筋力百二十、魔力三百、知力百八十！　すごい！　一般の平均を大きく上回りますよ！　これなら期待できます」

受付の人があくまで満面の笑みでスフィアを見つめる。スフィアは恥ずかしそうに顔を赤らめると僕を見てきた。測定しろと言いたいようだ。

僕はおつかなびつくり水晶に触れた。

「筋力八十、魔力測定不能?」

受付の人は顔を歪めると水晶を引っ込め、また新しい水晶を持って来た。先程の物よりも一回り大きい。

「すいません。さつきの水晶、調子が悪い見たいでして。これに触つてもらえますか?」

僕はもう一度水晶に触れた。受付の人は水晶に浮かんだ数値を見て顔をまた歪めた。

「これもだめなの! 困ったなあ。少し待つて下さいね、すぐに戻りますから」

受付の人はカウンターの奥へと向かつた。奥からガタゴト物音がしてくる。

やがて彼女は体の半分ほどもある水晶球を額から汗を吹き出しながら持つて来た。そしてカウンターの上に置く。カウンターが嫌な音を立てた。

「はあ、はあ、これで測定しましょう。これでもだめだったら今日のところはあきらめて下さいね」

僕は測定できますようにと祈るような気持ちで水晶に触れた。

「筋力八十、魔力一万二千、知力百十……魔力一万二千ですってえ

!」

受付の人はカウンターに身を乗り出し僕を殺人的な目で睨んで来た。

「あなた人間ですか！　冗談は顔だけにして下さいよ！　ふざけ過ぎです！　魔力一万一千なんてどこかの神さまですか。はつきりしなさい！」

そんなに睨まないでこっちもよくわからないんだから。

僕はスフィアに助けを求めようとしたがウインクで返された。助ける気なしですか。

「落ち着いて下さいよ！　僕は人間ですから。神とかじゃありませんよ」

僕は受付の人を落ち着かせようと肩を抑えつけた。これがいけなかつた

「さわらないで！　なんか悪いことするつもりですね！　ああ、お父さん、お母さん、先立つことをお許し下さい……」

受付の人は意識を失つてしまつた。

僕らの冒険者としての初仕事は冒険組合職員の看病をすることにだつた。

第四話 魔力が最強ですと……！（後書き）

感想・評価お願いします！

第五話 クエストの準備は万全ですか？（前書き）

携帯が不調なのでミスがないか心配です。

第五話 クエストの準備は万全ですか？

第五話 クエストの準備は万全ですか？

僕は猛烈に謝られていた。

「すいません！ 気絶するなんて。本当に迷惑を掛けてしましました」

赤い制服の少女が頭を何回も下げる。そこまで迷惑を掛けられたつもりはないんだけどなあ。

「いいよ、別に時間はあつたし。それより登録はできるのかな？」

「もちろんです。手続きはカウンターでしますのでついて来て下さい」

少女はすぐに横になっているソファーから降りて受付のカウンターへと向かった。僕らも後を追う。

「リーナちゃん大丈夫だったかい？」

少女、リーナがカウンターに戻ると待合席にいた冒険者たちからささやかさず声を掛けられた。結構人気があるようだ。

「書類上のこととは先程までにできましたので冒険者証を発行しますね」

リーナは茶色い薄いカードのような冒険者証を取り出して、ペンで僕らの名前らしき文字を記入した。

「発行完了です。はいどうぞ」

リーナから手渡された冒険者証は滑らかなプラスチックに近い質感だった。魔法的な素材でできているのだろうか。しばらく眺めているとリーナは頭を下げて僕らに改めて挨拶してきた。

「冒険者登録おめでとうございます。これから新しく冒険者となられた一人に冒険組合について説明いたします。時間の方は大丈夫ですか？」

「時間がかかるのだろうか。長い説明は嫌だな、覚える自信がない。」

「大丈夫ですよ。マニュアルで言つように指示されますけどそんなに時間がかかるような説明じゃないですから」

いつの間にかさきほどまとと同じ雰囲気に戻つたリーナが僕の表情の変化に気づいたようだささやく。

「それではさつそく説明をします。まず冒険者の仕事は主に一種類あります。魔物の討伐と荷物の配達です。これらの依頼の依頼料で生計を立てるわけです」

リーナは男たちのいる方を指差した。男たちの奥の壁いっぱいに紙が何枚も貼られている。あれが掲示板のようだ。

「依頼の受け方は、あそこの掲示板で依頼の書いてある用紙を見つけて、それを受付の私に提出すれば受けられます。依頼完了後の依頼料の支払いなどは組合を通じて後日おこなわれます。ここまでで分からなかつたことはありますか？」

「大丈夫です。スフィアは？」

スフィアは少し頬を膨らませた。

「大丈夫に決まってるじゃないか。私の理解力をなめないでくれ」
僕がスフィアに謝るとリーナはつかれたような顔をして説明を再開した。

「仲良しですね、私もいつか……。説明再開しますよ。続いては冒険者のランクについてです。冒険者にはF～Sまでのランクがあります。このランクが上がるとより強い魔物の討伐依頼が受けられたり、より危険な地域に配達できたりします。またランクが高いと個人指定の依頼が来たりもします。このランクを上げるためにには依頼数を規定までこなすが、ランクの高い魔物を倒すことで上げることができます。個人的には一人の場合魔物を倒してくるのが手っ取り早いと思いますね」

リーナは僕らの顔を見回した。分からなかつたことはないか、ということらしい。僕は無言で頷く。スフィアも同じようにした。

「説明は以上です。お疲れ様でした」

説明が終わつたので僕らはさつそく掲示板へと向かう。それをリーナが止めた。

「待つて下さい。一人ともその格好で依頼を受けるつもりですか？」

僕は自分の服を確認した。ジーパンにTシャツだ。スフィアの方も昨日と変わらぬ白い民族衣装風の服。あ、やばい……。

「やっぱりそうだったんですね。ダメですよ、初心者は軽装で出かけて怪我することが多いんですから。組合から出て右へ行ったところにカール商店と言う店があります。そこなら装備一式に薬なんかも売っています。ですからそこで必要な用意を揃えてからもう一度来てください！」

リーナの力説に従い僕らはカール商店に向かうこととした。組合の入口のところで博士が僕らに合流する。

「冒険者にはなれたか？」

「はい、なれましたよ」

「そうかならよかつた。わしの方の調査も順調だしの。今からそく依頼に行くのか？」

博士は機嫌が良いようで口調が軽い。冒険者の方にさつきレーダーらしきものを向けているのを受付から見たがそれが調査だったようだ。

「いや、今から装備を買いに行くのだ。初めての装備はお揃いにしような」

スフィアが僕の代わりに博士の質問に答えて、僕に手を絡める。

博士は変な顔をした。

「装備を買いに行く？」

鎧ならわしが持つておるし武器もあるぞ」

博士は無限巾着からブレスレットを取り出して右腕に装着した。ブレスレットがカチッと音を立てる。

「変身！　ヒーロー！」

博士は雄叫びを上げ、拳を天に突き上げる！　博士の体をまばゆい光が覆う。眩しさに僕は目を閉じる。目を開くと博士は大変身を遂げていた。漆黒の輝く装甲は滑らかな流線型のフォルムを造りだし、動くときに嫌な金属音すら立てない。機能美の到達点のような姿だ。

「ふふ、これがわしのスーパー・コンバットスーツだ！」

「かっこいい！　是非とも譲ってくれ！」

スフィアが感動した目つきで博士に頼んだ。確かにかっこいい。でも制作者は博士だ。なにがある。

「待つた。博士そのスーツの性能つてどれくらいあるんですか？」

「音速以上のスピードと百階建てのビルをこなすにすることを可能とする身体強化機能、さらに超新星爆発にも耐える防御能力があるぞ！」

なんだろ？その性能。突つ込む気力すら削がれてしまつ。

「博士、そんな性能じゃあ使えませんよ

「むむ、足りないと言つか。まったく贅沢な奴だ。とりあえず改造するといふとするか

博士は盛大に勘違いをすると改造するので待つておれ、と言つて宿屋へ帰つて行つた。

最大の脅威を撃退することに成功した僕はカール商店に到着した。

第五話 クエストの準備は万全ですか？（後書き）

感想・評価お願いします！

第六話 街道を防衛せよ！（前書き）

まだ戦わない……。次回には戦います！

第六話 街道を防衛せよ！

第六話 街道を防衛せよ！

僕はスフィアに爆笑されていた。

「金も持たずに店に行くなんて白河は天然だな！」

金のことを忘れていたのだ。カール商店の店先でそのことに気づいた僕は、博士から金塊をわけてもらい今銀行へ向かっている。

「ここが銀行かな」

金貨のマークの描かれた看板の掛けられた角ばった大きな建物だ。ここが銀行と両替商の入った建物だろう。

僕はガラスのはめ込まれた扉を開けて中に入る。

「国営銀行です。なんの用でしょう？」

愛想の良いスーツの行員が擦り寄つて来た。

「両替はどこかな？」

行員は顔をしかめたがすぐに営業スマイルに戻る。

「両替はあちらです。両替後は是非とも我が国営銀行にござい

僕は行員に指示された窓口に向かった。窓口にはおばあさんが

座っていた。眼鏡を掛けていてかぎ鼻だ。

「すいません。これの両替をお願いします」

ねばあさんは眼鏡をクイッと上げて天秤を出した。

「これなら六十万七千ルーツになるね。金貨十一枚と銀貨七枚だよ
おばあさんは金貨と銀貨を袋に入ってくれた。六十万ルーツってどれくらいだろうか。宿屋が一泊一食付きで一万ルーツだから一ルーツは一円と同じくらいなのかな？」

「結構あるな。これなら良い装備が買えそうだな」

金に疎そうなスフィアはのんきに言った。そうかなあ、ファンタジーの武器とか防具つて馬鹿みたいに高いイメージあるけどな。僕は行員の熱心すぎる勧誘を振り切り、全額を持って行くことにした。

カール商店の店先。先程、ここで恥ずかしい思いをしたが、もうしない。

僕は両開きのドアを勢いよく開けた。

「こんにちは、お客様かい？」

髭で色黒なおじさんが調子よく僕に話し掛ける。

「冒険者になつたばかりなんですが、必要な物を買いに来ました

包み隠さず正直に何も知らない初心者だと話した僕におじさんは大笑いした。

「おもしれえな。たいていの奴は見栄張るのに素直に初心者だつて言つとは……。気に入つたぜ。任せてくれ、初心者用の装備一式と药みんなまとめて売つてやる」

おじさんは商品が雑多に陳列された店内をせわしく動き回つた。やがてたくさんの商品を抱えて戻つてくる。

「ほれ、お前さんと連れの姉ちゃんの一人分の装備だ。ちょっと着てみてくんねえか？ サイズを確かめたいんだ」

僕はおじさんの差し出した革の鎧を着てみた。さすがにプロだけあつてサイズはピッタリだった。

「スファイアはサイズ合つてる？」

スファイアは膨らみすぎた胸元を指差した。

「少しきついかな。だがまあ許容範囲だな」

おじさんは革の鎧のサイズが大丈夫だつたことを確認すると、药箱を見せてきた。

「この中には药草、毒消し、麻痺直しが五つずつ入つてゐる。冒険する上で一番基本的な药類だな」

おじさんは药をこつちに寄越すと、壁に掛けであつた赤銅色の

剣を持って来た。

「『れがうちで一番安い剣だ。他のはまだお前たちには早いな』

僕は剣を持ってみた。銅製でかなり重い。これを振るのはかなりの重労働だらう。

ふと隣を見るとスフィアが剣を軽々振り回していた。精霊さんは体の構造がおかしいと思います！

「気に入ったようだな。代金は全部で五十万ルーツだ」

僕はふくろから金貨を十枚取り出した。

「ありがとよ！　これからも安くじとくからカール商店をよろしくな！」

おじさんの気持ちの良い挨拶に送られて店を出た。その足で冒険組合に向かつ。

「『よいよ仕事だな。白河は心配しなくて良いぞ。私がしつかり守るからな』

男として女に守られるのはどうだらうと思つたが、スフィアの方が強いから仕方ないのか？

「いらっしゃい。あ、遅かったわね

リーナが僕らに気づいて顔を赤くした。遅かったから怒つたらしい。

「「「あん、お金用意することを忘れて」

「抜けてるわね。戻つて来るのがあんまり遅かつたから依頼は私が確保しといたよ」

「ありがとう。これがその依頼用紙?」

カウンターに置かれた用紙にスフィアが目を通す。

「かい、いの、……」

文字がよく読めないようだ。博士に頼んで翻訳機でも作つてもらおうかな。でもなあ、きっと作れるることは作れるだらうけど……。

「私が読みますよ。アーク街道に角猪が出没中! 撃退してくれれば一万ルーツ支払います、て書いてあるわ」

自慢げにリーナが胸を張る。スフィアが唇を噛んだ。

「受けますか? 割りの良い依頼だと思いますが

リーナは怒り心頭のスフィアを無視して僕に尋ねる。

「ほかには?」

「特にないですよ。時間が遅いですから

なら特に断ることはないな。受けますか。

「わかつた受けれるよ

「わかりました！」

依頼頑張つて下さいね」

「うじて僕らは街道を守るべく角猪に戦いを挑むのだった。

第六話 街道を防衛せよ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第七話 猪を狩れ！（前書き）

初めての依頼です。

第七話 猪を狩れ！

第七話 猪を狩れ！

リンドンから王都ルミウスまで続くアーク街道を僕らは地図を片手に歩いていた。

「街道を荒らす角猪と言う魔物を倒すためだ。

「リーナさんに貰った地図だとこのあたりに良く出没する見たいです」「

地図に書かれた×印の場所に到着したところで僕は足を止めた。辺りは一面の草原でリンドンの街が小さく見える。

「結構歩いたな。角猪が出るまで一休みしようか」

スフィアは座り込むと、リュックから水筒を出した。ちなみに水筒やリュックなどは金塊を博士にわけて貰つたときに、ついでに貸してもらつたものだ。

「角猪が良く出没するのは夕方らしいですから、もうそろそろ出でるはずですね」

太陽はすでにかなり傾いていた。夕方と言つて良い時間だらつ。

「あれかな？」「

スフィアが草原の向こうから迫つてくる影に気づいた。僕はスフィアが指差す方を向く。茶色で角の生えた猪の姿がいくつか見え

た。あれが角猪だろ？ 実に名前どおりのわかりやすい姿だ。

「奴らは基本的に突進しかしない。だがその威力はすごいぞ！
油断するな！」

スフィアは僕に注意をすると角猪の群れに切りかかっていった。スフィアは猪の突進を舞うようにかわし、体の横に素早く切り付ける。角猪は血しぶきを上げて倒れる。そして角猪の数はみるみる減つていった。僕も負けてはいられない。

僕も角猪に戦いを挑んだ。速い突進が僕に向かってくる。僕はぎりぎりでかわすとスフィアと同じように切り付ける。角猪の体から血が噴き出した。角猪の体は慣性にしたがい勢い良く地面に突っ込む。一頭倒した。余韻に浸る暇もなく、別の角猪が向かって來た。僕はさきほどと同じように、いや、ほんの少し手際よく倒した。

スフィアは僕が一頭倒しているうちに他の角猪をすべて倒していった。素晴らしい強さ。強すぎる。スフィアをこれからは怒らせないようにしよう。

その後僕は角猪の死骸に手を合わせた。僕なりのけじめだ。

「故郷の宗教なのか？」

角猪の角を剥ぎ取つていたスフィアが死骸に手を合わせている僕を奇妙な顔で見る。

「そんなところかな。一応お祈りしておきたかったから

僕はこう言つと角を剥ぎ取る。角を組合に持つて行つて初めて依頼達成と見なされるのである。

剥ぎ取りを終えるころには辺りはすっかり日が沈んで暗くなつていた。遅くならないうちに街へ急いで帰つた方が良いだろ？

僕らは戦いで疲れた体にあと少しだけ頑張つても「ひりひり」感じた。

「地面が揺れている……」

帰り道でスフィアがつぶやいた。地面が揺れている？　僕は目を閉じて感覚を研ぎ澄ました。小刻みに震えるように地面が揺れている。揺れはだんだんと近づいてきていた。何か、巨大な何かが近づいている！　僕は悪いことが起きそうだと直感した。

「大角猪だ！　どうしてこんな街の近くに！？」

スフィアは青ざめた顔をして喉が張り裂けそうなほど叫ぶ。僕には夜の闇で何も見えない。スフィアが呪文らしき言葉を紡ぐ。急に辺りが見えるようになった。辺りを見回すと、なんとトラックぐらいの大きな猪が巨体に似合わぬ速度でこちらに迫つて来ていた！　まだかなり距離があるが追いつかれるのももぐだらう。

「白河、あいつには剣が効かない！　しかも知恵もある。さつきの奴らがただ大きくなつただけではないぞ！」

説明してくれた後でスフィアは、期待を込めたよつた目でこつちを見てくる。
なんでだらう

「ああ、白河。今まで出し惜しみしていた魔法を使う時だぞ！」

「どうしてうるさいんだ！　僕は魔法なんて使えません！」

「あのね、僕は魔法使えません！」

スフィアはなぜか爆笑した。

「またまたー。もつたいてぶつて。使えるんだろ？ 魔法で大角猪を格好良く倒してくれ」

「だ・か・ら使えません！ 本当の本当に使えません！」

スフィアは笑うのをやめて僕の顔を覗いてきた。

「う、嘘だよな。あんなに魔力あるんだから使え無いなんてありえないよな」

「僕は異世界から来たって知っているでしょうに。向こうじやあ魔法なんて無いんです！」

スフィアはまた余裕のある表情に戻った。

「魔法がないならどうやって生活するんだ。ありえないだろ。やつぱり嘘だつたのか」

「あなたはどつかの貴族ですか！ とにかく僕は魔法を使えないんです！」

僕は何年ぶりかと思ったほどの大声を出した。

僕のあまりの剣幕にスフィアは僕の言つてることがよつやく本当だと理解した。

「ま、まずいぞ。白河の魔法が無いと大角猪は倒せない！ 逃げるぞ！」

僕らは慌てて逃げ出した。大角猪はすぐ後ろまで迫つて来ていた。

大角猪は大地が揺らぐような咆哮を上げて、僕らに突進して來た！

「大丈夫か！」

「なんとか！」

僕は突進をなんとか回避した。スファイアが僕の様子を確認していく。

大角猪はしばらく進んだところでくるりと反転し、僕らの行く先を壁のように塞いでしまう。

「どうする？」

「どうするって言われても……」

「どうすることも僕にはできない。僕らは大ピンチに陥つてしまつた！」

第七話 猪を狩れ！（後書き）

感想・評価お願いします！

第八話 何事にも加減が大切です！（前書き）

戦闘描写はつまくできているでしょうか。作者的にはなんとか頑張つたつもりです。

第八話 何事にも加減が大切です！

第八話 何事にも加減が大切です！

大角猪に僕らは追いめられていた。大角猪の突進は今のところからうじてかわせている。だが、舗装すらろくにされていないこの世界の街道の上の連戦は僕らの足に確実にダメージを蓄積させていた。

大角猪の体力は底無しなのか突進のスピードはまったく衰えない。このままではいつか大角猪にぺしゃんこにされてしまう！

「どうすれば良いんだ！」

絶望的な状況に僕は思わず叫んだ。大角猪を挟んで向こうにいたスフィアが僕の叫びに答えてくれた。

「少々不安だが仕方ない、精霊魔法を使うぞ！」

スフィアが大角猪の咆哮にも負けない大声で叫ぶ。

「白河、私の後に続いて呪文を唱えるんだ！」

「わかった！ 呪文を唱えて！」

スフィアは走りながらとは思えないほど流れるように美しい旋律で呪文を唱えはじめた。

「我是精霊の契約者なり、契約に基づき神秘を使はん」

戦いの最中で頭に酸素は行つてないはずだが、その呪文は頭に染み込むように入ってきた。

「私は精霊の契約者なり、契約に基づき神秘行使せん」

スフィアは僕がスフィアに続いて唱えていることを確認すると更に続ける。

「何ものにも染まらぬ空なる力よ、我が敵を貫け！ エナジーアロード！」

僕も声を掠れさせながらもスフィアに続いて唱える。

「はあはあ、な、何ものにも染まらぬ空なる力よ、我が敵を貫け！ エナジーアロード！」

体の中が燃えるように熱くなつた。熱した油を注がれたようだ！ 死にそうなほど熱いよ！

「慌てるな、体が熱くなつたんだな、その熱をこの魔物にぶつけるんだ！ 早く！」

スフィアは僕の方に大角猪が来ないようになつたのにか困になつてくれていた。スフィアのためにもなんとかしなければ！ 僕は熱を体から出して大角猪にぶつけることをイメージする。体が更に熱くなる。全身の血が沸騰しているようだ。

「うぐあ、がああ」

「頑張れ！ あと少しだ！」

スフィアが精一杯僕を応援してくれる。僕は熱を体から出すとイメージをより鮮明にしていく。体は際限なく熱くなつていいく。構うものか！　ここでやらなければ大角猪に殺されてしまう！

僕が心を決めた時それは現れた。

白く輝く光の玉だ。それは小さかつたがどこか圧倒的な存在感があつた。

玉は大角猪に向かつてゆっくりと飛んで行く。玉は大角猪に触れた。

視界を覆い尽くす光の奔流と猛烈に吹き荒れる爆風。突然発生したそれらが僕に襲い掛かつてくる。なすすべもなく僕は空に舞い上がり、地面に叩き付けられ……はしなかつた。地面の代わりに何か柔らかいものに叩き付けられたのだ。

「飛び込んで来るなんて、そんなに私のことが好きか？　なんなら今日あたりお相手してもいいんだぞ？」

いつもの軽い調子のスフィアの言葉に状況を理解した僕は慌てて移動する。スフィアが残念そうな顔をしたのは気にしない。

「しかし、すごいことになつたな。エナジーアローは敵を貫通するだけで爆発なんてしないのに……」

さつきまで僕らのいた方を見て、スフィアは口を半開きにした。大角猪だつたらしい肉の固まりや骨が散乱し、その中心には小さなクレーターまでできている。過剰威力にもほどがある！と、僕も思つた。魔法を使ったのは僕なんだけね……。

しばらくして僕らは大角猪の角を探し出し、街へ持つて行く。街へ着くと門の付近に冒険者らしき人が集まつていた。

「大丈夫でしたか？ さつきお一人が向かつた方から爆発音がしたので、みんなで調査しに行くところだつたんですよ！」

冒険者たちの中に混じっていたリーナが心配そうな顔をして話しつけてきた。

自分の魔法のせいどころになるとは……。みなさん心配かけて申し訳ない。

「さつきの爆発は自分の魔法のせいなんだ」

リーナやその周りの冒険者たちは顔を引き攣らせた。そして唐突に笑いはじめる。

「ははは、おめえ、冗談をいつちやいけねえよ。本当は何があつたんだい？」

おじさんが腹を抱えながら僕に聞いてくる。おじさんのまつたく僕の発言を信じてなさそな態度にスフィアが不機嫌に言い返した。

「白河の言つたことは全部本当だ。それ以上笑うな」

おじさんとスフィアは一触即発といつた雰囲気になつた。頼むからこんなところで厄介」と起こさないでくれ！

「たぶん本当ですよ。白河さん魔力一万一千もありますから……」

スフィアは呆れたような感心したような何ともとらえ難い態度を示す。周りにいた冒険者たちはインチキ商品でも見るかのような疑わしげな目をしてこつちを睨む。

「リーナちゃんは嘘つかねえしな。それが本当ならさつきの爆発が自分の魔法だ、ってのにも無理はねえな」

スフィアとすでに口喧嘩を始めていたおじさんも、胡散臭そうではあつたが納得したようだ。スフィアが離れていくおじさんを見て、僕に胸を張つた。あなたがおじさんを納得させた訳ではないですよ！

「でもどうしてあんな魔法を使ったの？　角猪相手にあれはないですよ？」

冒険者たちが帰つて行つたところでリーナが疑問を呈した。

「大角猪が出たんだ。あんなのが出るなんて聞いてないぞ！」

スフィアが怒つてリーナに詰め寄る。リーナは顔を青くした。

「大角猪！　Bランクの魔物じゃないですか！　どうしてそんなのが街の近くに……。ひょつとしてダタール帝国の言つてる魔王復活つて言つのもまんざら嘘じやないのかな？」

「今、魔王つて言わなかつた！？」

「え、確かに言いましたよ。冒険者や商人の間では有名ですから」

魔王までいるのか。お約束とは言えそんなやばい存在いらないよー。僕の顔色は青くと言うより白くなつた。

「ああ、もしかして魔王のことが心配になりました？　大丈夫で

すよ。ダーテール帝国のことですからまた魔族たちに戦争吹っかけた
いだけじょうし、それに勇者とか言うのも召喚されたようですよ。
だから心配しないで大丈夫です！」

まさか勇者までとは。ダーテール帝国やるな。だけど召喚つてど
こからだろう？ 地球からかな。だとしたら帰れなくて困つて
かもしね。 博士に頼んで勇者を連れて帰れるように頼もうか。
というか博士に勇者とか魔王とか話したら自分で魔王の城に特攻し
そうだな。あの人ならやりかねん。

「どうしたんだ？ 急に笑い始めたりなんかして。おかしいぞ」

スフィアが変な顔をしてこっちを見てくる。いかんいかん、博士
が魔王を巨大ロボで倒す場面を想像していたら笑つてしまつていた
らしい。

「怖がつたり笑つたり変ですね。夜も更けて来ましたし、白河さん
もおかしいみたいですから、続きは明日にしましょう」

リーナの宣言で今日のところはお開きになつた。なので僕らは
宿屋へと帰つて行く。こうしてこの日の夜は更けて行つた。

第八話 何事にも加減が大切です！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第九話 勇者一行に加われ！（前書き）

とにかく急展開です。

第九話 勇者一行に加われ！

第九話 勇者一行に加われ！

「勇者も魔王もすでに知っているぞ」

翌日、博士に依頼中とのあとのこと話をすると想定外の返事が返ってきた。

「どうして知っているんですか？ 僕らも昨日知ったばかりなのに」

「宿屋にダタール帝国から来たとか言う商人がいてな、そいつから聞いたのだ」

博士にしては普通の方法で知ったようだ。人の頭の中を勝手に覗いたとかではなくて良かつた。

「そのとき、ついでに面白いことも聞いたぞ」

博士は少しもつたいぶつて間を開けた。スフィアが興味津々と いう顔をしてベッドから身を乗り出す。博士の言う面白いことなんできつともくでもないことだと僕は思つんだけど……。

「実はな、三ヶ月後に開かれる武道会で優勝すれば、なんと勇者一行に加われるらしい！」

博士は僕らの顔を見据える。だいたい博士の言つたいことは想像できた。

「僕らが参加してどっちかが優勝しきって言いたいんですね……」

「ああそうだ。良くわかったな。さすがはわしの助手だ！」

「やつぱりそうか！すまない、スフィア頼む！　君に任せた！」
僕はスフィアを期待の眼差しで見つめた。

「うーん、たぶんのだが精霊の私は武道会には参加できないぞ。
精霊族だからな。白河、一人で戦つてくれ！　私は観客席から応
援するからな！」

た、頼みの綱のスフィアが！　どうするのさ！

真っ白になつていいく僕のことを無視していた博士が、ふと腕時計
を見てつぶやいた。

「そう言えばお前たち、組合に呼ばれてるのではなかつたか？」

スフィアが慌ててすでに真っ白になつていた僕を引きずつて組
合に行こうとした。そこへ博士が何か投げてくる。それは小さな箱
だつた。開けると中にはコントラクトが入つている。

「それを付けなければどんな文字も読めて書けるようになるはずだ。大
事にするのだぞ」

博士、ありがとう。　僕は博士に初めて感謝の気持ちを抱い
た。

僕は感動しながら組合へと向かつた。

組合に着くとリーナはすでに待ち伏せたびれたのか怒っていた。

「遅いです！ せっかく良いお知らせがあるのでから、早く来てくださいよ」

「『1』めん、時間の『1』と忘れてたよ。それで良いお知らせって何かな？」

リーナは一瞬呆れたような顔をしたが、すぐに笑顔になつてお知らせの内容を話してくれた。

「驚かないでくださいね、お一人は今日付けで『ランクになる』ことが決まりました！」

リーナは満面の笑みを浮かべているが、世間にうつとい僕らにはいまいちピンとこない。僕とスフィアは微妙な愛想笑いをした。

「お一人とも反応がおかしいですよ！ FからCなんて私でも初めて見たぐらいの大出世なんですからもつと反応してくださいー！」

リーナは頬を膨らませながら、奥から小さめの麻袋を一つ持つてきた。

「組合からなんと報奨金まででています！ 三十万ルーツです！」

今度こそ僕は驚いた。三十万ルーツと言つたら一ヶ月くらい生活できる額じゃないか。ずいぶんたくさん払つてくれたものだ。

「白河さん、今度は良い反応でしたね。もしかしてお金に弱いんで

すかー？」

リーナはからかうよつて言つてきた。お金が好きなのは否定しないけど守銭奴ではないぞ！

「白河さん面白いです……。さて、用事は以上です。ついでに何か依頼を受けてこせます？」

わざとびから黙つていたスフィアが「」と急に口を開いた。

「なあ、じつから頼みたいことがあるのだが良いか？」

リーナは変な顔をしながらもスフィアの質問に答える。

「別に良いですけど、どんなご用件ですか？」

「実は、魔法使いを一人探してくれないか？　白河を弟子入りさせてくれる魔法使いを」

リーナはいよいよ疑わしげな顔になった。

「どうして白河さんが弟子入りする必要があるのですか？」

スフィアは突然泣きまねを始めた。かなり下手くそだ。でもリーナはわからないようで、慌て始める。

「どうしたんですか！　私でよかつたらなんでも話してくださいー！」

スフィアは芝居がかつた口調で話し始めた。

「白河は深い事情があつて昨日初めて魔法を使つたのだ。そしたら初級の呪文が暴走してあんなことに……。私が教えてやれば良いのだが私にも事情があつてな……」

「わかりました！ 白河さんのために最高の魔法使いを探して見せます！」

リーナはすっかりスフィアにのせられてカウンターの奥に飛んで行つた。僕は勝手に話を進めたスフィアを自分のそばに寄せる。

「なんで僕が弟子入りするのさ。スフィアが魔法について教えてくれれば良いのに」

スフィアは申し訳なさそうに僕につぶやく。

「私は精霊族でも落ちこぼれでな……。精霊魔法は結構使えるのだが普通の魔法はあまり得意でないんだ。それに対し白河は人間の魔法使いに教えてもらつた方が良いかも知れないからな」

スフィアの目は真剣そのものだった。僕はその目を見てあきらめた。

「よつてその時リーナが戻ってきた。

「白河さん、すごいですよ！ Sランクの魔法使いがこの近くにいました！ 最近は活動していないようで、私も会つたことないですけど確かに住んでます！ 会つて見たらどうですか？」

リーナが興奮した様子で僕に話しかけてきた。僕はスフィアの方を見る。

「早速行つてみると良い。博士には私が行つておひつ……。これで
しばらくお別れだな。修行頑張るんだぞ」

スフィアは組合から出て行ひつとしたり、一ひつに戻つてきた。
そして僕の口……。

「しばらく会えないかもしれないからな。あと、私はひつでも白河
のこと考へてるぞ。だから修行中に浮氣なんてするなよ！」

スフィアはそう言い残して去つて行つた。顔を真っ赤にした僕
は、スフィアにもう会えない訳でもないのに少し寂しかつた。

第九話 勇者一行に加われ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十話 最強魔法使いに弟子入り？（前書き）

新キャラが一人も登場します！

第十話 最強魔法使いに弟子入り？

第十話 最強魔法使いに弟子入り？

僕はリーナさんに教えてもらった魔法使い、チエリスさんの家へと向かっていた。

「この森の奥か……」

僕の目の前には鬱蒼と茂る森が広がっていた。いかにも魔法使いが好みそうな感じの不気味な森だ。チエリスさんって人を襲う魔女とかじやないよね？ 僕は不安に感じながらも森の中に入つて行つた。

しばらく進んだところで後ろから足音がしてきた。僕は荷物を降ろして、剣を構える。足音はだんだんと近づいてきた。冷や汗が流れる。

「あなた誰？」

後ろから現れたのは小柄な少女だった。流れる銀色の髪に、雪のような白く透き通る肌、涼しげな青い瞳が魅力的な少女だ。彼女は黒いローブを着て大きなリュックを背負つている。

「僕は白河、この先に住んでいるチエリスさんのところに行こうとしているんだ。弟子入りしようと思つてね」

「私と同じ。一緒に行く？」

少女は良く澄んだ鈴のような声で聞いて来た。嬉しそうな声とは裏腹に、顔はあまり変化していない。表情の乏しい少女だな、と思った。だが、その表情の乏しさが少女の神秘性を増していくようにも思つ。

「良いよ。一緒にいくつか

僕が荷物を再び背負うと少女がくつついで来た。

「私の名前はナル。よろしく」

スフィア、これは浮氣じゃないからな！　僕は心中でスフィアに断りを入れると歩き始めた。

僕はナルと話をしながら森の奥へと進んでいた。

「そういえば、チエリスさんってどんな魔法使いなのかな。僕はSランクの魔法使いだつてことぐらいしか知らないけど……。ナルは知つてる？」

ナルは僕の質問に微妙に間を空けた後、答えてくれた。

「弟子入りするのに……。私が少し教えてあげる」

ナルは若干呆れたように話し始めた。

「百年前、ブラックドラゴンがこの大陸で暴れていた。そのブラックドラゴンは特別な個体でね、英雄と呼ばれる人が何人も挑んだ

けど倒せなくて、ついに討伐不可能とまで言われていたの。そのころ冒険者として活躍していたチエリス様はブラックドラゴンに戦い挑んだわ。そしてブラックドラゴンを最強魔法で一撃で倒してしまったの！ その後、古代魔法に傾倒したチエリス様はその研究をするために、今はこの森に家を建てて暮らしているそうなの。かれこれ五十年は森から出ていないらしいわ。その間にみんなに忘れられてしまったの。だから今では知る人ぞ知る伝説の人よ

「ドラゴンを一撃とは……！ あれ、でも百年前って言つことは死んでいるんじゃないかな？」

「百年前ドラゴンを倒したなら今は百歳超えてるよね？ 死んでいるんじゃないのかな？」

「チエリス様はブラックドラゴンを倒した時にその血を全身に浴びたらしいの。ドラゴンの血には老化を遅らせる効果があるわ。だから生きてるはずなの」

ナルはチエリスが生きてることに自信があるようだ。僕としても死んでいたら困るのだけ……。

少々不安になりながらも僕とナルは歩き続けた。

それから三十分ほど歩いたところで視界が開けた。森の中にしでは立派な古い家が見える。ようやく目的地に着いたみたいだ！ 家の前にいくと僕はドアをゆっくりと開いた。

「お客さん？ 何十年ぶりかしら」

奇つ怪なオブジェの飾られた玄関の奥から物音がしてきた。そして中から女人が出て来た。肩まで届く黒髪と意志の強そうな漆黒の瞳の人だ。この人がチエリスさんなのだろうか？ 二十代ぐ

らいにしか見えないぞ。とても百歳超えてるよつには見えない。僕が言葉を失っているとナルが僕に代わって質問した。

「あなたがチエリス様なの？」

ナルの問い掛けに女的人は胸を張つて答える。胸が揺れたのが気になつたのはスフィアには秘密だ。

「いかにも！ 私が世界最強の魔法使い、チエリスよ！」

「この人、博士と同じ雰囲気だ！ やばい！

ナルはそんな僕の心の内に気づくことなく話を進める。

「やつぱりなの。私たちはチエリス様の『高名を聞いて、弟子入りを希望して來たの！』

チエリスさんは顎に手を当て、ぶつぶつつぶやきはじめた。

「今は弟子もいないし、この子たち魔力大きいし……。男の方はへんな加護も受けてるみたいね……。うーん……」

チエリスさんはしばらくすると僕らの目を真剣な眼差しで見つめてきた。

「あなたたち、過酷な修行に耐えられる？ 私の修行はきついわよ

僕とナルはほぼ同じ答えを返した。

「頑張ります！」

「頑張るの！」

僕とナルの答えにチエリスさんは満足そうな顔をした。

「二人とも名前は？」

「白河です」

「ナルです」

チエリスさんは着ていたローブの中からメモ帳を取り出すと二人の名前をメモした。

「よし、今日から二人は私の弟子よ。明日から修行するから頑張りなさい！ あと、私のことはこれから師匠と呼ぶように！」

チエリスさん改め師匠の宣言によって僕とナルの長く厳しい修行が始まったのだった。

第十話 最強魔法使いに弟子入り？（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十一話 魔法使いは……体育会系？（前書き）

修行編の始まりです！

第十一話 魔法使いは……体育会系？

第十一話 魔法使いは……体育会系？

僕とナルは翌朝、師匠に呼び出されていた。まだ日が登る前のことだ。なので凄まじい眠気が僕を襲っている。それはナルも同じようであぐびを我慢しているのが見て取れた。師匠はそんな僕らの様子とは反対に元気そうだ。

「今から出かけるわよ。修行するのにピッタリの場所にね」

師匠は呪文を唱えて、家に魔法をかけた。家がすうっと見えなくなっていく。完全に見えなくなつたところで師匠は僕らを手招きした。

「ここの中から出なさい」

師匠は杖で直径三メートルぐらいの円を書いて僕らを円の中に入れる。そしてさらに杖を使い円の外側に文字らしき物を書き加えていった。

全ての必要な文字を書き加えると師匠も円の中に入り、呪文を唱える。一分もすると文字が光を発し始めた。

「転送魔法！ 始めて見たの！」

ナルが興奮して叫ぶと文字が一段と激しく光る。眩しい！ そう思つた瞬間、僕は空に放り出されたような浮遊感に襲われた。

『気がつくと辺りは森ではなかつた。山頂に雪を頂く巨大な山々に向かつて、荒涼とした荒野が辺り一面広がつてゐる。その赤ちゃけた荒野に白い筋が一本通つてゐた。その先の山の方から煙りが上がつてゐるのが見える。』

「エベレス……。世界で一番過酷な地域……」

ナルが意味ありげにつぶやいた。『こ』がどこか僕は知つていうな雰囲気のナルに尋ねる。

「『こ』がどこか知つてゐるの？」

「ええ、『こ』はエベレス、世界で一番高いマライア山脈のど真ん中よ。良質な鉱石が取れるところで有名なの。だけど空気の薄さと魔物の強さから世界で一番過酷な地域と言われてゐるわ」

世界で一番過酷つて……す』いな。いきなり世界一とは……。

ナルが話を終えると、何かわつかのような形の物体を手にした師匠が今後の説明をはじめる。

「ナルの言つたように、『こ』は世界で一番過酷と言われるエベレスよ。今日から三ヶ月、『こ』で修行するわ。まず『こ』の腕輪をつけなさい」

僕とナルは腕輪を受け取り、腕に装着した。

『ちゃんと着けたわね。それじゃ私に続いて呪文を唱えて。行くわよ。ファイアボール、ウインドカッター、アイスランス、ウォーターシールド！』

僕は嫌な予感がしたものの、師匠の後に続いて呪文を唱える。ナルも眉を僅かに寄せたあと、唱えはじめる。

「ファイアーボール、ウインドカッター、アイスランス、ウォーターシールド！」

僕とナルが呪文を唱えた。師匠はそれを確認すると、さきほど見た煙りの方を指差した。

「あの煙りのところに街があるの。そこまで走つて行くわ。ただし、呪文を唱えながらよ。もし途中で呪文を唱えるのをやめたり呪文を噛んだりしたら……腕輪からすごい電流が流れるからね。それではスタート！」

僕とナルは呪文を唱えながら走り出した。走り出した途端に空気の薄さが体に襲いかかる。しかも、呪文を唱えているので息を整えることすらできない。シユールな見た目に比べて非常にハードな訓練だ。尋常でない勢いで体力が奪われていく……。

十分もすると息が上がり、呪文を唱え続けるのがきつくなってきた。息を整えたい、呪文を唱えるのをやめてもすぐに再開すれば大丈夫かな……。そう思ったとき、僕の後方から聞こえていた呪文を唱える声が瞬間的にではあるが途絶えた。

「はやあああ！」

ナルから小さな体のどこからそんな音量が出るのか疑問なほど悲鳴が上がった。こ、こええ！ 唱えなきや！

僕はナルのそのまま死にそうなほどの声に恐怖に駆られた。その時、呪文を唱える口は止まらなかつたが、足がその場で止まつて

しました。

「ハハ、止まるなー！走り続けなさいー！」

僕よりずっと前方にいた師匠が立ち止まって叫ぶ。僕とナルは疲れた体をおしてヨタヨタと走り出す。

「遅いわね……。予定より遅れてるわ」

師匠は走るのが遅い僕らを見て何事か呪文を唱える。

地面が揺れ始めた。後ろを振り向くと地面がだんだん盛り上がりしていく。やがてそれは人型になつて歩き始めた。

「ゴーレムですか！ 師匠、あなた僕らを殺す気ですか？」

「ゴーレムは見上げるような大きさなので歩くのはかなり速い。僕らは体の限界を超えて走る、走る、走る！」

「頑張りなさい、あともう少しだから」

師匠は必死に走り続ける僕らの様子にとても満足そうだった。

「はい、もう呪文唱えるのやめて良いわよ

街の入口まで着いたところでようやく呪文を唱えることから解放された。荒い呼吸をこれでもかといつほどする。

息を荒くして、肩を上下に激しく動かしている僕らを見て師匠がまた呪文を唱えた。

「ふう、はあ、も、もう無理です！」

「無理なの……」

僕とナルはそれぞれもう限界だと師匠に訴える。師匠はそんな僕らの様子にほんのり笑顔になった。

「これ以上なんにもしないわよ、それヒール！」

師匠の杖の先から暖かな光が僕らに降り注ぐ。すると体が温かくなつて疲れがいつの間にか抜けていった。

「元気になつたようね。なら早速私について来なさい。宿とか確保するわよ」

師匠は街の中に入つて行つた。なんだろう、初つ端から修行について行ける気がしないよ……。というかこんな標高の高いところでマラソンやってよく死ななかつたものだ。異世界パワーなのか? だとしてもこの先きつときついよなあ……。

僕は先行きに不安を感じながらも師匠の後を追いかけた。

第十一話 魔法使いは……体育会系？（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十一話 修行はつらつよ（前書き）

修行編は後二話ぐらい続く予定です。

第十一話 修行はつらいよ

第十一話 修行はつらいよ

Hベレスで修行を始めて三週間が経過した。僕は空氣の薄さにめづやく慣れてきて、魔法も初級のものが一通り使えるようになつた。師匠によるとなかなか上達が早いそうだ。

「今日も修行をはじめるわよ。まずはランニング、スタートー。」

師匠がいつものよつて宣言すると僕らは走り始めた。師匠がHベレスの街はすれに借りた家を起点に、Hベレスの街を一周するコースで走る。最初の内は走るので精一杯だったが、最近では街の人挨拶する余裕も出てきた。

「おはよつま！」

「おはよつなの」

「おはようさー、今田もよく走るねえ。頑張れよ

朝早くから働く職人のおじさんたちに見送られ、坂道だらけの街を僕らは走りぬける。

三十分もすると十キロほどどの道のりを僕らは走り終えた。

「お帰り、だいぶ早くなつたわね

家の前で待っていた師匠は時計を見て嬉しそうに言った。

「師匠、今からまたいつもの集中力を養うための修行ですか?」

僕は師匠にこれからやることを聞く。もっとも返つてくる答えはいつも同じなのだが……。もしかしてを期待したくなるのが人間なんだろうか

「もひひひよ、板を持つていつものところに行くからついて来なさい」

師匠は立て付けの悪い扉をこじ開け、中から座布団、ぐらいの板を出して来た。

「あれこわいのに……」

ナルは泣きそうだったが板を持って来る。
ナルが持つて来たのに、男の僕が持つて来ないわけにはいかない。
なのでしぶしぶ僕も板を持って来た。

「それじゃ、行くわよ」

そろいつて師匠は街の中心にある工房に向かつて歩き始めた。
工ベレスは小さな街なので直ぐに工房についた。見上げるよう
に高い煙突を持つ巨大な工房だ。工場と言つた方が適切かもしけ
い。

「おはよう、また煙突借りるわよ」

師匠は工房の中で働いていたおじさんに話し掛ける。作業服の
よつた服を着たおじさんは師匠に怪訝な顔をした。

「借りるのはかまわねえが、見ていてこっちがゾッとする。もう少し何とか何ねえのか？」

師匠はおじさんに至極あつさりと答えた。

「無理ね、優しくしたらこの子たち伸びないもの」

師匠は呆然としたおじさんを放置して煙突の方へと向かって行つた。煙突の梯子を上り始めた。

僕らもその煙突の脇にある一一つの煙突にそれぞれ上った。煙突のてっぺんは三角錐の形をした赤い屋根が付けられている。僕らは屋根に板を乗せ、その上に座つた。

「今から集中力の修行をはじめるわよ。返事は？」

眼下に広がる景色に身を小さくしながらも、僕らは師匠に返事をする。

「は、はい、師匠」

「はいなの

師匠は僕らの返事に深く頷くと、杖を振つた。光り輝く虫のよくな物が飛びはじめる。

「今から一時間、いつものようにこの板の上で過ごしてもいいわ。しかも今日から集中力を妨げる虫を使うからそのつもりでね

長い一時間が始まった。街一番の煙突から広がる景色は白い山々と赤い大地の対比がとても美しい。だが、眼下には小さな人影が

見え、脳に恐怖を訴える。

風が吹いた。板が揺れる。三角錐の細い先端に乗せられた不安定な板が落ちてしまえば、僕らに待っているのは死のみだ。恐怖に血の気が引いていく。さらに風だけでなく、虫が集中を妨げ、板が小刻みに震え始めた。

「集中するのー！」

ナルが静かに僕に注意をした。頭が恐怖でいっぱいだつた僕は、ナルの注意で意識を再び集中させた。

長い時がまた流れ始めた。神経が研ぎ澄まして、わずかな空気の流れや地上の人々の話し声すら感じることができる。

「一時間たつたわ。今日の午前中の修行はおしまい。煙突を下りたら『飯を食べに行くわよ』

そういうつて師匠は煙突から飛びおりた。師匠は魔法を使い地上付近で急に速度を落とし、ゆっくりと地上に降り立つた。

僕とナルにはそんなことまだできないので梯子を使って地道に降りた。師匠は僕とナルと一緒に地上に下ろすことぐらいできるそうだが、やつてはくれない。面倒くさいんだとか……。大丈夫かな、この人？

「こんなにちは、いつもよりしく

僕らは最近通っている食堂についてた。鉱山の街らしく、労働者向けの安くてボリュームのある食事を出す大きな食堂だ。食事が出されると同時に僕とナルは勢い良く食事を胃の中に流し込んでいく。

「あんたたち良く食べるなあ……」

店の店長のおじさんが呆れたように僕とナルを見た。皿が二人の脇に山と積まれている。

「白河はわからないでもないけど……。ナル、あなた食べ過ぎじゃない？」

ナルは師匠をじっと睨んだ。目の鋭さが半端じゃない！ にわかに信じがたいほどだ。

「師匠は金を造れるんだからケチなこと言わないの！」

食べ物に対するナルの執着は凄まじかつた。師匠もナルの迫力にビビる。

「お嬢ちゃん、よっぽど腹が減ってるんだな。何をやつてるんだ？」

ナルは食べ物を口に含んだまましゃべる。

「はぐ、もぐ、大陸最強武道会に参加するために修行中なの」

おじさんの顔が凍りついた。周囲にいた客も動きを止める。

「大陸最強武道会だああ！ 正氣か？ 化け物しか参加しないあの大会に出場するだとおお！」

店長が店中に聞こえる大音響で叫んだ。そんなに驚くことなのか？

「正気よ。そのため修行をせざるんだから」

師匠は冷静に言い放った。店長は顔を引き攣らせている。

「まじかよ……。あの大会は死人が毎年出る上に会場が吹っ飛んだり、無茶苦茶なんだぞ！」

会場が吹っ飛ぶつてどれだけ激しいんだよ！　だいたいそんなに強い人たちがいるなら勇者いらなくないか？

「まあ疑いたければ疑つてれば良いけどね。たあ白河、ナル、いい加減食べ終わつたでしょ？　早く出るわよ」

師匠と僕らは食堂から出て家に向かつて歩いた。師匠は家に着くと黒板の前に僕とナルを座らせて、魔法理論について講義を始める。

「昨日は魔力制御とその理論の途中までやつたわね。今日はその続きからよ。では始めるわ。えーと……」

座学の時間はゆつたりと、つつがなく流れで行く。元の世界の学校のような感じだ。

そしてあつという間に日が傾いて夕方になつた。

「今日はここまで。」飯を食べて後はゆつくりしなさい

今日の修行は終わつたようだ。こんな日々が最近ずっと続いている。だが、僕らの修行の日々はまだまだ続いていくのだった。

第十一話 修行はつりこよ（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十一話 半端じゃない！ 最強魔法！（前書き）

連日投稿できなかつた……。すいません

第十二話 半端じゃない！ 最強魔法！

第十三話 半端じゃない！ 最強魔法！

修行開始から早一ヶ月半が経つた。もはやランニングは習慣となつた。今日もそのランニングを終えると家に人が訪ねてきていた。冒険組合の赤い制服を着た女性だ。

「この依頼を受けていただけませんか？ 今この街にいるランクはあなただけなんです！」

女性はかなり切羽詰まつた様子で師匠に依頼書を見せていた。何か緊急の高ランク依頼でもあつたのだろうか？

「困ったわね、今、私は弟子がいてその修行中なのよ。だからその依頼は……あ、お帰り」

師匠は僕らが帰つてきたことに気がついた。すぐに僕らは師匠に走り寄る。

「何があつたんですか？」

「何があつたの？」

僕とナルは同時に師匠に聞いた。師匠は困つたような顔をして依頼書を僕らに見せてくれた。

依頼書にはスノードラゴン討伐、報酬百万ルーツと書いてあつた。ドラゴン討伐！ すごい依頼だ。内容からするとかなり高ラ

ンクの依頼だらうか。

「「これどれくら」」のランクの依頼なんですか？」

師匠は少し呆れたような顔をした。ナルも両手を上に上げやれやれといった表情になる。

「スノードラゴンは雪山の主と言われる魔物。その討伐なら当然ランクなの」

ナルが勝ち誇ったように言つ。師匠も若干軽蔑したような目で僕を見て、ため息をついた。僕は異世界人だからわからないんですね！なんて言えたら良いなと思つた。

「あの、それで結局引き受けはいただけるんですか？」

制服の女性が師匠に再度尋ねる。師匠は僕とナルに視線を向けてた。

「白河、ナル、あなたたちランクは？」

冒険者のランクで良いのだろうか？ そう思ったときナルが師匠に言つた。

「私はDランクなの」

やつぱり冒険者のランクなのか。僕は少し白痴げに師匠に言つ。

「僕はCランクです」

ナルが悔しそうにこっちを見た。僕は大きく胸を張った。ナルは顔をほんのり赤くして、さらに視線に力を込めてきた。

師匠は僕らの様子を見て額に手を当ててまた、ため息をつく。

「何を低レベルな争いしてるのよ……。まあ良いわ。この子たち連れて行つて良いなら依頼を引き受けるわよ。どう?」

女性は考え込む仕種をすると、師匠に返事をした。

「我々としてはそれでも構いませんが、チエリスさんは大丈夫なんですか?」

師匠は胸を叩き、余裕たっぷりに答える。

「あなたちゃんと私のこと調べたの? ビツセ、この間組合に行つた時に知つたぐらいでしょ? う? いつも見ても私はドラゴン討伐のエキスパートよ。任せなさい!」

師匠の自信に、女性は心配そうにしながらも帰つて行った。

「急いで準備するわよ。目的地は雪山だから、それに応じた準備をしなさい」

いつも僕らは雪山へドラゴン討伐に向かうことになつた。

吹雪の吹き荒れる雪山を僕らはゆっくりと歩いていた。

「ほう、かなりの大物ね」

先頭を歩いていた師匠が遠くを指差す。師匠の指差した場所はそこだけ雪がなく、かわりに白い巨体が横たわっていた。周囲の巨岩に比べても圧倒的に大きい体は辺りに積もった雪と同じ色をしていたが、独特の息が詰まるような存在感を放っていた。

「恐い……」

ナルは真っ青な顔をして声を震えさせた。僕は声すら出なかつた。ドラゴンとはこんなにも恐ろしい存在なのか。

「これくらいで驚いてちゃだめよ。私の知つてゐる百年前の大陸最強武道会の出場者は人間だつたけどこれくらいの威圧感出してたわよ」

師匠は僕らを下がらせるとドラゴンに向かつて行つた……。

師匠に気づいたドラゴンは山を搖るがすような咆哮を上げた。師匠は咆哮を上げたドラゴンに真っ向から突つ込んだ。ドラゴンは師匠を倒すべく鋭い爪を振るう。轟音とともに迫る爪を師匠は空中に跳んでかわし、そのままドラゴンの前足を足場にして空高く舞い上がる。師匠の周りに幾つもの炎の球が発生し、ドラゴンに向けて殺到する。

顔のすぐ目の前からの攻撃にドラゴンはたまらず前足をめちゃくちゃに振り回した。当たりの音などが軒並み吹つ飛ぶ。

「ウインドカッター！」

僕はナルの頭上に飛んできた岩を魔法で細かく切り刻む。するとナルはこっちを見つめてきた。

「ありがとう……」

「お互い様だよ。それよりもあれ、やばいんじゃ……」

僕はドラゴンを指差した。牙と牙の隙間から青く輝く光が漏れている。膨大な魔力がそこに集まっているのは未熟な僕にすら良くわかる。

「ブレス攻撃！」

ナルが叫ぶと、ドラゴンの口から光の球が飛び出した。球は口から出ると一瞬で巨大化して師匠を飲み込むかのように襲い掛かる。まずい！ そう思う瞬間、師匠は球の表面を滑るように動いた。うまくシールドを張つて受け流したようだ。

「うわああ！」

ドラゴンのブレスが山にぶつかり山が地震のように揺れた。ナルが僕のパートにしがみついて来る。しかし師匠とドラゴンは地面の揺れなどお構いなしに戦い続ける。

「これで終わりよ」

師匠はブレスの後で口を全開まで開けていたドラゴンに、杖の先から雷をぶつけた。

稻妻が大気を貫きドラゴンの無防備な口の中に命中する。

ドラゴンは空気を爆発させるような叫びを上げた。だがさすがは雪山の主と呼ばれるだけある。なんとドラゴンは改めて口に魔力をため、雷を押し返したのだ。

「なかなか。あれを使いますか」

師匠はドラゴンの底力に軽く驚くと呪文の詠唱を始めた。師匠はほとんどの攻撃魔法を無詠唱で使える。詠唱すると言つことは大魔法を使う合図だ。

「あれはまさか……」

ナルはそういうて地面に伏せた。僕もナルに続いて何が起ころのかわからなかつたが伏せた。

「SAGDANJAD……」

詠唱を続ける師匠の足元が光り、魔法陣が幾つも発生した。それらは師匠の前で重なり合い、金色の神秘の輝きを放つ。周囲からそれらに向かつて魔力が流れ込み始めた。師匠は杖を地面に突き立て、呪文の最後の一文を唱える。

「ADGPG……スペクトル・アタッカア——！」

水の塊のような無色透明な魔力の塊が勢いよく放たれた。それは魔法陣をぐぐり抜ける度に色が加わり、やがて七色に輝く光の球となる。その七色の光の球は美しい光の軌道を空にを描くと、ドラゴンに吸い込まれるかのようにぶつかった。

辺りに途方もない量の光の嵐が襲い掛かつた……。

第十一話 半端じゃない！

最強魔法！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十四話 大陸最強武道会迫る！（前書き）

修行編最後です！

第十四話 大陸最強武道会迫る！

第十四話 大陸最強武道会迫る！

「つう、痛たた」

僕は腰をさすりながら起き上がる信じがたい光景が目に飛び込んできた。

雲が吹き飛ばされ、太陽が辺りを明るく輝いている。その太陽は師匠の呪文の想像を絶する威力の爪跡を明るく照らしていた。

辺りに積もっていた雪は吹き飛ばされ、巨大なクレーターが出来ていた。ドラゴンは跡形もなく消滅している。さらにドラゴンを吹き飛ばしただけでは呪文の勢いは止まらなかつたらしい。なんと山脈の山々を一直線に貫く丸いトンネルが出来ていた。

「さすが最強魔法スペクトルアタッカー。信じられない威力なの」

十メートルほど後ろまで吹き飛ばされていたナルが啞然とした表情でつぶやく。

「大丈夫かー？」

僕はナルに向かつて呼びかけた。ナルは元気そうに手を振つたが腰をさすつていた。

「少し腰を痛めたみたいなの」

僕はナルの元に駆け寄り、肩を貸した。ナルは僕の体に寄り掛かる。う、柔らかい、ナルって意外と……。頭をピンク色の思想が

駆け巡った。

「変なこと考へてる。白河なら構わないけど……」

鋭いナルは僕の鼻の下が伸びたことに気がついたようだ。いかん、気を引き締めなくては。

そうしている間に師匠がいる場所に到着した。

師匠の立っている場所はクレーターに突き出た半島のようになっていた。

「これが最強魔法の威力よ。魔法はこんな大破壊をもたらすこともある。今回スペクトルアタッカーを使ったのは魔法の恐さを知つてもらいたかったからよ」

師匠は真剣な鋭い顔をしてクレーターを指差した。

「師匠、それは良いのですがこれだとスノードラゴンの討伐をしたこと証明できませんよ?」

場の雰囲気を壊すようで悪かったのだが気になつたので僕は師匠に聞いた。師匠は口をあんぐりと開けた。

「しまつた、考えてなかつた!」

意外と抜けてるなあ。ナルも思わずクスリと吹き出した。すると師匠の顔がどんどん赤くなつていいく……！

「笑つたわね……。ふふ、それなら覚悟できてるわよね？からエベレスの街まで全力ダッシュで帰りなさい！」

師匠は杖の先に炎の球を作った。本気だ、目が冷たい！
僕とナルは師匠に追い立てられるように山を下つていった。

あれから数週間が過ぎた。結果的にスノードラゴンの討伐はスペクトルアタッカーでできたクレーターを見せて証明した。その時組合の人の顔が引き攣っていたのは気にしてはいけなかつたと思う。

「何を考えてるの？ 私のことなの？」

考えごとをしていた僕にナルが頬を赤くして聞いてきた。なんか最近、ナルとの間に妙な関係が芽生えつつあるような気がする。でもスフィアがいるしなあ、ナルは魅力的だけど……。

「何をイヤついてるの……。武道会まで後一週間を切つたのよ？ もつとも、私としてはそういうの好きだけど」

師匠が黒板の前から生暖かい目でこっちを見てきた。僕とナルは慌てて黒板に視線を戻した。

それから一時間後、座学の時間が終わると師匠は僕らに話を始めた。

「今日でエベレスでの修行を終えて、明日ダタール帝国に行くわ。それから向こうで最終調整をしたら、いよいよ大陸最強武道会よ！ 大陸最強武道会は各地から武術や魔法の達人、いや超人が集まる大会。でも、今のあなたたちは私の家にきた時とは比べものにならないほど強くなつたわ。それは保証しておく。だから頑張つて優勝を目指しなさい！」

いよいよか……。もともと博士に強制されて出場を決めた訳だが、もはやそんなことはどうでもいい。勝ちたい、そんな純粋な思いで頭がいっぱいだつた。

僕がひそかな決意を固めていると、ナルがこっちを見つめてきた。目には炎が燃えている。そうか、ナルも武道会で敵になるのか。何だか感慨深いな……。僕はナルに手を伸ばした。ナルは僕の手を掴み、僕らは互いの健闘を祈つてがっしりと握手をした。

「明日は早いわよ。だから今日は早めに寝なさい」

師匠がそうこうと僕らはそれぞれの部屋に戻つていった。

「行くわよ」

翌朝、僕ら三人は転移魔法でダタール帝国の首都ハミヴァイへと旅だつた。

「白河？ 白河なのか？ 一ヶ月半ぶりだな！」

ハミヴァイに着くと早速目の前にスフィアがいた。タイミング良すぎだ。到着する場所とか時間をあらかじめ予想してたのか？ 精靈さん特有の力とかで。

「あなたは誰？ 白河にずいぶんなれなれしいの！」

ナルは絶対零度の視線でスフィアを睨む。スフィアも負けずに言い返した。

「私は白河の嫁になる予定の女だ。お前こそなんだ」

「私は白河と一緒に修行した仲間で今の恋人なの。今、白河はあなたより私の方が好きなはず」

ナルがそういった途端スフィアの表情が凍る。そして口をしばらくパクパクさせた。

「な、何！ 本当なのか白河？」

スフィアがよつやく声を搾り出すと、僕に凄まじい目をして視線を向けてきた。ナルも僕の方を見てくる。た、助けて師匠！ 僕が師匠の方を見ると師匠はすでに集まっていた野次馬と同化していった。

「頑張つてね。私は人の修羅場眺めるの趣味だから」

そんな見捨てないでくださいー！ 僕は途方にくれた。その間にも二人の争いは激化していく。

「もういい。良く考えたら白河が好きなのは私に決まっているじゃないか。白河は胸の大きい女が好きだからな、お前は守備範囲外だろう」

「そんなことない。私もあなたと同じくらいあるもの」

「一人の争いはいつのまにか互いの胸の大きさくらべになつた。どうしてそうなつた。頼むから路上で変なことしないでくれ！ 僕は一人の間に割つて入り止めようとした。だが、外野、特におじさん連中が一人を煽るのでなかなかやめない。その時通りの向

「いつから聞きた覚えのある声がした。

「おお、白河。久しぶりだな。どれ、再会記念に景気よく波動銃でも撃つてやるつかの」

もじやもじやの白髪頭に、真っ白なシールドない白衣。そして何よりその突拍子もない発言。間違いない、博士だ！

なんという最悪のタイミングで……。こつしてハリカトイでの生活は波乱と共に始まつた……。

第十四話 大陸最強武道会迫る！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！（前書き）

ついに武道会編に突入です！　長かった……。

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！

僕らは波乱の再会を終え、ついに武道会の当日を迎えた。

「すごい人出ですね。一万人以上いませんか？」

会場となる競技場は様々な装備に身を包んだ冒険者たちや見物客で賑わっていた。楕円型をした野球場ほどもありそうな競技場の周りが、人で埋めつくされている。

「昔とかわらないわね。私たちも早く受付ませるわよ」

師匠はそういうと僕らの手を引っ張り、冒険者でごった返す受付へと向かった。

受付に着くと受付のおじさんが妙な顔をして僕ら三人を見た。

「三人で出場ですか？」

受付の人は痛い人でも見るような目をする。僕は辺り見回した。ゴツいおじさん連中に怪しい雰囲気たっぷりの魔法使いたちばかりが見える。なるほど……。あまりにも僕たちが弱そうだから疑っているのか。か、悲しくなんかないぞ！

「一人で参加よ。ほら、名前を書き込んで」

僕とナルは受付の人の微妙な視線を無視して出場選手名簿に書き込んだ。

「おつと、すまない」

肩に何かがぶつかった。僕が後ろを振り向くと着物を着た人が立っていた。長いつややかな黒髪に紅い着物が映えている。その後ろには黒い胴着を着た男たちが控えていた。

「師範、行つてらっしゃいませー！」

男たちは一斉に頭を下げた。女は何かの師範で男たちは門下生のようだ。

「あなたも出場選手なの？」

ナルが女に聞いた。女はナルに気持ちよく答える。

「ああ、私は桜坂　咲。東方で飛天蒼空流という流派の師範をしている。君たちも出場選手なのか？」

ナルは咲に元気良く答える。

「そりなの！　私はナル、こつちは白河よ。よろしく

咲は師匠の方を見てつぶやいた。

「あなたは出場しないのか？　かなりの腕前に見えるが……」

師匠は咲の質問に笑いながら答えた。

「ははは、私はこの子たちの師匠よ。付き添いでいるだけよ。だか

「出場は……うぬ？」

不意に師匠はある一人の冒険者を鋭い目つきで睨みつけた。さら
に顔を険しくして唸る。僕にはその冒険者はどこにでもいそうな冴
えない騎士風の男に見えるのだけど……

「まさか……。気が変わった。出場するわ」

師匠は出場選手名簿に名前をやひたらと書き加える。そんな、
師匠には勝てませんよー。

「師匠、どうして？」

ナルが師匠の顔を上田遣いに見る。師匠は田を逸りすと鞆から
漆黒のロープと長めの金属の杖を取り出した。

「まあ、気にしないで。それよりも一人にプレゼントがあるわよー。」

師匠は話をうまく逸らすとロープと杖を差し出した。滑らかな
質感のロープが肌に心地好い。

「それはドラゴンの皮！ しかも杖はオリハルコニウムでできてる
じゃないか！」

咲が僕らの貰ったプレゼントを見て叫ぶ。そんなにすごい物な
のか？

「師匠、ありがとうなの！」

ナルも感動した顔をして、師匠を尊敬の眼差しで見つめる。

「ありがとうございます！」

僕も良くなかったがすごいことのようなので深々と頭を下げる。

「私にとつて見れば、大したことじやないんだけどね」

師匠はかなり自慢そうに高笑いをする。

「すごい人なんだ……。これは油断できそくにないな。それじや、お互い頑張つて試合で会おう！」

咲は一言いふと競技場の中に入つて行つた。僕らもすぐに続いて中に入つていく。

競技場の中心にある舞台の上で背の高いステッスのような服を着た司会者が杖をマイクのよつた物を手にして大音響で叫んでいる。

「さあー、いよいよこの時がやつて参りましたあー！ 大陸最強武道会開幕です！ 今年は五十二人もの選手が出場いたしました。みな大陸各地から集まつた猛者中の猛者！ まさにこの大陸最強の座と勇者一行に加わる権利を賭けて戦うのにふさわしい大会となりました。それでは出場選手入場です！」

観客たちから大歓声が沸き上がつた。競技場が熱気に包まれる。

「白河負けるなー、優勝しろおー！」

控え室から出て行くと大きな旗を振り回して叫ぶスフィアの姿が見えた。は、恥ずかしい。

「以上五十一人が今回出場する選手であります。それではさーっそく記念すべき第一回戦第一試合を始めたいと思います。第一試合はロベルト選手対クレナリオン選手です！」

僕らは控え室に戻つていった。僕は第四試合から出場する。まだしばらく時間があつた。その間ナルと出場選手の観察をする。

「誰か有名な人とかいる？」

ナルはしばらく考え込むと一人の男を見た。鈍い銀色の鎧を着た、線の細い男だ。確かに近寄り難いような雰囲気の男である。

「全員有名だけど強いて言えば彼。彼は確かダタール帝国の騎士団長で優勝候補筆頭と言われている。何でも音より速い男つて呼ばれているんだとか」

「音より速いか……。本當だとしたら師匠なみの化け物だな。僕がしばらく思案していると師匠が僕を呼びに来た。

「白河、出番よ！ 頑張つて来なさい」

「はい、行つてきます！」

僕は師匠に気合いを入れて返事をした。

「私と師匠は舞台の脇から応援してるの。頑張つて！」

ナルは僕の手を見て言った。僕は深く頷く。そして舞台に向かってゆっくりと歩き始めた……。

第十五話 大陸最強武道会ついに開幕！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十六話 恐怖！

武道会の怪物（前書き）

主人公の初戦です。

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物

僕の試合がやつて來た。緊張した足取りで舞台に上がる。

「頑張つてなの！」

ナルが舞台のしたから応援してくれた。ナルの隣にいる師匠は舞台を見て考え込んでいた。師匠の視線の先には敷かれていた石が剥がれている場所があつた。

「舞台の石はジルカニアだからそう簡単には壊れないんだけど……。しまつたわね、試合見てれば良かつた……」

師匠のつぶやきが聞こえるが気にしている余裕はない。僕は舞台の向かいにいる対戦相手を見た。対戦相手は一メートルはありそうな筋骨隆々の男だった。その男は余裕こいて観客席に手を振つている。観客席から歓声が上がつた。僕が勝利するとは身内以外だれも思つてないらしい。

「さて、続きましては第四試合、白河選手対ウルグ選手です！ ウルグ選手は実力派傭兵团アサルトの団長で成績が期待されております。果してどんな戦いを見せてくれるのでしょうかー？ それでは試合開始！」

司会者の合図と共に試合開始の鐘が鳴らされた。ウルグは手に持つた巨大な剣を構えると僕に挑発してきた。

「坊主、お前見たところ魔法使いのようだが魔法使いは武道会には向いてないぜ。痛い思いする前に棄権したらどうだ？」

観客席からどつと笑いが起きた。鎧を着込んだ男たちが大爆笑していた。いろいろするな……。ダメだ、落ち着かないと！

「そんな奴一撃で倒しなさい！ 負けたら処刑よ！」

魔法使いを馬鹿にされたことが師匠には許し難いようだ。杖を手に暴れてい。それをナルが両手で抑えていた。

「愉快な仲間だな坊主。笑いが止まらねえぞ。とまあ遊びは終わりにして……行くぞ！」

ウルグは剣で切り掛かつて。舞台の端から端までの距離を一瞬で詰めてくる。でも動きが直線的でさらに大振りだ。僕は袈裟切りに放たれた剣をひらりと軽く回避する。ウルグは切る対象が突然いなくなつたのでその場でよろけた。

「何やつてるんだウルグー。俺はお前に賭けてるんだ。頼むから勝つてくれよー」

「そうだ、そんなやつさつと倒しまえよ」

観客席から大ブーイングがウルグに起きた。ただその中でスマリアだけは歓声を上げていたが。

「い、一撃で終わらせたら面白くないからな。サービスだよ、サービス。感謝しろよ坊主。」

ウルグは顔から蒸氣が出そうなほど赤くなるとさつきよりも勢い良く切り掛かつてきた。しかしさつきよりも速くなつてはいるが直線的で大振りな動きは変わつていない。僕はまた剣をなんなくかわす。ウルグはますます赤くなつて次々に斬撃を放つてくる。僕もまたその斬撃を次々に回避していった。

「あの人弱いの」

ナルがボソッとつぶやいた。その一言でついにウルグがおかしくなつた。

「許さん、この俺様をこけにしてくれあつて……。許さんぞお！」

ウルグは猛烈な勢いで剣を振り回しながら突つ込んで来る。なんかこの人かわいそうになつてきただな……。そう思った僕はウルグの突撃を回避すると背中に回り込み杖で思い切りついた。ウルグはあっけなく倒れた。あれ、ずいぶん弱いな。この大会の参加者つて意外と大したことないのかな？

「こ、これは衝撃の展開です！なんとウルグ選手がいとも簡単に倒されてしましましたあー！今回の大会はひと味違います！それでは白河選手に拍手をお送りください」

司会者の言葉に会場がどよめいた。賭けに負けたのか頭を抱える男に、逆に儲けて大喜びしている女など会場に混沌とした空気が満ちる。

「白河、頑張ったわね。さすがよ」

師匠は顔をほころばせて微笑んだ。ナルも優しく笑いかけてく

る。

「大したことないですよ。あの人あんまり強くはなかつたですから」

「氣恥ずかしくなつた僕は照れながら師匠とナルに言つ。

「それもそうね。まあ、準々決勝ぐらいになればあんたたちより強い奴も出てくるけどね」

師匠はそういうと控え室の方へ帰つていつた。ナルもそれに続いて行く。僕もすぐに会場を後にしてた。

その後の試合も順調に勝ち進んだ僕とナルは大きな控え室で他の選手たちとともに休憩していた。師匠は試合を見ると言つて舞台の方に行つていつていない。

「白河頑張つてるな！　このまま行けば優勝できそうだぞ」

スフィアが控え室に入つてきた。周りにいた選手がスフィアを見つめる。

「すごい美人だな。君の知り合いなのか？」

近くにいた咲がスフィアに話しかけられた僕を見て話しかけて来た。ちなみに彼女も勝ち残つている。

「そうですよ。大切な友達です」

スフィアが石になつた。それを見てナルが一ソマリと歯を釣り上げる。

「友達止まりの女なのね」

スフィアからプチッと音がしたような気がした。見てみると全身からオーラを放つてゐる……。

「ナル、今のは？」

怖いよ！　スフィアとナルの間に火花が見えた。

「なんだか知らないが止めた方がいいのか？」

咲が止めに入つてくれようとした所で突然師匠が控え室に飛び込んできた。

「試合がすゞいことになつてゐわよ！」

師匠は僕とナルを強引に引っ張ると舞台の前まで連れてきた。

「何ですかあれ……」

僕は舞台の上の光景に思わず息をのんだ。舞台にはなんとも異様な姿となつた選手が立つてゐたのだ……。

第十六話 恐怖！ 武道会の怪物（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから（前書き）

次回から本格的な戦いが始まります。

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから

舞台に立っている選手は大きな怪我を負っていた。小柄な体を巨大な切り傷が縦にはしつっている。そこまではまだ普通だ。武道会なら怪我をしていても何の不思議もない。だが傷口が尋常ではなかった。人間が怪我をすると血が出てひどいと骨が見えたりする。しかしその選手の傷口からはコードらしき物体が飛び出し、金属の骨格が覗いていた。

「人じやない……。ゴーレム？」

ナルが師匠の目を見て言つた。師匠は肩をすくめて言つた。

「あれだけ人間に近い形のゴーレムを作るのは私でもむずかしいわ。それにもし作れたとしても武道会に出場をせらるなんてとてもとも

……

師匠でも無理なのか……。僕は改めてその選手を見た。どこにでもいそうな気弱そうな小柄の男にしか見えない。恐ろしいほど良くなっている。考えたくないがこんな物を造るのはあの人しか……。

「えー、大陸最強武道会の規定には精靈族や魔族の参加禁止は記されていますが、それ以外の参加については記されておりません。ですのでクレナリオン選手の参加を引き続き認めます。試合を再開して下さい！」

『同会者の発言に会場が揺れる。あらうことがクレナリオンとか
言つ選手はこれからも出場を認められるらしいようだ。

「良かつたじやないか、出場停止にならなくて。でも君はこの試合
で退場だよ！　この僕が君を倒すからさー。」

もう一人の対戦選手らしい気障な優男がレイピアでクレナリオ
ンに攻撃を仕掛ける。かなり速い！　言つだけのことはある。
口先だけではないようだ。さらに優男は無駄のない流れるような動
きで次々と斬撃を放つていく。

「どうだい？　さつき君を切つた時より速いだらう？　これ以上怪
我したくないなら降参したまえ」

優男はレイピアで絶え間無く攻撃しながらクレナリオンに降参
を迫る。クレナリオンはニヤリと不適な笑みを浮かべた。

「オロカナ……」

クレナリオンは電話越しのような無機質な声で言つと優男のレ
イピアを掴んだ。優男は顔を赤くして力を込めて引き抜こうとする
が引き抜けない。やがてクレナリオンは優男の手からレイピアを強
引に取り上げるとその場で直角に曲げてしまった。

「馬鹿な……ミスリルのレイピアを曲げるなんて……」

言葉を失つている優男に、クレナリオンは嫌みつたらしい笑み
を浮かべて話し始める。

「オ前ヲ倒スコトナド簡単ダ。タダ修復機能ノ確認ガシタクテ切ラ

レタダケダ

そういうとクレナリオンは手に持ったレイピアの残骸を放り投げ、優男に近づいた。

ドンという鈍い音がすると優男が宙を舞う。優男は観客席に叩きつけられた。

「これは……なんとも驚きの試合でしたあーー。果して今後クレナリオン選手を止められる選手は現れるのでしょうかーー。」

しばらく会場が沈黙したあと同会者が魔法具片手に思い切り叫ぶ。試合が一応終わつたので僕らは重い足取りで控え室に戻つた。

「わしは知らん、本当にそんなクレナリオンなんて物は知らんぞーー。」

僕はスフィアに博士を呼んで来て貰つていた。無論、尋問するためである。この人がクレナリオンの製作者としか考えられない。

「そんなはずあつませんーー。あんな物を造るのは博士だけですかーー。」

僕は冷静に嘘をついているであらう博士をさうて問い合わせる。

「だから知らんものは知らんーー。だいたいわしは巨大ロボット派だ。人間サイズのロボットなんて造らんわーー。」

博士は無限巾着の中からロボットのフィギュアを取り出して熱く語り始めた。案外嘘をついてないのか？ だがそうすると一体

「あんな物を……。

「あれはその老人の造ったロボットとかいう奴じゃなくておそらく古代兵器よ。ああいつ兵器を文献で見たことがあるから」

「師匠が否定し続ける博士を見て言つ。古代兵器か。意外にそつかも知れないな。博士が造ったならもつと破滅的な性能だろつじ。」

「いざれにせよ、私が明日の準決勝で戦えば奴の正体がわかるな」

「近くで話を聞いていた咲がトーナメント表を見て言つ。うぬ……なんかおかしいぞ。」

「ちょっと待て。それまでに白河との試合があるじゃないか。準決勝に進出するのは白河に決まっているぞ！」

「僕の隣にいたスマーフィアが咲に囁き付いた。その通りとは言わないが、咲が勝つと決まつた訳ではないはずだ。」

「私は東方随一の剣士だ。白河に負けるつもりはない」

咲はさも当然という風に言つてのけた。何かが僕の中で切れた。

「そこまで言つなら僕には絶対負けませんよね?」

「もちろん。そうだな、もし負けたら白河に一生仕えてやるうじやないか」

売り言葉に買い言葉。咲はすうっと口を出しだ。よし、絶対勝つて謝らせてやる。

「白河、面白い約束をするのもいいけどそろそろ試合よ。次の試合に勝たないと咲と戦う」とすらできないんだから」

師匠がニヤニヤ笑いながら僕に試合の時間を知らせてくれた。僕は改めて気合いを入れ直して舞台に向かう。

「武道会一日目になった。今日は準々決勝から行われる。もちろん僕もちゃんと残っていた。

「それでは大陸最強武道会一日目を始めたいと思いまーす。まずは今日まで勝ち残った選手たち八名の入場です。拍手!」

司会者の合図とともに僕らは舞台の上に上った。僕は改めて周りの選手たちの顔を見る。ナル、師匠、咲にクレナリオン、色気たっぷりの女戦士に、ダーテルの騎士団長で音より速いとか言つ男。あれ一人足りなくないか?

「以上七名つて……おやおや一人遅れていますね、お、きたきた。以上八名で戦います」

遅れてきた男は昨日最初に師匠が睨みつけていた男だつた。師匠は再び鋭い目をして睨みつける。男は笑みを師匠に返した。なんだろ、得体の知れない男だ。

「皆様、お待たせいたしました。それでは準々決勝第一試合を始めたいと思います。白河選手と咲選手以外は控え室にお戻り下さい」

司会者が言つと僕と咲以外は控え室へと戻つてゆく。師匠とナルだけは舞台の脇から試合を見てくれるようだが。

「頑張つてなの。負けたらダメ」

舞台の下からナルが真剣な目をして言つてきた。僕は大きく首を振る。

「それでは準々決勝第一試合……開始！」

いよいよ僕の運命の試合が始まった……。

第十七話 ベスト8！ 戦いはこれから（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十八話 激突！ 杖VS刀（前書き）

今回は地の文多めです。

第十八話 激突！ 杖VS刀

第十八話 激突！ 杖VS刀

「頑張つて！」

「負けるな兄ちゃん！」

様々な人の叫びが広い武道会場にこだまする。準々決勝が始まつて武道会場の熱氣は最高調になつていて。

そんな中で僕と咲は試合開始早々、睨み合つていた。互いに互いの隙を見つけるべく神経を研ぎ澄ます。観客席も一切動かない僕らを見たせいか沈黙し始めた。そんな沈黙を破り、最初に動いたのは咲だった。動き始めた咲の姿が一瞬にして霞んだ。

その次の瞬間、金属同士がぶつかる硬質的な音が会場に響き渡る。緊張の糸の切れた観客席から大歓声が上がつた。会場に熱が戻つていく。

「やるな、普通はこの時点で武器が真つ二つになつてるはずなのだが

が

咲は僕に自慢の刀を杖で防がれたことに感嘆したようだ。心底驚いたような顔をしている。

「どういたしまして。少しば見直しましたか？」

僕は腕を震えさせながらも聞いた。軽口を叩いて余裕があるよう見せてはいるが僕に余裕はまったくない。咲の腕力が細い身体

に見合はないあまりにも大きなものだったからだ。

「そうだな、少しはな！」

咲はそういうと僕から距離を取つた。顔からは笑いが見てとれた。咲はその笑みを保つたまま刀を顔の前に構え、目には見えないほどの速度で振るつ。

「うううー！」

「大丈夫なの！」

突然唸りを上げた僕に、ナルが心配そうな声をして聞いてきた。僕は無言で首を振る。体中で鋭い痛みを感じたのだ。咲の刀から放たれた何かが僕の身体を切り裂いたのだろう。見るとロープから露出された腕や足のところどころに深い切り傷が出来ていて。もし師匠に貰つたロープを着ていなかつたら身体中が切り傷だらけになつていたかもしれない……。想像するだけで僕は背筋がゾッとした。

「私の放つかまいたちは目には見えないぞ。さあどうする？」

咲は高らかに笑う。く、目には見えない攻撃か……このままで咲の思うつぼだ。そう思った僕は咲との距離を詰め、杖で攻撃を仕掛ける。

狙いすました僕の杖が咲の脇腹を打つべく振るわれた。咲の刀と僕の杖が真つ正面からぶつかる。

杖と刀は激しく火花を散らし、金属音を掻き鳴らす。

僕の腕はぶつかり合う力の大きさに僕の腕は悲鳴を上げた。一方、咲は余裕のある態度だ。やはり剣士と魔法使いでは地力が違うか……。

修行しているとは言え、僕と超人レベルの剣士の咲との間には超え難い差があった。

しかしよい作戦はない。僕は咲から一度距離をとり銃ぜり合いをやめる。そして改めて次々と杖を振るう。右、左、正面、……杖が振られる度に刀によつて防がれた。その度にキンッと澄んだ音が会場に響き、火花が舞台の上に咲く。

「白河、咲に近接戦で勝つのは無理よ！ 危険を犯してもいいから咲から離れなさい！」

僕の様子を見兼ねた師匠が僕にアドバイスをしてくれた。やはりそうするしかないか……。

僕は師匠の意見に従つて、かまいたちを放たれることを覚悟して咲から距離をとる。そして、僕は咲がかまいたちを放つ前になんとか魔法のイメージをして無詠唱で魔法を放つ。

数十ものバスケットボールほどの炎の塊が僕の周りに発生した。それらは咲に向かって炎の弧を舞台の上に描き飛んでいく。当たれば人一人ぐらい簡単に灰になる魔力は込めてある。だが、咲はなんと刀で炎を斬りはじめた。半分にされた炎は舞台を黒く焦がしていく。観客席からわあっと驚きの声が上がる。

なんて非常識な……一瞬驚きで僕まで観客たちのように思考が止まりかけた。しかし僕はすぐに思考を再開できた。僕の周りにまだ数十もある炎はしばらくの間とめどなく咲を襲い続けるからだ。

「いいわよ……。勝てる！」

師匠のつぶやきを僕はハツキリと聞くことができた。だが僕にはどうにも嫌な予感がしていた。咲がこのままやられるとは思えなかつたのだ。

それからしばらくして、いた黙々と炎を斬り続けている咲の額か

ら汗が滴り落ちた。

「白河、私は君を舐めていたようだ。

」こからは本氣でやるつ。白河、私の流派の名前を覚えているか?」

咲は炎の塊を次から次へと切り裂きながら僕に尋ねてきた。咲は炎の塊に囲まれながらもどこかまだまどりのある顔をしていた。なにがある。そう思った僕はなんで今そんなことを聞くんだ? といつ疑問を心の底にしまい込んだ。そして咲の問いかけに素直に答える。

「飛天蒼空流でしたよね?」

僕の答えに咲は炎を斬りながらも満足そうな顔をした。そして上機嫌で話を始める。

「そうだ。では今、飛天蒼空流がなぜその呼ばれるようになったのか教えてやるつ……」

咲は不気味な表情をすると隠り始めた。髪の毛が逆立ち身体が揺れ始める。

「嘘……ありえない」

しづらしくして、咲のナルが頬をつねりながら呆然とつぶやいた。

「東方にそういう流派があるとは聞いたことがあるけど実在したとは

……」

師匠も咲の様子を見て唖然としていた。その口は半開きになつ

てしまつている。

「飛ぶとは……」

僕は咲を見て思わずつぶやいた。

信じられないことに咲はその時、空に浮かび上がっていたのだ。

魔法でも完全な飛行は難しいのに……。

「ああ、試合はいいからだ！」

咲は上空で大声で宣言した……。

第十八話 激突！ 杖VS刀（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十九話 空中剣技を打ち破れ！（前書き）

地の文がまた多めです。戦闘描写だとどうしてもそうなってしまいます……。筆力不足かな？

第十九話 空中剣技を打ち破れ！

第十九話 空中剣技を打ち破れ！

空中に浮かび上がった咲の宣言に会場全体が大きく揺れた。観客たちが次々に空を見て叫ぶ。

大騒ぎとなつた会場を見て咲は軽く微笑むと、その高度を上げ始める。咲の身体は上へ上へと空を駆け上がりしていく。瞬く間に彼女の身体は雲を突き破り、見えなくなつてしまつた。

「鳥？」

首を痛くなりそうなほど傾けて上を見ていたナルがつぶやいた。僕の目にも何かが見えた。白い羽根を広げた鳥のような物が空一面に見えた。それらは舞台に向かって急降下してきている。

「まずい！ シールドよ、シールドを張りなさい！」

空を眺めていた僕に師匠が顔を青くして叫んだ。僕は慌てて、舞台の上にあつた炎を消した。そしてその魔力を使いシールドを張る。直後に鳥のような斬撃が舞台に突つ込んできた。張られたばかりのシールドに凄まじい圧力がかかる。まずい、このままじゃシールドが持たない！ そう思つた時、シールドにビビが入つた。雨のようになり注ぐ斬撃によりビビは少しずつ大きくなつていく。シールドが破れたら終わりだ！ 僕は杖を舞台に突き立てて踏ん張り、シールドに魔力を注ぐ。膨大な魔力を注いだおかげでシールドのビビは広がらなくなり、逆にふさがり始めた。

唐突に攻撃が止まつた。僕は上を見上げる。青い炎を纏つた咲

が刀を構えたまま彗星のような速度で接近してきていた。

「もうつたあ！ 彗星剣つ！」

普通に回避したんじゃ間に合わない！

僕は呪文を使い足元を爆破した。パンッと響く爆発音とともに僕の身体が吹っ飛ぶ。そのすぐ脇を咲が掠めていった。

直後で舞台の上で大爆発が起きた。地面が揺れ、激しい爆発音が轟きわたり、爆風が辺りの物や人を吹き飛ばす。

「うう、なんて威力なんだ……」

咲の彗星剣という技は呆れるほどの破壊力だった。舞台の真ん中が半球状にえぐられてしまっている。

空中から舞台を見回した後で僕はもう一度魔法を使い、背中の辺りで爆発を起こした。観客席を飛び越えそうになっていた僕の身体は急に方向転換して舞台の方へと飛び始めた。そしてそのまま舞台に頭からダイブする。

「大丈夫なの！」

「大丈夫か、白河！」

ナルと師匠がそれぞれ声をかけてくる。心配させたくないのでも僕は肩をさすりながら手を振った。二人はホッと息をついた。

「爆発を利用して飛ぶとは……。無茶をしてくれるな

穴の中から出てきた咲が開いた口がふさがらないといった顔をして僕の方を見ていた。埃まみれの着物やあちこちにできた傷が彼

女にもダメージがあつたことを物語つていた。

「咲の方こそ。本氣で死ぬかと思いましたよー。」

咲は僕の言葉を聞いて豪快に笑つた。割合真面目に言つただけにショックだ。

「白河らしいと言つつか……。まあいい、では行くぞー。」

咲が地面スレスレを飛んでこちらに切り込んできた。僕は杖でそれを受けとめる。攻撃を止められた咲はそのまま空へと離れて行き、勢いをつけて再び攻撃してきた。僕もまた受け止める。ヒットアンドアウエイ戦法つてわけか。でもそうはいかせないぞ。

そう思つて僕は速度に優れたツララで咲に攻撃をした。無数のツララが咲目掛けて飛んでいく。咲はツララが飛んで来るのを確認すると飛ぶ速度を上げた。ツララは咲がすでに通りすぎた場所に次々と飛ぶ。ツララは一つも咲に当たることなく空の彼方へ飛んで行つた。

「そんな魔法じゃ倒せないのー！」

ナルが僕を見兼ねて言つた。それに対して師匠は微妙な顔をしている。確かに今のままでは拉致があかんだけ。もっと大規模な魔法を使う必要がある。でも咲は僕が大規模な魔法を使おうとしたらきっとどこかに避難してしまつ。おそらく師匠もそう考えているから微妙な顔をしているんだろう。なんとか咲に気づかれずに大規模な魔法を使う方法はないものか。

「中々頑張るな。普通はへばつてぐるものなんだが……」

咲の方も粘る僕に対して決め手がないのか焦ったような顔をしていた。

「このまま体力勝負に持ち込んでしまおうか……。

僕の頭にふと、そんな考えがよぎる。だがいくら高い山の中で鍛えたといつても咲の方が体力は上だろう。

どうしたものか……。僕は頭から湯気が出そうなほど作戦を考えた。しばらくの間、咲と僕は幾度なく攻撃と防御を繰り返した。その中で僕の頭に一つの作戦が浮かんだ。その作戦はかなり運要素が大きい作戦だが今は賭けるしかない。

「咲、そういうえばさつきの彗星剣って言つのは使わないのかな。あれをもう一度使えば僕に勝てると思つけれど」

僕は質問しながらたくさんの炎の球を咲に向かって飛ばして行く。当然それらは咲には当たらず空の彼方へと飛んで行つた。 ら咲に言つた。

「あれは消費が激しいから使わないんだ」

咲は炎を回避しながらも律儀に答えた。僕はその答えが期待通りだったことにほくそ笑む。そしてさらに炎を咲に飛ばし続けながら咲に言つた。

「使わないんじゃなくて使えないんじゃないの?」

咲の表情が固まつた。さらに彼女は拳を握りしめ始める。

「言つたな……。それを言つたことを後悔させてやる

咲はそういうと空高く舞い上がつて行つた。やがて身体が見えなくなつてしまつた。

「どうするんだ白河？ もう一度あれをやられたら死ぬぞ？」

「そう、危険な」

咲が見えなくなつたところで師匠とナルが怪訝な顔をして聞いてきた。僕はナルと師匠に笑つて答える。

「大丈夫ですよ。作戦考えましたから。師匠ならいままでの僕の行動でわかるんじゃないかなと思いますけど」

師匠は妙な顔をした後で納得したような顔になつた。だがまだその顔は心配そうだ。

「考へてることはだいたいわかつたけど、その作戦大丈夫なの？ 途中でばれそうだけど」

師匠の問いに僕は吹つ切れた笑みでもつて答える。

「その時はその時です。きっとなんとかなりますよ」

師匠は、まあそれもそうかもね、と言いつと綺麗に微笑んだ。ナルも釣られてわずかに笑う。

こうして試合の結果は天に任された。

第十九話 空中剣技を打ち破れ！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十話 決着と咲の決意（前書き）

お気に入りが五十を超えるました。読者の皆さんに感謝です。

第二十話 決着と咲の決意

第二十話 決着と咲の決意

空の上から斬撃が降り注いできた。彗星剣の前振りだ。僕は舞台中央の穴の中にある土を利用して頑丈な壁を作る。さつきは硬い石が敷かれていたのでできなかつたのだが、この方が魔力が少なくて済む。そして節約した魔力を「作戦」のために使うのだ。

斬撃が土の壁を叩き、爆撃でも受けているような衝撃が僕を襲う。

斬撃が終わつた。空の高いところに青い光が見えた。それはこちらに向かつて急速に接近してきている。

「これで終わりだあー！」

咲が力の限り叫びを上げた。

それを聞いた僕は「作戦」を開始する。僕は土の壁の中から出てきて杖を振り上げた。空の彼方から炎の球が無数に舞台の上に集まつてくる。僕がさつき咲に向けて放つた炎の球だ。あらかじめそれらを離れたところに待機させていたのだ。それらの炎の球は次々と融合して巨大な球を形成し始める。

すぐに球は青い輝きを放ち舞台を覆いつくすほどに成長した。猛烈な熱が辺りを支配する。その様子はさながら小さな太陽が生まれたようだつた。あまりの熱さに観客席から人が逃げ出していく。師匠とナルもシールドを張つて熱に耐えていた。

「いっけえー！」

僕は歯を食いしばり気合いを入れた。太陽がゆっくりと空に向

かつて上がり始めた。

上空の咲の顔が驚愕に歪んでいく。

「ぐ、か、かわせない！」

咲はなんとか回避をしようと試みたものの、彗星の勢いを持つた身体は方向転換を許さない。

咲の身体は太陽の中に吸い込まれていった。

一瞬後で鈍い音がした。

咲が舞台の上に落ちたのだ。すぐに僕は魔法を解除する。太陽が搔き消え、辺りに静寂が戻った。僕は横たわったまま動かない咲に駆け寄つた。着物が焼け焦げ、肌が煤けている。僕は真っ黒になつた咲の顔を見つめた。咲の目がゆっくりと見開かれた。咲の漆黒の瞳が僕の目を見据えてくる。

咲の口が重々しく開かれた。咲の唇が震えながら言葉を紡ぎ始める。

「私の負けだ……。完敗だ……」

会場全体が爆発したような興奮に包まれた。司会者がどこからか現れた。さらに舞台の上に昇つて僕の勝利を宣言する。

「準々決勝第一試合の激闘を制したのは白河選手でしたあー皆さま、彼にどうか盛大な拍手をお送りください！」

観客たちは総立ちになつて拍手を始めた。なんだか恥ずかしいな……。僕は観客の視線に恥ずかしさを感じながらも咲を舞台の端まで引っ張つた。師匠とナルが舞台に上がり、咲に駆け寄つてくる。

「あおじゅみゅー……ヒール！」

師匠が咲に治癒魔法をかけた。暖かい光の粒が杖の先から出てきて咲の身体に降り注ぐ。傷が光って少しづつふさがつていった。

「うう……ふう、すごいな。もつ楽になつて來たぞ」

咲は身体を起こすと手を閉じたり開いたりした。良かつた、傷はだいたいふさがつたようだ。

「それではまだ今から舞台の復旧作業を行います。次の試合までしばらくお待ち下さい」

司会者がそう言つと黒服を着た魔法使いたちが現れ、舞台の復旧を始めた。その魔法使いたちはこちらにもやつて來た。

「そちらの選手の治療をさせていただきます」

黒服の魔法使いが咲の方に来て、彼女を連れて行こうとした。それを咲自身が立ち上がつて止める。

「私は大丈夫だ。舞台の方を早く復旧してくれ」

咲は黒服の魔法使いを追い返すと僕の方を見た。

「白河、話があるからついて来てくれ」

咲はそう言つと控え室に戻つて行つた。僕は咲の後を追う。

「怪しい気配がするのー。」

ナルも慌てて僕の後をつけて来た。師匠はニヤリと笑つて手を振りながら僕らを見送った。

咲は控え室の端まで来ると門を止めた。そしてゆっくりと話を始める。

「白河、試合の前にした約束を覚えていいか？」

咲は顔を赤くして声を震えさせながら僕に聞いてきた。あの約束は半分冗談だったのにな。もしかして咲はあれを本気としたのか……。

「覚えていいけど、あれって場の勢いで出た冗談だったんじゃないの？」

僕の後ろにいたナルも無言で頷いた。

しかし咲は想定外のことを言ひはじめた。

「私も試合が始まるまではそうだった。だがな、試合を行つていううちに白河の強さに惚れたといつが……と、とにかく、私を白河の家来として仕えさせてくれ！」

なんですよーーーいきなりすぎますよ咲ーーー僕の頭が混沌の渦に飲み込まれた。様々な考えが脳裏をよぎる。そんな混沌とした僕の頭はすぐに冷やされた。ナルが僕の背後で絶対零度のオーラを発したからだ。

「それはできないわ。だって私が認めないもの」

ナルは冷え冷えした声で言い放った。しかしそんなナルの冷たく響く声にも咲は動じはしなかった。

「どうしてナルに認めてもらわないといけないんだ？」

咲の質問にナルは自信満々に言い切った。

「私が白河の嫁になるからよ」

「なんでナルが僕の嫁になるの？　ナルじゃ嫌とかではないけど突然嫁になる宣言は……。」

「白河が困った顔をしているじゃないか。まだ嫁になつた訳じゃないんだからナルは関係ない。そういうことで白河、今から私は白河の家来だからな。よろしく頼むぞ主殿」

「うして愉快な仲間がまた一人増えました……。」

第一十話 決着と咲の決意（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十一話 殺戮マシンは止もらなー（前書き）

敵キャラの強さがうまく表現できたか不安です……。

第一十一話 殺戮マシンは止まらない！

第一十一話 殺戮マシンは止まらない！

あの咲の衝撃発言の後、控え室に師匠や博士たちが来ていた。

「なんだと、お前が白河の家来だと……」

スフィアが咲の発言をナルに聞かされて凍りついていた。一方、咲は勝ち誇ったような表情をしている。その後ろで博士が不思議な顔をしていた。

「別に白河に家来が出来ても良いじゃないか。ただしその白河はわしの助手だからな」

スフィアとナルが同時に顔を赤く染めて博士に力一杯反論をした。

「ダメ！」

博士は一人の剣幕に変な連中だな、と首を捻るとその場から離れていった。

博士が離れると咲が一人に笑いながら話かけた。一人は咲を睨みつける。

「そんな顔をしないでくれ。私はあくまで家来になるのであって、恋人になるわけじゃないんだから。もつとも白河が私と付き合ったいとじうしても言つなら……か、考えてやらんでもないぞ」

咲がこつちを見て頬をほんのり桜色に染めた。スフィアは納得したような顔になつたが、ナルはまだ険しい顔をしている。

「怪しい、怪しそうさるの……。でも証拠がないから今、そう今のところは、認めるの」

ナルは今のところはと言つ部分を一段と強調して言つと咲を警した。そしてようやく顔を緩める。

「そもそも試合のよしうね。観客席に行くわよ」

他の選手の様子を見ていた師匠が言つ。その視線の先ではクレナリオンが音もなく立ち上がつていた。

それを見た僕らは師匠に続いて観客席に向かつた。

「お待たせしました！ 準々決勝第二試合、クレナリオン選手対力一チス選手です！ 先の試合で恐るべき力を見せつけたクレナリオン選手。彼を我らがダタール帝国騎士団長にして、優勝候補筆頭のカーチス選手は止められるのでしょうかー！ それでは試合開始です！」

試合が開始された。隣に座っている師匠が肉食動物のような獰猛な笑みを浮かべてつぶやく。

「さてさて、どんな力を見せてくれるのかしら？」

師匠のつぶやきが終わつたところで、カーチスが動いた。カーチスの姿が消え、空気を切る金属的な音が響く。

カーチスはいきなりクレナリオンの目の前に現れた。クレナリオンはカーチスのスピードに対応できていない。カーチスの剣は無防備なクレナリオンの腹に炸裂した。金属同士がぶつかり合つ、耳を引っかくような嫌な音がした。

カーチスが三人、いやもつとたくさんかな？ とにかくたくさんに増えた。たくさんのカーチスはクレナリオンに次々と容赦なく攻撃を叩き込んでいく。機関銃が打ちっぱなしにされたような音が会場を包んだ。

「あのクレナリオンを圧倒してるの……」

後ろにいたナルが思わず言つた。他の観客たちや咲にスフィアそれに博士も茫然として見ている。

そんな中、師匠が青ざめた顔をして叫び出す。

「違う、違うわよ！ 良く見なさい、クレナリオンはまったくダメージを受けていないわ！」

師匠の言葉を聞いた博士が、銀色の長い望遠鏡のようなものを取り出した。そして思いきり叫ぶ。

「本当だ。損傷率ゼロとわしの機械に表示されてるー！」

損傷率ゼロ？ あんな攻撃を受けているのに？ 博士と師匠の言葉を信じることのできなかつた僕らはクレナリオンをさらに注視した。

確かにクレナリオンの着ていい薄っぺらい灰色の服は、切れ目一つ入つてはいなかつた。博士と師匠の言つたことは本当だつたのか……。そう思つたところでカーチスの動きが止まつた。カーチスの人数も減つていき、すぐに一人に戻る。

「何故、何故だ！ どうして攻撃が効かないんだ！」

カーチスは舞台に剣をぶつけると天を仰いで叫ぶ。
クレナリオンは嫌みな笑みを浮かべながら、カーチスに向かって高らかに話を始める。

「ハハハ、私ハ自分ノ身体ノ回リニ強力ナバリアヲ張ルコトガデキルノダ。貴様ノ攻撃程度テハ私ニ触レルコトスラデキナイ」

クレナリオンの言葉にカーチスは凍つた。だが、すぐに距離を取り剣を上に突き上げる。しばらくしてカーチスの剣の周りに魔力が集まってきた。

「あれは魔法剣か？ どうやらカーチスは何か大技を撃つつもりらしいぞ！」

咲が剣士らしくカーチスの行動の目的にいち早く気づいた。そして姿勢を低くして衝撃に備えようとする。僕らもそれに続いて姿勢を低くした。

「はああ！ サンダーブレークウー！」

カーチスの剣先から三本の稻妻が飛び出した。三本の稻妻は途中でまとまって渦をまきはじめる。

そして螺旋状になつた稻妻はクレナリオンを襲う。クレナリオンから、舞台全体に稻妻が走り抜けた。稻妻は十秒ほども持続すると徐々に小さくなり消え始めた。最後に消えそうになつた稻妻は再び激しくスパークした。

そのあまりの光量に僕は目を閉じた……。

目を開けると舞台の上には蜘蛛の巣のように焼け焦げた跡ができていた。クレナリオンはその中心で悠然とたたずんでいる。その身体に傷一つついた様子はない。

それを見たカーチスは剣を放り投げた。

「今のは私の最高の技だ。あれでダメージを与えないなら私に君は倒せない。君の勝ちだ」

クレナリオンは意外そうな表情をすると満足げな表情になった。

「潔イ人間ダ。良イタロウ、降参ヲ認メテヤロウ」

クレナリオンがそういうと司会者がまたどこからか現れ宣言した。

「決まつたあー！クレナリオン選手の勝利です！ 優勝候補筆頭のカーチス選手はまさかの準々決勝敗退となつてしましました！ 今回の大陸最強武道会は波乱の展開です。誰かがクレナリオン選手を破るのでしょうか？ はたまたクレナリオン選手がこのまま優勝してしまうのでしょうか？ このあとの展開が非常に気になるところです！」

司会者が叫ぶと会場が熱気に包まれた。だが僕の周りは冷たい空気がただようのだった……。

第一十一話 殺戮マシンは止もらなーー（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十一話 最強……？ 超強運戦士！（前書き）

今回は少しコメディー風味です。

第一十一話 最強……？ 超強運戦士！

第一十一話 最強……？ 超強運戦士！

クレナリオンの試合が終わつた後、僕らは次のナルの試合が始める前に、控え室でナルの対戦相手を観察していた。

「うーむ、見れば見るほどただの女だな。ここまで残つたのが不思議だ」

咲が首を捻つた。咲の言う通りナルの対戦相手は弱そうに見えた。僕が見る限り、ナルの対戦相手の女戦士は戦士と言つより酒場のお姉さんと言つた雰囲気の女だ。健康的な褐色の身体にも筋肉はほとんどついておらず、柔らかいラインを描いている。特にスイカのような胸がなんとも……。

「鼻の下を伸ばしちゃダメ！」

後ろから叫び声がした。恐る恐る僕が後ろを振り向くとナルが鬼のようない形相で立つていた。

やばいぞ……、ナルは本気だ。身の危険を感じた僕は助けを求めて辺りを見回した。

そして、スフィアと咲の方を見て精一杯すがるような目をしてみる。

「自業自得だな」

「今のは白河が悪い」

一人は軽蔑したような目をして言った。助けてくれるどころか

ナルと一緒に攻撃してきそうだ。し、仕方ないじゃないか胸の谷間に田を奪われたって……。僕も男なんだから。

最後の手段だ、同じ男の博士なら味方してくれるに違いない！
そう思った僕は博士の方を見た。博士は手に持った機械に向かって語りかけていた。ダメだ、どこか異世界に飛んでいる……。

「まあまあ、喧嘩しちゃダメよ。もうすぐ試合なんだから」

し、師匠が助けてくれた。さすが師匠ありがとうございます！
僕は師匠に心から感謝した。

「もう、それなら仕方ないの。後にする」

ナルは頬を膨らませて納得いかないよう言つ。でもとりあえず僕は今のところは助かったようだ。

なんとかナルの試合が終わるまでに言い訳を考えておかなきゃな

。僕がそう思つていると急に舞台の方が騒がしくなってきた。スマリアが舞台の方を覗いてくる。

「どうやら準備が終わったようだ。私と博士は観客席から応援するからしつかり頑張つて」

舞台の方から戻つて来たスマリアはそういうと博士の服を掴んだ。
そして観客席まで博士を連行して行く。
博士はその間も機械に向かって語り続けていた。

「私もそろそろ行くの」

ナルも舞台に向かって歩き始める。僕と師匠とスマリアもナル

に続いて歩き出した。

「それでは準々決勝第三試合ナル選手対ジェシカ選手を開始いたします。それでは試合開始！」

毎回おなじみとなつた司会者の宣言で試合が始まつた。観客席から大歓声が上る。舞台の上からジェシカは観客席に向かつて手を振つた。おじさん連中の興奮した声が聞こえてくる。

一方、ナルの方は観客たちにほとんど無関心だつた。沈黙したままジェシカを見据えている。

沈黙を破り、ナルが先に勝負を仕掛けた。ナルは呪文を唱え始める。大魔法を使ってジェシカを一気に片付けるつもりだ！ 対するジェシカはその場で胸を張つて立つてているだけだつた。大きな胸を張つて余裕で立つてゐる。

「adkmp……いた、いたあ……。舌噛んだの」

「舌噛んだあ？ ナル、いくらなんでも初歩的すぎるニースだよ！ 師匠もあまりのミスに額に手を当ててうなだれる。咲に至つては呆れて口が半開きだ。

「あらら、そんなんじゃお姉さん倒せないぞ」

ジェシカが笑いながら手に持つてゐる鞭でナルに攻撃してきた。あまり速くはない、ナルなら十分回避できる攻撃だ。もちろんナルはそれを素早く回避しようとした。だが……。

「ふああ！」

ナルは何故か足元にあつた小石につまずいた。そして頭を 硬い舞台にしたたかにぶつける。さらに起き上がりとして顔を上げたところに、ジェシカの鞭が直撃した。

「お、おかしいの！」

鼻を赤く腫れさせたナルがジェシカに向かつて叫んだ。しかしジェシカは涼しい顔をして答える。

「うーん、お姉さんは何にもしてないよー？ きっとあなたの運が悪いだけだよ」

ジェシカは色っぽくそういうとまた鞭で攻撃を始めた。先程と変わらず攻撃自体はたいしたことはない。今度はナルも失敗しないように周囲をよく確認してから回避しようとした。

しかしそこで風が吹いてきた。

「田にゴミが……。何にも見えない！」

ナルの田にゴミが入つた！ 視界を奪われてしまつたナルはまたもや鞭の直撃を受けてしまう。

ナル、運が悪すぎじゃないか？

「何があるわね、あの女。いくらなんでもつきすぎだよ」

師匠がジェシカを見て恥ま恥ましげにつぶやく。咲もジェシカを睨みつけていた。

「ナル、しつかりしる。そんな色気だけつてみたいな奴に負けるな

！ 負けたら承知せんぞ！」

咲はナルに向かつて声援を送りはじめた。僕と師匠も声を張り上げて応援する。応援に対してナルはＶサインをしてこっちを見た。そして杖を振り、魔法を使う。

雷がジエシカに襲いかかった……。

第一十一話 最強……？ 超強運戦士！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一二三話 強運の正体！（前書き）

また次回からシリアルスパートに戻ります。

第一一二話 強運の正体！

第一一二話 強運の正体！

ナルの放った雷は一直線にジェシカに向かつた。

しかしへからか盾が飛んで来て雷を防いだ。ナルは唇を噛み締めて唸る。

「ますますおかしいの。何がある」

ナルはジェシカを舐めるように見回した。ナルの鋭い視線にジェシカは身をよじり、いやんいやんと言ひポーズをする。

「お姉さんをそんなに見ちゃつて……。もしかして私のことが好きなのかな？」

ナルはジェシカのいつもよりぞうに強調された胸にムツとしたが、気を取り直してジェシカの姿を見続ける。

その時、ナルの近くからかすかな物音が聞こえた。しかし、ジェシカの観察に集中しすぎているナルは気がつかない。

「何かいる？」

物音に気づいた師匠はナルの近くのある一点を睨みつけた。そしてそこを指差して叫ぶ。

「ナル、あなたの近くに何かいるわよー！」

ナルは師匠の言葉に従い、氷の魔法を使った。魔法のツララが

複数飛んでいく。

「痛！」

「何もないところから悲鳴が聞こえた！」　誰かいる、田に見えない誰かが！

「くう、見えないの」

ナルは姿の見えない何者かに苛立ちを隠せない。苛立ったナルは無我夢中で魔法を放ち始める。

「ナル、落ち着くんだ！　敵の気配を感じろー！」

咲はナルにアドバイスをする。咲の必死のアドバイスにナルは魔法を一時中断して神経を集中し始める。だが、それをジェシカが妨害し始めた。

「お姉さんを無視しちゃだーめ

ジェシカはナルに執拗な攻撃を仕掛けてくる。ナルはジェシカの鞭を容易くかわせる実力がある。ただし、目に見えない何者かがジェシカを援護しているため本来容易くかわせる攻撃もかわすことができない。

「見えるようにされできれば勝ちなのに……」

ナルは見えない敵に舌打ちしながらつぶやいた。

「そう、実は見えない敵を見るよにできればこの戦いは勝ちなのである。」

大陸最強武道会は、一人一組での参加など認めていないからだ。ナルは見えない敵に対する対策をジェシカと戦いながらも考える。

しばらくしてナルの足が止まった。

さらにナルは身体の前に杖を突き出す。

さらにナルは杖を振り、水魔法を使つた。滝のような雨が舞台の上に降り注いでいく。

舞台が水浸しになつたところでナルは風魔法も使う。舞台の近くで砂が巻き上げられた。砂を巻き上げた風はそのまま舞台の上で砂嵐となる。

「見えるようになつたぞ！」

咲が叫んだ。咲の視線の先には人の形をした泥の固まりがあった。砂嵐が収まると舞台の上に泥だらけの人型が出現したのだ。

その人型はジェシカの方を向くと申し訳なさそうに頭を下げる。

「姐御、すいやせん！ ばれちまいました」

人型はそういうと足早に舞台の上から逃げ出した。舞台の上には茫然としたジェシカが取り残されている。

「ジェシカ選手、あれはどういうことなのですか？」

舞台の上に現れた司会者はジェシカを問い合わせる。観客席の観客たちもジェシカに激しいブーイングを始めた。会場の雰囲気にジェシカは笑つて「まかそつとする。

「あはは、これには深い訳があるの。許してくれない？」

ジェシカは甘ったるい声をだして司会者に懇願する。だが司会者はそれをきつぱりと断つた。

「ダメです。規則は規則ですから。どんなに頼んでもダメなものはダメです」

ジェシカは司会者のその言葉を聞くと司会者にしなだれかかり、さらに甘い言葉を投げかける。

「ねえ、もし今のこと許してくれるなら私を好きにしても……いいのよ？」

司会者は顔を赤らめたが再びはつきりと拒絶した。

ジェシカの方も意地なのかまた似たようなことを言つ。そして司会者もまた断る。このようなやりとりしばらく続いた。

そしてついに一人取り残されたようになったナルが一人のやりとりに飽きて一人遊びを始めた頃、ジェシカの化けの皮が剥がれた。

「さつきから聞いてればダメの一点張りじゃない。この私が好きにして良いっていつてんのよ。それに応じないなんてあんた男なの？ ありえないでしょ」

ジェシカはそう吐き捨てると言葉の上からせつていった。会場になんとも表現しがたい沈黙が訪れる。

「白河、あんな女にだけはひつかかっちゃダメなの」

「ああ、いくら見た目が良くてもああいつ性格はダメだと私も思うぞ」

ナルと咲がしみじみとした表情で僕の方を見てきた。失礼だな、僕にも人を見る目くらいありますよ！

「二人とも、僕はあんなのにはひつかかりませんよ」

僕は真面目な顔をして言い切った。でも一人は疑わしげな顔をする。

「どうだか。白河は胸さえ大きければどんな女にもついていきそうだの！」

「私もそんな気がするな……」

「二人とも僕をどんな工口男だと思ってるんだ！」
僕が心の中で叫んだ時、師匠が僕らに告げた。

「白河のことはいいとして、私はこれから次の試合にそなえて控え室の端で瞑想をするわ。だからしばらくの間は話かけないでね」

僕とナルの間に緊張が走った。瞑想とは集中し、魔力を高めるために行うことだ。そして普通、師匠くらいの魔法使いは使わない。その必要がほとんどの場合ないからだ。よって、師匠が瞑想をすると言つことはそれだけ次の試合の相手が強いと言つことなのだ。

僕らは師匠の対戦相手に対する警戒に対して、気味の悪さを感じたが師匠に続いて控え室へと戻つて行つた……。

第一二三話 強運の正体！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十四話　試運営リハビリの恐怖ー（前書き）

せじくて連日更新できませんでした。作者が忙しくなつてましたので、これからは一日から二日で一度の更新となると思こます。

第一十四話 武道会に「一つ目」の恐怖！

第一十四話 武道会に「一つ目」の恐怖！

控え室の端で師匠は先程から瞑想を続けていた。師匠はあぐらをかき、目を閉じて、呼吸すら抑えている。その師匠の周りには膨大な魔力が渦巻き、時折火花が飛び散っている。魔力によつてあぐらをかいたその姿は蜃気楼のように歪んで見えた。あまりにも大きな魔力が空間をわずかにねじ曲げているのだ。

「気持ち悪くなってきたな。私は先に外に出て待つているからな」

咲は蒼白な顔をし、口を抑えた。そしてよたよたと控え室から出て行く。きっと師匠の魔力に酔つたのだろう。巨大すぎる魔力は人を酔わせるのだ。

「私もそろそろ限界。白河は平氣？」

ナルも具合が悪そうに顔を俯けながら聞いてきた。息が乱れていて、かなり苦しいように見える。

「僕は大丈夫だよ。ナル、もし気持ち悪くなってきたのなら休んでおいで」

僕がそういうとナルは早速、控え室から駆け出していった。これで控え室には僕と師匠と師匠の対戦相手の男しかいなくなつた。ちなみにスフィアと博士はいない。なんでも、博士が先程ナルと戦つた透明人間に透明になる方法を聞くんだ、とか行つて消えたからだそうだ。スフィア、博士の面倒みるのご苦労様。

僕がくだらない考えをしていると、師匠はいきなり呻き始めた。

「「う、むう、はああー。」

師匠の身体から魔力が噴出した。濃密な魔力が火山のように溢れ出す。僕には馬鹿みたいな量の魔力があるが、今の師匠はそれよりもさらに大きい。

控え室に魔力が満たされていった。僕は魔力に飲み込まれそうになる。

「素晴らしい魔力ですねえ。感心に値しますよ」

先程から沈黙を守っていた対戦相手の男が、師匠に話しかけてきた。張り付いたような笑みを保つたままである。

「それはどうもありがとつ。でも、あなたならこれぐらいの魔力あるんじゃない?」

師匠もまた微笑んで男に返答する。しかし、その目の奥には黒い物が覗いていた。

「怖いですねえ、そんな目をしないで下さい」

男はおどけたように言つと、控え室を出て行つた。
師匠はしばらぐして妖艶な笑みを浮かべた。

「ふふ、面白い。久々にやるしますか。さて白河、舞台に行くわよ。そろそろ準備もできるだろ?」

師匠はゆっくりと立ち上ると控え室から出て行つた。僕も師

匠の後に続いて行く。

舞台に着くと、すでにナルと咲がいた。一人とも顔色は良く、体調は戻っているようだ。

「いよいよなのね、師匠」

「ええ、まあ頑張つてくれるわ」

「あなたがどのような人か、私はいまいち知らないが……とにかく頑張つてください」

師匠にナルと咲が話かけてきた。師匠はナルと咲に向かつて笑いかける。そして舞台の上に上がった。舞台の向こうでは、対戦相手の男がいやみのある笑みを浮かべて立つていて。男は一見するとひょろつとした長身で、顔立ちなどは冴えない、至つて普通の男に見える。着ている鎧も軽装の物で、せいぜい熟練者が愛用する程度のありふれた物だ。

だが男は舞台の向こうから得体の知れない、それこそ底のない闇のような気配を放つていた。

師匠と男が向かい合つとすぐに舞台の中央に司会者が現れた。司会者は向かい合つ両者の雰囲気に圧倒されながらも、大きな声を張り上げた。

「そ、それでは準々決勝第四試合 チェリス選手対エントス選手を開始させていただきます！ それでは試合開始です！」

司会者はそういうやいなや舞台から離れていった。会場は試合開始に熱狂し、観客席からは叫び声やら怒鳴り声やらいろいろな叫びが聞こえてくる。

それに対し、師匠とエントスは互いに笑つたまま動こつとしない。

「す」「い、両者とも隙がまつたくないぞ！」

咲は舞台の上の一人を見て感動したように叫ぶ。咲が叫ぶのも無理はない。師匠とエントスは隙だらけに見えて、隙がまつたくないのだ。二人はそのまま一步も動かずに睨み合いを続ける。それは永遠に続くかのようにさえ思われた。

そして師匠とエントスの睨み合いに会場がシラけてしまった頃、ついに動きがあった。

突如として激しい魔法の撃ち合いが始まった。炎、氷、風、土、さらに光に闇。およそ考えうるかぎりの属性の攻撃魔法が舞台上を飛び交い、目を開けていられないほどの光が発生する。僕とナルは全力でシールドを展開して、咲はそのシールドの後ろに避難した。

その間にも戦いは激しさを増しているようで、狙いをされた魔法が観客席にも当たり、あちこちから炎が上がった。たまらず観客たちは次々と逃げ出した。そしてやがて博士とスフィアらしき人影がその場で頑張っているのみになってしまった。

光に包まれた舞台からお腹に響く地鳴りのような音がしてきた。その音の感覚は次第に狭まり、すぐに絶え間無く聞こえるようになる。

信じられないことだが……師匠とエントスはあれだけたくさん の魔法を使いながら、同時に武器での戦いも行っているらしい。

人間とは思えないな……。

僕と同じことを咲とナルも思つたようで、感心したような呆れたような微妙な顔をしている。

舞台の光が收まつた。一人の姿がはつきりと視界戻つてくる。

「あなた一体何者なのかしら。ただの人間とは思えないわよ。そろそろ正体を明かしたらどうなのかしら?」

師匠がエントスに向かつて話かけた。口調は軽いが、目つきは矢のように鋭い。

師匠の言葉を聞くとエントスが腹を抱えて笑い始めた。高笑いが大気を揺らす。

「ははは、気づかれていたのか。私としたことが失敗だつたよ。良からう、私の正体を教えてやろつ……」

エントスはもつたいたいぶつて、間を開けた。師匠は固睡を飲んでエントスを見守りつづける。

「私は魔将軍エルストイ、この大会を潰し、さらに勇者を殺すためにきた者だ」

エルストイの背中から闇を纏つた漆黒の翼が現れた……。

第一十四話 武道会「火の皿の恐怖」（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！（前書き）

あと少しで武道会編が終了です！

第一一十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！

第一一十五話 大激戦！ 燃えゆく帝都！

「まさか將軍クラスとはね。ずいぶんとまあ大物が来たものだわ……。さつきまでは私があつさりあなたを倒して武道会を続けさせようと思つてたけど、それは無理そうね」

師匠は翼を広げ、空の上から見下ろしているエルストイを睨みつけた。そして苦み走った顔をして唇を噛む。

「雑魚でなくて残念だつたな。魔王様は勇者と勇者の持つ聖剣を危険視しておられた。それゆえ、將軍である私みずからここに赴くこととなつたのだよ」

エルストイは聞いてもいにいのに魔族の事情をペラペラと話した。おそらく余裕があるため口が軽いんだろう。

「本当に魔王は復活していたのね。ダタール帝国お得意の魔王復活援助金詐欺だと思っていたの……」

ナルが信じられないといった顔でつぶやく。それはそうだろう、魔王が復活したなど誰も信じたくない。……それはいいが魔王復活援助金詐欺って何なのさ。セコい香りがブンブンするんだけど。僕が微妙な顔をしていると師匠が咲に向かって叫んだ。

「咲、あなた一人を連れて飛べる？」

「もちろん飛べます！」

咲はポンと胸を叩いて答えた。師匠はそれを聞いて頷くと咲に指示を出す。

「それならあなたは白河とナルを連れて城に向かって。それで城に着いたら勇者を連れてここに戻つてくるのよ。あと、戻つて来るときは白河とナルを城に置いてきなさい」

師匠は手早く指示を出すと、エルストイとの戦いを再開した。魔法が飛び交い再び会場は騒然となる。

「さあ、早く行こう。ここは危険だ」

魔法が飛んで来る中、咲が空に飛び上がる。ナルは咲のお腹に上手くつかまつた。咲はナルの身体をしつかり抱えると、僕にも早く身体につかまるよう催促していく。

「白河も早く！」

咲はナルを抱えて不安定になりながら必死に僕を呼ぶ。だけど僕は会場を離れられない。なぜなら会場にはまだ知り合いが一人残つているのだ。

「待つて、博士とスフィアを何とかしないと！」

僕は博士とスフィアのいる方を指差した。咲はそれを見て顔をうつむけると、また僕の方を見た。

「四人は無理だ！　スフィアたちを助けるのは白河たちを送つてからにしよう！」

咲はそういうと僕の手を掴み、強引に背中の上に載せる。

僕は咲にもう一度博士とスフィアの事を頼もつとしたが、そこで思い出した。

「はーかーせー、今こそ自慢の波動銃でエルストイをやつづけてくださいよー」

そう、博士は超兵器を所持していたのである。どうしてこんなことを忘れていたのだろうか。最初から博士に超兵器を使つてもらえば良かったのだ。

「ダメだ！ 波動銃は今、波動銃EXに改造中で使えん。他也定期点検中だ」

こんな時しか役に立たないのに改造中や点検中とは、なんて使えない兵器たちなんだ……。

「白河、私たちは大丈夫だから城へ急ぐんだ！ このままでは街が大変なことになる！」

スフィアが激しく魔法を撃ち合つてゐる師匠とエルストイを指差した。狙いをはずれた魔法があちこちに当たり、周囲は穴だらけになつてゐる。そして二人は徐々に市街地の方へと移動してゐた。エルストイも師匠に阻まれながら、城に向かつてゐるのだ！

「まずいな、急ぐぞ」

咲は城に向かつて飛び始めた。城は競技場から市街地を越えた山の斜面に建つてゐる。ここからだと五キロほどの距離があり、白

亞の城は霞んで見えた。

咲は一人を抱えながらフラフラと不安定に低い高度で飛んでいく。その間にも師匠たちは市街戦に突入し始めていた。

建物の屋根を飛ぶように走り抜けながら師匠が次々と魔法を放ち、エルストイもそれに応戦して魔法を使う。石造りの建物は吹き飛ばされていき、人々は当てもなく逃げ惑う。爆発によつて一部の木造の建物に火が付いた。それはやがて周囲の建物を飲み込む大火災となつていく。

「うわああ！ 助けて、落ちる落ちる…」

僕らの方にも魔法が容赦なく飛んできた。猛烈な爆風に巻き込まれ、咲の身体が木の葉のように揺らぐ。僕は咲の身体に必死にしがみつきながら師匠たちの方を見た。

「早い、攻撃が当たらない！」

いつのまにか教会の高い塔の上に陣取つていた師匠が、エルストイに向かつて悪態をついていた。その間も攻撃の手は休めない。もはや弾幕のようになつた魔法の群れがエルストイに続々と襲いかかる。エルストイはその攻撃を超高速で回避していく。

僕らは激しすぎる師匠たちの戦いに巻き込まれて、思うように城へ向かうことができない。

その時、エルストイが何か人形のような物を出した。遠いので形はよくわからないが、まがまがしい形をしていることだけは認識できた。

「いですよ、我が下僕どもよ！」

人形が大きくなつていく……。すぐに人形は人間ほどの大きさ

の異形となつた。

硬そうな石の質感の外皮に、鋭い爪と翼の生えた姿をしている。そんな怪物が一体もあらわれた。

「ガーゴイルか！」

師匠が驚いたように叫んだ。そしてすぐに攻撃を集中させ倒そうとする。しかし、ガーゴイルは巧に攻撃をかい潜り、僕の方に近づいてきた！

「た、大変なの！」

ナルが怯えて足をばたつかせ始めた。咲は暴れるナルを何とか抑えつけると、全力で飛び始める。

強い風が頬を撫で、景色が加速していく。後ろを振り向くとガーゴイルが追いかけて来ていた。僕らとガーゴイルとの距離はどんどん縮まっていく。

「咲もつとスピード上げて！」

「これ以上は無理だ！二人も人を運んでいるからな、もう限界だ！」

「でも、それじゃ追いつかれますよ…」

「任せておけ、振り切つて見せる！」

咲は急旋回を始めた。つかまつていい僕とナルに遠心力が襲いかかってくる。続いて咲は急降下した。地面ぎりぎりを滑るように飛んでいく。ぶ、ぶつかるー！咲が家にぶつかりそうになる。だが家にぶつかる直前で垂直上昇してなんとか回避した。心臓止まる

かと思つたよ、咲！

「まだ追いかけてくるのー。」

ガーゴイルは依然として僕らを追いかけてきていた。やばい、やばいよー。

「くそ、ダメだつたか！ ではもう一度するまでだー。」

咲が再び加速しようとした時、目の前にガーゴイルが回り込んできた。そして鈍く輝く爪を振り上げる……。

「ほわああー！」

「いああー！」

「はよはやああー！」

僕らは三者三様の悲鳴を上げた！ 爪が僕らを切り裂く……。そう思った時、ガーゴイルが飛び散った。

「感謝シテオケ。私が人ヲ助ケタノハ初メテダ」

後ろからあまりにも聞き覚えのある機械的な音声がした……。

第一十五話 大激戦！燃えゆく帝都！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一十六話 殺戮マシンと魔族と勇者

第一十六話 殺戮マシンと魔族と勇者

僕はゆっくりと顔を後ろに向けた。

仮面のような無表情の男がいた。重厚な黒光りする鎧を着て、背中から青い炎が噴き出している。この間見た時とは格好が違うが間違いない、こいつはクレナリオンだ！

「クレナリオン！」

僕ら三人は声の限りの叫んだ。声が騒然としている帝都に響き渡る。

クレナリオンは叫び声に眉をひそめると、思わぬことを言つた。

「貴様ラニ用ハナイ早ク城ニ行ケ。最モ勇者ヲ呼ンダトコロデ奴ハ私ガ倒シテイルダロウガナ」

何でそれを知つているんだ！　僕は思考が一瞬停止した。他の

の一人も同じようで顔が凍つている。

しばらく時が止まった。

そこからナルが真っ先に回復した。そしてクレナリオンに疑問をぶつける。

「どうしてそれを知つてるの……」

クレナリオンは何を言つているんだ、とばかりに首を捻つた。

「アレダケ大声デ話シティタノダカラ聞コエテ当然ダロウ。私ハア

ノ時競技場ニイタノダカラナ

あの時いたのか！ 気配がなかつたからまつたく氣づかなかつたぞ。

「分カツタナラ早ク行ケ。アノ女ガ待ツテイルゾ」

クレナリオンはそういうと師匠たちの方へ向かつて飛んで行こうとした。それを咲が止める。

「待つてくれ！ クレナリオン、お前は一体……」

咲の叫びにクレナリオンは動きを止めた。そして首をゆっくりむづくりこじりに向ける。

「私ハ奴ヲ倒スタメニ開発サレ、コノ大陸最強武道会ニ送リ込マレタ。タダソレダケダ」

クレナリオンは無表情で言つと、爆風の吹き荒れる中を、激しい戦いの真つ只中へ向かつて飛び立つて行つた。

「さあ、行くぞ。早く勇者を連れて私達も加勢するんだ！」

クレナリオンを見送つたあとで、咲は城に向かつて一気に加速した。僕とナルは咲の身体から振り落とされないよつこじっかりとしがみついた。

少しして、僕らはようやく城の上空までやつて來た。白亜の城

は峻険な山の中腹から山頂に向かつてそびえており、さながら帝都を見下ろしているようだ。さらに空を突くいくつもの塔が周囲を威圧している。

僕らはその城の高く頑丈そうな堀にある巨大な鉄張りの門の前に降り立つた。

門の前に立っていた兵士が、怖々と僕らに近づいてくる。

「お、お前たち何しに来た！」

二人の兵士は手に持っていた槍を僕らに向けて来た。怖いのか腰が引けているが。

「私達に敵意はない。この城には勇者様に用があつてきたの」

ナルが先頭に立つて兵士たちに事情を説明し始めた。兵士はかわいい少女が前に来たからか、少し態度を柔らかくして答えた。

「勇者様？ 一体何があつたのですか？」

「兵士たちは実に呑気に聞いてきた。この人たち平和ボケしてないか？」

「街で魔族が暴れてるのだ！ 早く勇者を呼んで来てくれ！」

兵士たちの態度に業を煮やした咲が怒鳴った。兵士たちは街の方を見る。街の中心部から一筋の煙りが上がっている。それを見た兵士たちは一瞬で固まつた。

「あの火事はまさか……魔族……？」

兵士たちは無表情でつぶやくと、顔を青くした。そしていきなり慌てふためき出す。

「こんな時に…」

「皆に知らせなければ…」

「早くしないと帝都が…」

兵士たちは門の隣にある小さな扉からワタワタと城の中に入つていいく。すると、僕らに向かって手招きをした。

「さつとき勇者様を呼んでくれと言つていたな？」

門の内側に入ったところで兵士が聞いてきた。僕がすぐに答える。

「はい、早くお願ひします！」

僕がそつこつと兵士たちは顔を見合わせ、そして歪めた。

「勇者様は今、神殿で洗礼を受けるためノースウェルまで出かけているんだ！」

なんだつて！ 勇者がいない！？

僕は顔から血の気が引いて行くのを感じた。他の一人も動きが止まる。

「今すぐ魔法で連絡するが、戻つて来られるのはおやぢへい、三時間後だ。それまでは城に避難しているといい

一人の兵士が他の兵士を呼び、事態の説明を始める。もう一人は僕らを避難場所に案内しようと呼んだ。

「僕らは街に戻ります！　師匠が戦ってるんです。師匠を一人にはできません！」

僕は兵士の誘いを断つた。兵士は驚いたような顔をしたが、すぐにキリリとした表情になる。

「そりが、なら今から勇者様がお戻りになるまで何とか持たせてく
れ！　勇者様さえ戻つてくれば何とかなるんだ。すまないが頼んだ
ぞ、情けないことだが、我々では魔族は手に負えん！」

僕は兵士に向かつて敬礼をした。兵士は戸惑つたものの敬礼を
返してくれた。

僕とナルは兵士に向かつて手を振ると、咲につかまつて飛び立つ
た。

街の方へ戻つて来るとクレナリオンとエルストトイが熾烈な戦いを繰
り広げていた。衝撃波が広がり、辺りの建物にヒビが入る。クレナ
リオンの方がやや押されていた。エルストトイの顔に喜悦が見て取れ
る。戦いを楽しんでいるかのようだ。

エルストトイが笑いながらクレナリオンを振り落とした。しかしす
ぐに猛烈な密度の魔法がエルストトイに殺到する。間違いない、師匠
の魔法だ。

師匠は少し離れた広場から魔法でクレナリオンを援護していた。
額に汗をかきながら、目を凝らして空を見つめている。

「遅かったわね、勇者は！　勇者はどこなの？」

「勇者は今出かけているそうなの。戻ってくるには一、三時間かかるやうよ……」

「勇者は舌打ちすると、クレナリオンとヘルストイの方を見た。そして額にシワを寄せ、顔を険しくする。

「あの魔族の強さははっきり言って異常すぎよ。勇者の聖剣があればあんなのでも簡単に倒せると思ったのだけど……。四人で何とかなるかしら……」

「師匠はしばらくエルストイの方を見てしばらく考え込む。そして気合いの入った叫びを上げた。

「もう考えて仕方ない！ 四人でエルストイを倒すわよー！」

「師匠に続いて僕ら三人も気合いを入れる。僕らの長い戦いが今、始まろうとしていた。

第一十六話 殺戮マシンと魔族と勇者（後書き）

感想・評価をお願いします！

第一一十七話 完全無欠の魔将軍！（前書き）

総合評価が200ポイントを超えておりました。
皆様、ご愛読ありがとうございました。

第一一十七話 完全無欠の魔将軍！

第一一十七話 完全無欠の魔将軍！

帝都ハニアヴァイの上空でエルストイとクレナリオンは激しく火花を散させていた。

「想像以上ノパワーダナ。推定値ヲ大キク超エテイル」

クレナリオンはエルストイの腕を受け止めながら言つ。彼の腕はキシキシと軋みを上げていた。

一方押しているエルストイはニヤニヤとクレナリオンを挑発する。

「所詮お前などがらくた人形に過ぎないので。この私に勝てるわけなかろう？」

エルストイはさらに腕に力を込める。

クレナリオンの腕はよりいっそう大きく軋み始めた。

「やばいわね、このままではクレナリオンが……」

僕の前で様子を見ていた師匠が眉をひそめる。そこへ咲が何もしない師匠に詰め寄つた。

「魔法で何とかできるないのか！」

師匠は所在なげに首を横に振つた。

「一人の距離が近すぎるのよ。あれではクレナリオンまで巻き込むわ」

師匠の言う通りである。エルストイに通用するような魔法を使えば、もれなくクレナリオンまで巻き込んでしまう。

師匠に言わせて改めてそれを理解したらしい咲は黙り込む。だが、しばらくして咲は想定外の行動をした。

「クレナリオンに加勢してくる！」

「待つて、無謀すぎるの！ 咲とエルストイでは力に差がありすぎる！」

咲の後ろにいたナルが咲を懸命に止めようとした。でも咲は耳を貸さずに飛んで行ってしまった！

「無茶するわね！ こうなつたらしあうがないわ。ナル、白河、咲が頑張つてゐるうちに拘束魔法を全力で準備しなさい。それを使ってエルストイの動きを止めたら私が奴にスペクトル・アタッカーを打ち込むわ！」

なるほど、あの最強魔法ならエルストイを倒せる。希望が出て来たぞ！

僕とナルは高速で呪文を唱え始めた。辺りに魔力が立ち込める。

「小賢しい奴らだ。何をするつもりだ」

エルストイは無防備な僕とナルに向かつて魔法を放ってきた。

師匠がシールドを開いて襲いくる魔法の嵐を防ぐ。

魔法が次々とぶつかり、シールドの全体から溶接作業の時のような

青白い火花が飛び散る。やがてシールドが不気味に揺らぎ始めた。

「ちつ、なんて馬鹿魔力よ。シールドが持たないわ！」

師匠が魔力の大量に込められた魔法に思わず叫ぶ。

「のままではやばい、逃げなきや！ そう思つた僕とナルは呪文を唱えたままで後ろに走り出した。師匠との修行の成果だ。

僕らが後ろに避難を始めたところでついにシールドが破られた。師匠は身を屈めて建物の陰に逃げる。路上に取り残された僕とナルに暴風のように魔法が襲ってきた。極彩色の魔法たちが僕らのいる路上を隙間なく埋め尽くした。だれか助けてー！ 死んじやうよ！ 僕は心中で悲鳴を上げた。ただし、口では呪文を唱えたままだ。ナルも目を極限まで見開いているが、口は細かく動いている。悲鳴すら上げられずに死ぬのか……。そう思った時、女神が降り立つた。

「はありやりやりやりやあ！」

僕とナルの目の前救いの女神こと咲が現れた。咲は奇声を上げながら魔法を刀で片つ端から斬つていく。すごい！ どんどん魔法が斬られていく……。ほどなく路上は焦げ跡や氷の残骸、風でえぐられた跡などでいっぱいになつた。

咲はあらかた魔法を斬つたことを確認すると、再び空へと帰つて行く。

僕とナルは咲に向かつて手を振つた。

「邪魔してくれたな。まあいい、死ぬのが少し遅くなつただけだ」

エルストイはそう言つと咲に向かつて攻撃を仕掛ける。爪が長く伸び、咲を切り裂かんとした。咲は爪を刀で受け止めるが、エルストイの圧倒的な力に押され始める。咲の額から冷や汗が流れ

た。

その時、エルストイの背中で爆発が起つた。

「私モイルゾ」

クレナリオンが腕を突き出していた。手の平に丸い穴が開いている。その穴からは煙りが一筋出ていた。

「がらくた人形があー！もう許さんぞ！」

エルストイは憤怒の形相となり、クレナリオンに襲いかかる。クレナリオンは手からエネルギー弾を乱射し始めた。光が幾筋もの直線を空に描く。エルストイの身体が爆発に包み込まれた。爆発は大きくなり、夕方になつた帝都を照らす。

「エネルギーハ長クハ持タナイ。早ク何トカシロ！」

クレナリオンは咲に向かつて怒鳴つた。咲はそれを聞いて僕らの方を見て声を張り上げる。

「魔法の準備はまだか！ もうそろそろ限界だぞ！」

まだだ、まだ呪文は唱え終わらない！

僕らはしゃべれないので、ジェスチャーでそのことを知らせようとした。僕とナルはアイコンタクトをするとそれぞれポーズをとつた。僕が手で×印を作り、ナルは手の平を向かい合わせて少しだけ隙間を作る。それぞれダメ、後もう少し、ということを意味している。それを見た咲は僕らの言いたいことを正確に理解してくれた。

「後もう少し、時間がかかるそうだ」

咲の言葉を聞いたクレナリオンは焦ったような声を出した。

「クソ、モウエネルギーガ持タン。後ハオ前ガ何トカシロ」

クレナリオンの叫びに咲は刀を構え、攻撃態勢を取る。それと同時に砲撃が終了し、エルストイが姿を現す。なんてことだろう……。傷一つない……。僕らがそう思っているうちに、咲が斬撃を放つた。斬撃がエルストイを覆い尽くすように飛ぶ。しかしエルストイは涼しい顔をしている。

「遊びは終わりにしよう」

エルストイは呪文を唱え始めた。大魔法でけりを付けるつもりだ。だがこちらの呪文も佳境に入っている。頼む、間に合ってくれ！僕とナルはより早く唱えようと限界を超えた高速詠唱をする。だが、エルストイの方ももうすぐ唱え終わってしまいそうになってきた……。

「ad.jgga t……セフィロト…」

僕とナルの声が重なり、魔法陣が現れた。間一髪、僕らの呪文の方が早く唱え終わつたのだ！

魔法陣から黄金に輝く樹が生えてきた。その樹は急速に成長していき、空を貫くかのように伸びていく。

「あああああ……ダーベふおお！」

エルストイが樹に飲み込まれた。悪しき敵を飲み込む大樹を生み出す呪文。それが先程唱えたセフィロトの呪文だ。その主な効果

は拘束だけだが、その効果は絶大でエルストイでも抜け出すことは不可能だろう。

帝都に魔将軍を取り込んだ大樹がそびえ立つた。その大樹は夕陽を反射し黄金色に輝いていた……。

第一十七話 完全無欠の魔将軍！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第一二十八話 散り行く戦士！（前書き）

ネタバレをしないタイトルは難しいですね……。

第二十八話 散り行く戦士！

第二十八話 散り行く戦士！

エルストイをその幹の中に封じた大樹がそびえ立つた。今のところ、エルストイが出てくる気配はない。拘束は完璧になされたのだ。

「師匠、魔法を！」

僕は魔法陣に魔力を注ぎながら、師匠に向かつて呼びかける。師匠が建物の陰から出てきた。師匠はもうすでに呪文を唱えている。しばらくして師匠の前に光り輝く七つの魔法陣が現れた。魔法陣は次第に輝きを増し、まばゆい金色の燐光を投げかけた。師匠の髪も膨大な魔力を孕んで逆立ち、揺れる。

しかし、師匠は呪文を唐突に止めた。

「し、師匠！ どうしたんですか！」

師匠！ どうしたんだ！ 僕は師匠の行動に唖然として叫ぶ。隣にいたナルも驚きを隠せない。

「魔力ノ不足力！」

上空のクレナリオンが僕らに向かつて叫んだ。そうか、魔力不足か！ 師匠はずつと魔法を使いつぱなしだったからな……。無理もないだろう。

その間にも師匠は顔を青白く染めながら、魔力を魔法陣に込めていく。体内に残された魔力を全て榨り出しているかのようだ。再

び師匠は呪文を唱え始めた。それが佳境に向かうにつれて、魔力はわずかずつだが着実に増していく。その姿は夕陽に照らされて神々しいほどだ。

「まずい！ 日が暮れてきたの！ 夜になると何とかしなきゃ…」

沈みゆく太陽を見て、ナルが慌て始めた。普段無表情なナルが困ったような顔をしている。夜になるとよっぽど何か大変なんだろうか？

「ナル、夜になると何か大変なことになるのか？」

ナルが何も知らない僕に向かって怒鳴る。その顔は興奮しているのが真っ赤に染まっていた。

「魔族は夜になると魔力が跳ね上がるの！ 一説では五倍とも言われるわ！」

「五倍！ インフレし過ぎだぞ！」

僕が驚いている間にも太陽は着々と沈んで行く。辺りが薄暗くなってきた。師匠の魔法はまだ完成しない！ 聞に合いつか？

「ウギヤアアア！ ウオオオ！」

大樹の中から魂を焼き消すよつた身の毛もよだつ雄叫びが響いた。ま、まさか……！

「エ、エルストイが！ この樹は本当に大丈夫なのか！」

咲が焦燥に駆られたような顔をして叫ぶ。大丈夫だ、と言いた

いところだが、今の状況では耐えるとは言いがたい。

そう考える間にも闇はその深さを増していく。夜になつたらやばいぞ！

「グゥオオ！ グアアア！」

エルストトイが再びおぞましい咆哮を上げた。樹の幹にわずかにヒビが入る。黄金の光でできた幹からどす黒い障気が噴出した。

「師匠早く！ もう樹が持たないの！」

ナルが魔力を注いでいる師匠をせかした。師匠は首を横に振り、指を三本出した。

「三十秒ですか？」

僕が師匠に希望を込めた確認をした。もし三分を意味していたら終わりだ。

師匠は首を縦に力強く振った。

あと三十秒なら持たせられる、そう思つたところで太陽がついに沈んだ。

「エルストトイノパワーが増大シテイル。 危険ダ」

クレナリオンが危険を知らせるや否や樹が大きく揺れた。百メートル近くもあるような大樹が、嵐の日の小枝のように揺れ動く。樹の幹からより一層激しく障気が噴き出し始めた。辺り一帯に黒いもやのような障気が満ちる。

「ぐ、まともに息ができん！」

咲が口を抑えて顔をしかめる。咲のいる樹の上付近では障気の濃さは尋常ではないようだ。

もつとも樹の根元のこの場所でも障気のせいで息苦しい。

「キシャアア！　ハアアア！」

ついにエルストイの上半身が樹から姿を現した！　顔に紫と黒からなるまだら模様が浮かべ、白目を剥いている。樹から抜け出ようとした咆哮を上げながらもがくその姿に理性は全く感じられない。まさに怪物と言う感じだろうか……。

「全ク、獸ノヨウダ。世話ガ焼ケル」

クレナリオンはそういうとエルストイの元へと飛んだ。そして、その身体を力任せに樹に抑えつける。エルストイがめちゃくちゃに腕を振り回して抵抗する。鋭い爪がクレナリオンの鎧を紙のように切り裂く。切り裂かれた鎧から油が漏れ出した。

「離れるんだ！　魔法の巻き添えになるぞ！」

咲がその凄惨な様子にたまらず叫ぶ。

クレナリオンが咲の方に振り向いた。そしてゆっくり尋ねる。

「私ハ所詮殺戮マシンニ過ギナイ。コウナツタノハ運命ダロウ。ソレデモ、才前ハ私ガ”壊レル”ノガ嫌カ？」

咲は悲しそうな顔をすると感情を爆発させた。

「ああ嫌だ！　だから私たちと一緒にに行こう……」

クレナリオンは顔を俯けると、悲しげに叫んだ。

「行キタイトコロダガナ、私ハコイツヲ抑エナケレバ。感謝ハシテ
オクガナ」

クレナリオンはそう言い放つとエルストイと格闘を再開した。咲
はその様子を見て、何も言わなかつた……。
突如としてぞわり、とした感覚が僕の身体を襲つた。膨大な魔力
の感覚だ。

「魔法の準備が完了したの！」

師匠の方をずっと見ていたナルが叫んだ。僕も師匠の方を向い
た。魔力が渦巻き、蜃気楼の様に空間が揺らいでいる。師匠の身体
は魔力を帯びてぼんやり青く輝いていた。

「咲、師匠が魔法を撃つよ！ 逃げて！」

僕は力の限り叫んだ。できるだけ早く逃げてもらわないと命の
保証さえできない。そう思えるだけの魔力が師匠の魔法には込めら
れていたのだ。

「さらばだ”戦士”よ……」

咲は感慨深げにつぶやくと「ちりこ」飛んで来た。師匠は咲が飛
んで来たのを確認する。そして、すぐに魔法を使つべく杖を地面に
突き立てた。

「スペクトル・アタツカアアアー！」

師匠の杖から透明な水の塊のような魔力弾が放たれた。それは瞬く間に七つの魔法陣をくぐり抜け、七色に輝く光の弾となる。七色の弾は夜空に流れ星のような軌道を描いた。そして一直線にエルストトイに直撃する。

直後に大地を揺さぶるほどの爆発が巻き起こり、周囲のなにもかもが光に飲み込まれた。

第一二十八話 散り行く戦士！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第一十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み（前書き）

今回は残酷なシーンがあります

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み

第二十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み

「ふおおおー！」

僕の身体は爆風で吹き飛ばされ、宙を舞う。街の建物もみな難ぎ倒されていった。

僕の背中に激痛が走った。石畳の地面に叩き付けられたのだ。

「いたたあ……。みんなー大丈夫？」

僕は身体を起こすと辺りを見回した。街は瓦礫だらけで、原形を留めた建物は遠くにしか見ることができない。

「大丈夫なの……」

ナルが瓦礫の中から現れる。その身体は誇りだらけになっていた。

「私も大丈夫だ」

咲はもうすでに立っていた。そして樹のあつたところを見据えている。その目はどこか空虚であった。

「あれ、師匠は？」

ナルが不安げに言い出した。確かに師匠がいない。まさか……、いやそんなはずはない。師匠は最強の魔法使いなんだからあれぐら

いで……。

「うううよ。ほうひうよ、よく見なさいー。」

師匠の声が聞こえた。僕らは慌てて声のした方へと向かう。数百メートルはあらうかというクレーターの中で師匠が叫んでいた。

「助けて、出られないのよー！」

深いクレーターに師匠の声が響く。その声は元気そうだ。ナルが光の魔法を使い、クレーターの底を照らす。師匠の姿が煌々と照らし出された。ロープが破れ、顔にも切り傷が出来ているが、大きな怪我などはしていないようだ。

「今すぐ助けに行きますよー。少し待つて下さい」

咲はそう言って暗い闇の底へと潜つて行く。

「やれやれ、まさか私が自分の魔法の巻き添えを喰らう口が来るとはね……」

咲に支えられてクレーターから出てきた師匠は、そういうと横たわった。魔力を使い過ぎてつらいのだらう。

「師匠、今僕の魔力を分けますからね」

僕は師匠の手を握り魔力を注ぐ。師匠の息はかなり荒かつた。さつき叫んでいたのもかなり無理をしていたようだ。

「私も手伝つの」

ナルも反対側の手を握った。魔力が師匠の身体を満たしていく。少し回復した師匠は立ち上がった。さらにローブの埃をパタッと払う。

「ふう、ありがとね。少し良くなつたわ」

「師匠はそういうとクレーターの中心を睨んだ。その顔は猛禽のようだに鋭い。

「エルストイ……。本当に恐ろしい敵だつたわね」

感慨深げにつづぶやく師匠にみんな同感だった。師匠はしばらく黙り込む。

ゆつたりと長い時が流れしていく。

「さて、行くわよ。ここにつままでいてもかわらないわ

師匠はそういうと颯爽と歩き出した。僕らもその後に続いて歩き始める。

クレーターの姿が夜の闇に消えた頃だつた。背中に殺氣を感じた。冷たく、刺すようで極めて邪悪な殺氣。僕らは恐怖で足を止める。

「お、おい白河……この殺氣は……」

咲が顔を硬直させて叫ぶ。ありえない僕も思った。だが……。

「ふふふ……。我々魔族は不死身なのだよ。ましてやこのエルストイはな……」

地獄の底から聞こえてくるような声がした。僕らは絶望に包まれる。そしてゆっくりと後ろを向いた。

そこには変わり果てたエルストトイが立っていた。その黒い翼は羽根が無くなり、骨だけ。身体も焼け焦げ、皮膚はケロイド状になっている。さらに全身から紫色の血液がとめどなく溢れて、彼が歩く度地面を濡らす。

しかし、そのような姿に成り果てても異様な存在感と確かな力を感じられた。

「ま、魔力もう残つてないの……！」

ナルが涙目でこっちを見てきた。鮮明な恐怖の表情だ。

「僕も師匠に分けたからあんまり残つてないよ……」

僕がそういうたとこひで師匠が吐き捨てるよつて言つた。

「なんて生命力よ！　もう魔力も残つてないしあしまいね！」

師匠はそういうと達觀したようにその場で杖を置いた。そんな中、戦闘意欲を燃やすものがいた。咲だ。

「貴様あ！　私が倒してやる」

咲が半ば狂つてしまつたかのような勢いでエルストトイに斬りかかつた。だが刀の振りは大振りで隙だらけだ。それをエルストトイは爪でいとも簡単に受け止めてしまつた。

「死にたいらしいな。だつたら、一番最後に殺してやるつ。せいぜ

い死の恐怖に震えているのだな」

エルストイは氣合いを入れ、爪に力を込める。咲は弾き飛ばされ、瓦礫の山に突っ込んだ。

「咲い！」

僕の叫びに咲は力無く頷く。まだ生きているようだ。

そうホツとしたのも束の間、エルストイは一ひらに向かつてその歩みを進めていた。

「まずはローブの娘からだ。喜べ、ゆつくり死なせてやる！」

エルストイはまず最初にナルに狙いを定めた。ナルは逃げようとするが、腰が抜けてしまつて動けない。師匠がナルを庇つてエルストイの前に立ちはだかる。だが、エルストイは師匠を軽く払いのけた。そしてまたナルに向かつて悠然と歩く。

「そう逃げるでない

エルストイは逃げようとするナルのローブの端を掴み、さらに杖を取り上げた。エルストイの顔が歪んだ笑みを浮かべる。

「さて、『じにから斬る』としようか。手かな、足かなそれとも腹からかな？」

ナルは恐怖で涙を流しながら叫び続けた。しかし、この魔族に對してはそんな叫びなど喜ばせるだけのものだった。

「恐怖の叫びと言つるのは實に良い。心が満たされるようだ。さあも

「…と叫べ！」

エルストイは爪を振り上げる。僕はようやく恐怖ですくんだ身體を動かし、ナルを助けに向かった。

「なつ！」

僕がエルストイの後ろから放つた杖の一撃はあらうことか、骨だけの翼で止められた。そして攻撃を受け止めたエルストイは、つまらなさそうに腕で僕を投げ飛ばす。

「ナル、ごめんよ……。助けられそうにない……」

僕に力があればエルストイを倒してナルを助けられるのに……。悔しい、ただただ悔しい。薄れゆく意識の中では僕はそのことだけを考えていた。

遠くから暖かい力を感じた。そこで、僕の意識は途絶えてしまつた。

第一十九話 恐怖の叫びと魔族の笑み（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三十話 新たな旅！ 目的地は云説の地（前書き）

めいじへへきりです。あかつた……。

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地

第三十話 新たな旅！ 目的地は伝説の地

「うう……」

目に白い天井が飛び込んだ。どこだここ……。僕はまだはつきりとしない意識を、無理矢理に覚醒させて起きる。僕はベッドに寝かせられていたようだ。

あれ、確か僕はエルストトイに倒されたんじゃ……。僕は疑問に思い、周囲を見回す。僕のいる部屋は白を基調とした造りで、そこに落ち着いた色合いの高そうな調度品が置かれていた。ここは病院だろうか？ だが病院にしては調度品がずいぶん豪華だ。それにだいたいこの世界に病院があるのだろうか？

僕の疑問が深まつたところでドアが開かれた。スフィアが部屋に入ってくる。

「白河、目が覚めたのか！ 心配したんだぞ！」

そういうってスフィアは僕に抱き寄ってきていた。僕はスフィアをしつかり抱き留める。そしてスフィアに疑問に思つたことを質問した。

「スフィア、ここはどこ？ エルストトイはどうなったのさ？」

僕の質問にスフィアは知らないんだつたな、といつと答えてくれた。

「ここは城の中だ。そして……エルストトイは勇者に倒された」

「どうか、勇者が倒したのか……。僕は悔しいような、ほつとしたような感情に包まれた。もし、もつと僕に力があつたら……。力が欲しい、もっと強くなりたい、そしてみんなを守りたい！ まったく子供のような考えだが、僕は純粹にそう思つた。」

「ど、どうした？ 急に叫んだりして。まさかおかしくなったんじやないよな！」

「大丈夫、大丈夫！ 気にしないで」

「感情が高ぶるあまり叫んでしまったようだ。なんて恥ずかしいんだ……。」

「僕が顔を赤面させていると、部屋に他の仲間たちも入ってきた。ナル、咲、師匠、博士だ。みんな一応元気そうだ。」

「やつと田覚めたよね。よしよし、大分回復してるようだし明日には動けるようになりそうね」

「師匠は僕の様子を見て言った。どれくらい寝ていたのかは知らないが、目覚めた翌日に動けるとはさすが魔法だ。回復がなんとも早い。」

「これお見舞いなの。たくさん食べて」

「この果物はナルと一緒に街の市場で買って来たんだ。全部食べるんだぞ。白河には健康でいてもらわないといけないからな」

「ナルと咲がメロンのような果物と一緒にベッドの脇のテーブルに置いた。メロンのような色と形をしているが、大きさがスイカ並だ。食べれるかな……？」

「そりゃ、それなら私がこれを白河に食べさせてあげよ！」

スフィアがスイカメロン？ を切り分けて、僕に差し出した。まさにあーんという感じだ。嫌ではない、嫌ではないんだけど、恥ずかしいよ！ 僕がスフィアに自分で食べると言おうとしたら、スフィアがナルと咲に睨みつけられていた。

「抜けがけはダメ」

「そりゃ、そりこりのは白河の家来の私の仕事だ」

三人は競りようにスイカメロンを僕に差し出してくる。そんなに食べられないよ！ 僕は助けを求めて師匠を見た。

「モテる男はつらこわねえ」

やつぱりそう来るか！ 師匠はこりこり時あてにならないんだから！ しかたない、多分ダメだろけど博士に頼みますか。

「なんだ、助けて欲しそうな顔をして。その果物が嫌なのか？ でも好き嫌いはいかんぞ。たくさん食べんと強くはなれんからな」

たくさん食べて強くなるヒグ〇「じやないんだから。やはり博士に空氣を読んでもらひのは無理だったか……。

「どうしたの？ 早く食べる」

「そりゃ、そりだ。これが腐つたらどうする」

「まったく……早く食べなれー」

三人が一気に迫ってきた。もつやけだ、全部まとめて食べてやるー。

その後、無理に全部食べた僕は腹痛を起しことほ言つまでもない。

翌朝、僕らは城の食堂で朝食を取っていた。王様の利用する食堂ではなく、兵士などの使う食堂だ。ちょうど、食事どきのためか、その広い食堂は混み合つていた。

「白河も動けるよつになつたし、勇者と王様に挨拶を済ませたら今田のうちに城を出でましらつわ」

「出でましらつてまるで城の人があいつよつですね」

となりにいたスフィアが師匠に言つ。師匠は苦みばしつた顔をすると話を始めた。

「実は私ね、勇者一行に加わることになつたの。だから城に残るのよ。本当は断るつもりだつたんだけどね……」

師匠は沈黙した。弟子をほつり出すようなことなので心苦しこのだつ。僕もできることなら別れたくない……。

「師匠、お別れは嫌なのー！」

ナルが師匠にしがみついた。師匠はナルの頭を優しく撫でる。

「『めんなさい、でももう会えないって訳じゃないわ。魔王を倒したらまたいぐりでも会えるから』

師匠の言葉に咲が不安げな顔をした。そして師匠に弱々しい声で尋ねる。

「しかし、魔族の強さは異常です。勇者とあなたが一緒に言えば、本当に魔王を倒せるんですか？」

師匠はまっすぐな目で咲を見た。咲は思わず息を飲む。そして師匠は質問に答えた。

「魔族の強さも異常なら勇者の強さも異常だったわ。みんなより一足先に会つたんだけど、本当に気迫がすごかつた。彼だけでも魔王を倒せそうなほどだったわ。ただね……」

師匠はそう言つて言葉に詰まつた。僕らは師匠の顔を覗き込む。師匠は言葉をぽつりぽつりと話を再開した。

「なんて言つたら良いのかしら……。違和感と言つてか抵触感と言つてか……。とにかくの気配がおかしいのよ。じつにモ

師匠はそこで深呼吸をした。そして大きな声で僕らの名前を呼ぶ。

「だから白河、ナル、咲、スフィア！ あなたたち四人にはあるお方のもとで修行を積んでもらうわよ。今ままの強さでは何かあつた時に困つてしまつから

師匠の宣言にスフィアが困惑したような顔をした。

「もう気づいてると思つけれど……。私は精靈よ。だから修行しても……」

スフィアの指摘に師匠はチッチと指を振った。問題ないという
ことだろつか？

「大丈夫、あの方、オルガ様なら精霊の力も引き出せるから」

才ルガ様という言葉が出た途端、博士と僕以外の場の空気が凍つた。

「どうした、寒いのか？」

博士にツッコミをする者すらいない。なんだろうオルガ様つて。そんなにすごいのかな?

「オルガ様ってあの空耳で何んでおられるというあのオルガ様なの？」

ナルが師匠に向かつて言った。不思議な緊張感が僕らの周りを包んでいく。

גָּדָרָה

「そんな、あれは伝説ではないのか？」

何事もないかのように師匠は言ってのけた。それに咲が驚きの

声を上げる。驚きのあまり敬語も崩れていた。

「伝説じゃないわ。私は実際にオルガ様の元で修行したんだから」

「えええええーー！」

師匠の言葉に咲たち二人は凄まじい叫びを上げた。周りにいた他の食堂の利用者たちもこちらを見てくる。

「「うるさい」のう。そのオルガとか言つやつはそんなにす「」のか？」

いつのまにか話題を掘んでいた博士が耳を抑えながら聞いた。博士と同じく知らない僕も聞き耳を立てる。

「オルガ様というのは神様にこの地上を任せられた仙人様だ。この世界で神様の次に偉いとされているんだぞ！」

咲がかなりの剣幕で博士に怒鳴った。博士も咲のあまりの迫力にたじろぐ。

「しかしオルガ様はどこにいらっしゃるの？ 精霊の私でもお会いしたことがないのだが」

師匠はスフィアの質問に唸った。あれ、わからないの？

「わからないわ。オルガ様のおられる浮島は常にあちこち漂っているのだもの。だから世界中を探し回る必要があるわ。そうとわかつたら勇者に挨拶してさつと出発なさい！ 時間はないのよー！」

「ふむ、ならわしはクレナリオンの残骸を分析することにしよう。

「ほれ、これを持つていけ。通信機だ。これさえあれば世界中どこに居ても連絡を取れるぞ」

博士は携帯のような物をみんなに手渡した。説明書のような物もついている。みんなに対する配慮だろう。なかなか博士にしては気がきいている。

「それじゃあ、勇者と王様に挨拶をしてきますね。行ってきます！」

僕はそういうて師匠と博士に手を振った。師匠たちも振り返してくる。

して
いた
。.

第三十話 新たな旅！ 目的地は云説の地（後書き）

実は今回が過去最長です。読んでくださりてありがとうございます！

第二十一話 勇者と聖剣（前書き）

今回より新規文庫化を始めます

第三十一話 勇者と聖剣

第三十一話 勇者と聖剣

「ひけらがわが王と勇者様のおられる玉座の間です。くれぐれ王の前で粗相のなじようお願いします。それでは準備はよろしいですね？」

僕らは近衛兵に案内されて玉座の間の前に来ていた。重厚で大きな扉や深紅の絨毯が敷き詰められた廊下にはいかにもといった風格があつた。僕はその雰囲気にのまれそうになりながらも近衛兵に頷いた。扉が重々しい音を立てて開かれていく。

「おお……」

僕は思わず息を飲んだ。贅を凝らした室内は広々としており、金に輝く装飾品があちらこちらで輝いている。だが決して成金趣味といつよくなけばばしさではなく、むしろ気品に溢れていた。さすがは王様の城といったところか。なんともはや芸術的な室内の奥に燐然と輝く玉座があった。その上に王様と思わせる壯年の男性が腰掛けている。さらに、その脇には勇者と思しき青年と大臣らしき中年の男の姿もあった。

「そなたたちがこの間の戦士たちか。苦しうつない、ひけりよれ」

王様は立派な髭を撫でながらそう言つた。全身から武人とはまた違つた霸気が発せられている。指導者のオーラとはまさしくこういふものを指すのだろう。

僕らは緊張に身体を硬くしながらゆっくり王様の方に歩いて行

つた。

「ふむ、余がこのダタールの王、カイザルである。そなたたちのこの度の働き、まことに大儀であった」

エルストイにとどめを刺したのとかほんとそつちの勇者ですかうね……。僕は王様のお褒めの言葉に少しだけ戸惑った。

「いえいえ、そちらにいらっしゃる勇者様のおかげです」

僕がそつこうと勇者がいらっしゃりを見てきた。なんだ、この見透かされるような感覚は……。そして無理矢理何かを隠しているように見えるその瞳は一体……。白銀の甲冑を纏い、聖剣を背負つその勇ましい姿はまさに勇者そのもの。なのにどうして気配が……あのエルストイに似ているんだ……？

勇者はそんな僕の渦巻く感情を無視するかのよつて王様と話を始めた。

「王よ、あのエルストイとか言つ魔族を倒せたのは彼らのおかげさ。何か褒美をあげたらどうだい？」

「やうか。ならば何か『えるとしよつ。ほれ、何か望みのものがあるならば』言つてみよ」

王様に言われて、よつやく僕は思考を回復した。それから褒美にもうう物を考えるがすぐに思いつかない。やつぱりこうこうことは話し合つた方が良いだろ。う。そう思つた僕はみんなに意見を求めるにした。王様に許可を取るとみんなで話し合つ。

「みんな何か欲しい物ある？」

「うーん、私は特にならないな。まあ強いて言つなら刀だ」

「私も特はない。白河の好きな物をもらえばいいこと思つた」

「そうね、旅に出るための馬車をもらつといふこと思つて。これから買わなくて済むもの」

ナルの馬車を採用だな。咲の刀もいいけれど、この国にあるのかわからぬからね。

「王様、馬車を頂きたいと思います。それで良いでしょうか」

「良かね。その大臣に手配せらるゝえ、どのよつな物が良いか大臣と話しあつて良い」

「ありがとうございます、王様」

「いやいや、王として街を救つた者にたいする最低限の礼をしたまでだ。では達者で旅をするが良い」

王様が話を終えると大臣が僕らの方に来た。そして扉の方に移動して手招きをする。ついてこいと云つことなのだろうか。僕らは大臣に続いて玉座の間を後にした。

「ねえナル、さつきの勇者ってエルストイみたいな気配がしなかつた？」

僕は城の廊下を歩いていた途で、小声で隣を歩くナルに聞いた。ナルは僕により近づいて言った。

「確かに似ていたの。でも勇者が魔族とこうのはありえない」

「どうして？」

僕はすぐ、ナルにオウムのように聞き返した。ナルは小さな声で僕に耳打ちする。

「勇者は聖剣を背中に背負っていた。あんなこと魔族にはできないもの」

聖剣つてエルストトイと戦つたときにも良く出てきたけどそんなにすごいのか？

「聖剣つてどんな剣なの？ 僕は知らないんだけど」

「聖剣とは初代ダタール皇帝にして初代勇者のブレスデンが手に入れた神の力を分け与えられた剣。魔族に対して絶対的な力を持つの。だから魔族は剣に近づくことすら避けるわ。ましてそれを背中に背負うなんてありえないの」

なるほど、やつだつたのか。なら勇者は白かな……。あれれ、ナルのセリフ今おかしかったよつたな？

「今初代皇帝つて言わなかつた？」

「ええ言つたの」

「ならなんでわざの王様は王様なんだ？　帝国なんだし皇帝じゃないのか？」

「それはね初代しか皇帝と名乗ることを許されていないからなの。だから他の人は王と名乗るの」

なるほどなるほど、そういうことだつたのか。僕がそう納得したところで、僕らは城の庭まで着いた。大臣が庭の端にある馬小屋の前に立つ。

「好きな馬を一頭選びなさい。私はその間に車の方の手配をして来よ」

大臣はやうやく居なくなつてしまつた。僕らは馬を選び出すことにある。

「この馬なんて良さそうだな。大きいし毛並みもいいぞ」

咲が一頭の馬に目をつけた。咲の言つよつに黒々とした毛並みの美しい大きな馬だ。

「私はこの馬がいいと思つた。生き生きしている」

スフィアも一頭選び出してきた。こちらも黒い大きな馬だつた。この一頭で決定かな。僕は一応ナルにも聞いてみたが、ナルは馬には興味がないということだつた。そうしている間に、大臣が兵士と車を伴つて庭に現れる。

「ほほう、良い馬を選ばれましたな。私も乗馬はしますがこれはなかなかですぞ。長旅も大丈夫でしょうな。さて、車の方を用意して

きたがこれでよろしいかな？ 確かめて欲しいのだが

大臣はそういうと車を指し示す。幌の張られた丈夫そうな車だつた。実用性を重視したのだろう。僕らは言われたように車を隅々まで確認をしたがどこにも問題はなかつた。

「大丈夫です。ありがとうございました！」

僕がそういうとみんなも頭を下げる。大臣は照れ臭そうに顔を赤くした。

そのあと、僕らは車に馬をつけて、いよいよ城から旅立つていく。

「さてと、まずはどこに行こうか？」

「やうだな……。まずは竜の山なんてどうだらう？ 浮島に行くためには空を飛ぶ乗り物がいるだろうからな」

城の門をくぐつたところで僕は目的地をみんなに聞いた。その質問に咲が地図を見て答える。咲の意見にみんな賛成のようだつた。竜の山……。どんなところだらうか。僕らの旅は今、始まつたばかりであつた……。

第三十一話 勇者と聖剣（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三十一話 リンドン再び！

第三十一話 リンドン再び！

僕らは竜の山を田指して一路、帝都ハニアイから南に向かつていた。草原に囲まれた街道を馬車で駆け抜ける。

「そりそろ補給が必要だな。でも路銀が少々心許ないし……うむむ……」

咲がそろばん片手に帳簿とにらめっこしている。そろばんが得意だ、と言つた彼女が今のパーティーの家計を担つているのだ。

「ずいぶん早くないか？」の前街によつてから一週間も経つてないよ

僕は咲の言葉に疑問を感じて質問した。確かにやつた時に、一週間分ぐらいの食料を買ったと言つてたよつた気がする。ならまだ大丈夫じゃないのか？

「やつで本読んだのがたくさん食べたからな。もつ残り少ないんだ」

咲は魔導書を読み耽つていたナルをじいと睨む。ナルは睨む咲を無視するかのように本を読み続けた。どうやら本に夢中のようだ。

「ナルは育ち盛りなんじゃないのかな？」

僕はナルを見て、食事の度に皿の山を作る姿を思い出した。でもそれは大きくなるためなんだろうから仕方ないんじゃないのかな。

「そういうレベルじゃないと思つのだが……。それにナルは十七才だからもう成長期じゃないぞ」

えつ……ナルってそんな歳だったの？ 今日初めて知ったよ！ てつくり十五才ぐらいだと思ってたのに……。
そして僕が驚いていると外から声が聞こえた。

「おーい、街が見えて来たぞー！」

御者席で馬を操っていたスフィアの声だ。彼女は精霊さんであるためか動物を扱うのが上手かったのだ。そんなスフィアの叫びによつて僕らは馬車から身を乗り出す。僕の目の前には懐かしい街があつた。森と草原の間ぐらいにある壁に囲まれた美しい街。そう、僕がこの世界で最初に来た街、リンדוןである。

「もうすぐ街に着くから荷物をまとめなさいよ」

スフィアが外からお姉さんぶつて言つた。実際彼女が一番年上なんだけどね。その言葉を聞いた咲が手早く荷物をまとめ始める。

「まだ途中なのー！」

いきなり咲がナルの本を取り上げてかばんにしまつた。ナルは頬をぷうつと膨らませて咲を見る。咲は見事にそれをスルーすると荷造りを終えた。そしてみんなに話を始める。

「さて、荷造りも出来たし、これからどうする？ 買い出しに行く

「」とは決定しているが

「なら僕はみんなが買い物している間に冒険組合に依頼を受けに行こう。路銀も少なくなってきたことだし」

女の子の買い物は長いから。暇なその間に僕は稼いでおいた方が良いだろう。

「一人だけでは危ないな。家来の私もついて行くぞ」

「咲だけはダメ。私も行くの」

「それなら私も行かせてもらおつかな」

僕に誰がついていくのかで三人は睨み合いを始めた。眼光の鋭さが異常だ。いつ喧嘩に発展してもおかしくない。僕はとりあえず三人を仲裁することにした。

「まあまあ、みんなで一緒に行けばいいんだよ。ね、そうしようよ

三人はしばし考えたがそれぞれ答えを返して来てくれた。

「白河がそういうのなら従おう……」

「しかたないの。一時休戦」

「私もそうしようか

三人は何とか納得したようだ。こうして僕ら四人で依頼を受けに出かけることになった。

「こんにちは。久しぶりだね」

僕は冒険組合の建物に入ると、さっそく受付のリーナに挨拶をした。リーナは僕らの方を見るとすぐに笑顔になる。

「白河さん！ 心配してましたよ！ ダタールで大変な事件があつたそうですね！ 卷き込まれませんでしたか？」

僕らはむしろ巻き込む側でした……。そう思つたが黙つておこう。もし前みたいに気絶されたりしたら困るから。

「大丈夫だったよ。ははは……。それより依頼ないかな？ 今旅をしているのだけど、路銀があと少ししかないんだ」

リーナは僕がそういうと後ろにいるナルと咲を見た。

「依頼ですか？ それはもちろんありますけど……。そんなことよりさつきから気になつてたのですけど、もしかして後ろの人は白河さんの仲間ですか？」

リーナに尋ねられた二人は自己紹介を始めた。

「私はナル。白河の嫁よ」

「い、今のナルの嫁発言は嘘だからなー。私は咲、白河に仕える家来だ。これは本当だぞ！」

リーナは一人の白河さん紹介を聞くと急に口にやけだした。近所のあ
ばあちゃんみたいな顔だ。

「白河さん、モテますねえ。ついでめしですよ。ふふふ」

リーナさんの皿が僕を全力でからかいつていた。これは早く何とかしないことややこじことになるぞ! -

「それはいいから……。依頼を見せてくれないかな?」

「ノリが悪いですよ。でもそれが白河さんらしいですね。ちよつと待つててくださいね。すぐ依頼書持つてきますから」

リーナはカウンターの中から紙の束を取り出した。それをざわっと広げて皿を通していく。そしてある依頼書を取り出した。

「これなんてどうですか? 最近入った依頼なんですけど、引越してくれる冒険者的人がいなくて困つてたんですね。ランクの依頼ですけど、割はいいですよ。どうですか?」

訳ありの依頼なのだろうか。気になつたので読んで見ることにする。

「見せてみて。読むだけ読んでみるから」

「あれ、白河さん文字読めましたつけ?」

リーナが疑問を口にした。そういうえばそつだつた。博士の発明で読み書きできるようになつたから忘れてたよ。

「練習して読めるようになつたんだ

無難な嘘をついておくことにした。リーナは何の疑いもなく信
用してくれた。

「やうですか。ならどうぞ」

僕はリーナから渡された依頼書を読んだ。

『森に現れる怪しい団体を調査してください。報酬は一十万ルーツ』
よくわからないことの多い依頼だ。怪しい団体って何なんだ。わ
からないから調査依頼が来るのだろうけど……。僕一人では決めか
ねたので、みんなにも見せた。

「私はこいつ見てUランクの冒険者だ。問題ない！」

咲が任せておけと言わんばかりに胸を張る。咲ってUランクだ
つたんだ。咲ぐらい強いなら当然かもしれないけど。だがそれにナ
ルがつっこんだ。

「Uランクの白河に負けたけどね」

ナルのつっこみに咲は言い返すことができない。咲の顔がくや
しいのか赤くなる。

「むう……。そんなことナルに関係ない！ 白河、その依頼受ける
ぞ。スフィアもそれでいいな？」

スフィアは咲の迫力に押されて無言で何度も頷いた。その顔は

微妙に引き攣っている。咲の前での試合の話題は禁止しなきゃいけないようだ……。

「じ、じゃあ受けける」と口にする。

僕はリーナに依頼書を返した。リーナは苦笑いしながら依頼書を受け取る。依頼成立だ。こうして僕らは森で”怪しい団体”とやらこうのを調査することになったのだった。

第二十一話 リンデン再びー（後書き）

感想・評価をお願いします。

第三十三話 謎の集団来襲！（前書き）

ようやく主人公が主人公らしくなつてきたよつな気がします……。

第三十二話 謎の集団来襲！

第三十二話 謎の集団来襲！

僕らは”怪しい団体”を調査するためリンドン南の森に来ていた。森の中は薄暗く、じつとりしている。僕は辺りを魔力使って探索していたがそれしき反応はない。

「とりあえず今はこのあたりに誰もいないようだな……。ふう、疲れた。一旦休まないか？ 神経を張り詰めているから疲れてかなわん」

咲が疲れたのかみんなに提案した。咲は魔力がない代わりに気というものを使える。その気を使って咲は森を探索しているのだが、それは魔力を使うより疲れるらしい。

「わかった。なら開けたところで休もうか」

僕の言葉にみんな賛成のようで、僕らは移動を始めた。この森に詳しいスフィアの案内で少し歩いていく。視界が急に開けた。巨木の群れがなくなり、小さな広場になっている。

「ここって……」

「どうしたの？ 気分が悪いの？」

ナルが言葉を失っている僕を見て声をかけてくる。僕は当たり障りのない返事をすると、また物思いに耽った。僕はこの広場に見覚えがあった。僕がこの世界に降り立った場所だつたのだ。

「まつたく懐かしいなあ、白河」

スフィアが僕の耳元で囁いた。僕は無言で頷く。その様子を咲とナルは奇妙な目で見ていたが、何も言わなかつた。

「そろそろお昼。休憩するついでにお弁当食べたいの」

「もうそんな時間か？ ならお昼にするとするか」

「そうだね。食べましょつか」

咲とスフィアもナルに賛成した。咲が背中の風呂敷からお弁当箱を出した。僕らはなごやかな雰囲気になる。僕は弁当箱の中からサンドイッチのような物を取り出して頬張る。うーん、おいしい！スフィアの作った物だが最高！ フワフワな卵が絶妙だ。僕はどんどん手を伸ばして食べる。弁当箱はあつという間にからっぽになつた。

「おいしかつたー！ スフィアありがと」

僕は腹をさすりながらスフィアを褒める。スフィアは頬を赤くした。

「練習したからな、当然だ」

スフィアは照れ臭いのか、小声で言つた。その様子を見ていたナルと咲が膨れる。

「料理なら私も……たぶんできるの」

「私だつてそれなりには……」

二人はそう言つたところで沈黙する。それを勝ち誇るような顔でスファイアが見ていた。やれやれ、喧嘩はダメだと言つてゐるのに。

「三人とも喧嘩しちゃダメだよ。ちゃんと仲良くしなくちゃ……うぬ？」

僕は殺気に気がついた。みんなも気づいたようで、急いで僕らは探索する。気配が十、こつちに向かつてくる。かなりの速さ。隊列を組んだその動きは間違いなく人間だった。

僕らはそれぞれ武器を構える。僕とナルが杖、咲が刀、スファイアが大剣だ。

ガサガサと木の枝が揺れた。十の人影が僕らを取り囲むように地面に降りる。人影は黒ずくめの格好をしている。地球の特殊部隊が着るような装甲だ。どう見てもまともな連中じゃない……。

「ついに見つけたぞ！ さあ無の精靈よ、我々と來るのだ！」

先頭の黒装甲の男が興奮したように叫んだ。さらにスファイアに向かつて手を伸ばす。

「何をするんだ！ 貴様ら何者だ！」

スファイアは黒装甲の手を払い退けると苛立ちをあらわにして言い放つ。黒装甲は後ろに下がつたがスファイアに向かつて殺氣を放つ。

「興奮するな。我々はお前の価値の理解者だ。さあ来い、來るのだ！」

！

黒装甲はスフィアの言葉に聞く耳をもたない。さうに強引にスフィアの手を掴みとる。ぐわ、見てられない

「やめろー。離せー。」

僕は黒装甲たちの前に立ちはだかる。そして黒装甲の手を強くはたきつけた。よろけた黒装甲は後ろに下がる。

「白河……」

スフィアが潤んだ瞳で僕を見てくる。何だかとっても照れ臭いや……。

「スフィアは大切な友達だからね。あんな不得体の知れない連中には渡さないよ」

「友達というのが気になるけど……ありがと」

柄にもなく格好つけたことを言ってしまった。スフィアがさらには赤くなつていぐ。そこで黒装甲が馬鹿笑いを始めた。

「あはははあ！笑わせてくれるなあ。エナジーレベル10程度の一般人のくせに邪魔するつもりか？」

「エナジーレベル？　強さを表すのだろうか。それにしても一般人か。一応それなりには僕も強くなつたと思うのだけどね……。」

「もちろんー。」

僕は黒装甲を睨みつけて言い切る。それに続いて僕の後ろからも声がした。

「私たちも忘れるなよ！」

「スフィアは行かせない。彼女を倒すのは私だけだもの」

ナルと咲が力強く言う。そして、一人は魔力や気を高め始めた。僕も負けじと魔力を高める。膨大な魔力が全身を満たしていく。溢れんばかりの力が森の木々を揺らした。

「た、隊長！ そいつらのエナジーレベルが急上昇していきます！ 何でことだ信じられない！ 12000を突破しました！」

腕時計のような物を見ていた黒装甲が悲鳴を上げた。ほかの黒装甲も後ろに向かつて後ずさる。

「うひたえるな！ ドクターソノラ様は無の精靈を待ち焦がれておられる。何がなんでも連れていくんだ！ 行くぞ！」

こうして謎の集団と僕らの戦いの火蓋が切つて落とされたのだった……。

第三十二話 謎の集団来襲！（後書き）

感想・評価を待っています！

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！

森の広場で僕らは謎の集団と睨み合っていた。敵はかなりの熟練者のように、なかなか攻撃をしてこない。シンフと静まりかえつた空気が辺りを包んだ。互いの息遣いさえ聞こえる。その静寂はしばらく続いたあと、黒い装甲を着た敵によつて破られた。

「そりゃあ！」

気合いと共に敵は一斉に攻撃を仕掛けてきた。怪しく光る剣が一振り、僕に向かつて振り落ろされる。僕はその剣を杖で受け止めた。激しい火花が飛び散り、ギイツと言つ耳障りな金属音がした。さらに手に微妙な振動が伝わってくる。嫌な気がした僕は魔力を腕に集めて、強引に剣を弾き返す。後ろから気配を感じた。杖を後ろに向かつて突き出す。杖は後ろに回り込んでいた敵に命中した。敵の硬い装甲の隙間に杖が入る。

「うがあ！」

敵は聞くに堪えない呻き声を出した。そして、その身体は地面に崩れ落ちていく。

「ちつ、やはりエナジーレベルが高いだけあって強いな！」

僕の前にいた敵が倒された仲間を見て舌打ちした。さらにもう一つは周りを見回して後ろに数歩下がる。僕も周りを見てみると、咲たちはすでに残りの敵を倒していた。

「残りは一人だけ。さあどうする?」

僕は目の前にいる隊長とか呼ばれていた奴に聞いてみた。もしここで降伏するなら痛め付けるつもりはない。

「仕方あるまい。撤退だ!」

隊長らしき奴は味方一人を引き連れてその場からすばやく逃げ出した。僕は魔法を使い、一人の足を凍らせる。一人は派手に転倒する。だが、二人は手を上手く使いほふく前進で逃げていく。でも当然ゆっくりなので僕らはすぐに追いついた。

「逃げられないぞ。お前たちは一体何者なんだ?」

咲が刀を突き付けて一人を問いただした。しかし一人は沈黙して何も話そうとはしない。

「魔法を使えばあなたたちを自白させることは簡単。ただし、それをすると精神は確実に壊れる。それでも話したくないの?」

今度はナルが痛みを効かせて言う。一人は若干動搖し始めた。顔色が悪くなり、小刻みに震える。

「わかった。話してやる」

ナルの脅しに堪えかねた隊長の方がそう言った。そしてぼつぼつと長い話を始める。

「我々はドクターソノラ様の率いる結社アルカデに所属している特

殊部隊だ。ちなみに俺が隊長。そして今回は任務でそこにいる精靈をさらいにこの森に来た」

「アルカデ……。古代の国の名前か」

僕はアルカデという名前に聞き覚えがあった。確か、数万年前に滅びた伝説の古代国家だと座学の時に師匠が言っていた。

「そうだ。よく知っているな。我々の目的は古代国家の復活。それを成し遂げるために日夜様々な活動を水面下でしているのだ」

男は誇らしげに言う。自分たちの理想が正しいと思つてゐるからだろう。まったく良い迷惑な連中だ。

「そうだとして、なぜ私を捕まえる必要があった？　私はそれほど強い精靈でもないし……」

スフィアが男に向かつて尋ねる。まったくにその通りだ。スフィアをさらうより貴族の令嬢でもさらうた方が利益になるだろう。

「それに関しては俺は良く知らん。何でも魔族に対抗する兵器の鍵になる存在だから連れて来いと命令されただけだ」

「なるほど。ではさつき言つてた無の精靈といつのは何なの？　よくわからぬのだが」

咲が男に向かつて問い合わせる。すると何故かスフィアが顔を赤くして答えた。

「それは私が答える。その、すごく恥ずかしいことだが……私は属

性なしの精靈。だから無の精靈なんだ

無属性だから無の精靈なのか。なるほど結構単純だ。僕がのんきにそういう思つてこると、咲とナルが目を真ん丸にして驚いていた。

「無属性の精靈なんているんだな。初めて聞いた

「私も。やたら力持ちだから地属性だとずつと思つたの」

「ふむふむ、無属性といつのは珍しいよつだ。そう思つた僕はスフィアの顔を覗き込む。

「や、やめてくれ。そんなに見られると恥ずかしい」

スフィアが慌てて後ろに飛びのく。それを咲とナルは呆れたよう見た。

「はあ、今はそんな場合じゃないぞ。おい、他には知らないのか？」

咲が再び男への尋問を再開する。すると男は狂ったように笑い始めた。おかしくなつてしまつたのか……？ 僕らがそう思つたところで男は笑うのをやめて話はじめる。

「ははは、もう知つていることなどほとんどない。我々など下つ端も良いところなんだからな。ふふ、お前たちと楽しく話している間に本部に通信が取れた。おめでとつ、晴れてお前たちはアルカデの敵になつた。せいぜい氣をつけることだな。幹部や精銳、セリードクターソノラ様は恐ろしいぞ。ふはははあ！」

隊長の男とその後ろにいた奴は装甲の隙間から試験管のような

ものを取り出した。なかには蠱惑的な緑色の液体が入っている。それを男たちは一気に飲み干した。男たちの身体から湯気が溢れて、その口からは割れんばかりの叫びが漏れる。装甲から僅かに見える皮膚は赤く爛れて、焼かれたようになつた。そして信じられないことに男たちの身体が溶けていく……。

「い、いやあああ！」

ナルが衝撃的な光景に泣き叫ぶ。咲とスファイアも泣きはしないが茫然自失として、言葉を失っていた。その額からは嫌な汗が噴き出している。

「なんて死にかただ……。信じられん、こんなことあつて良いのか……」

しばらくして、咲は液体と化した人間だったものを見て小声でつぶやいた。

なぜ、男たちはこんな残酷極まりない死にかたをしなければならなかつたのだろう……。他にも死にかたぐらいあるだろうに。

「……多分、魔法使いが死体を調べるのを恐れたから。そうとしか考えられないの……」

恐慌状態から回復したナルがそう言つた。その通りなのだろう。だがそれにあんまりだ。

長い沈黙の後で、僕らは氣絶していた他の敵を魔法で完全に拘束すると、リンדוןまで連行していった。そして組合に身柄を預ける。疲れきつた僕らはあらゆることを後回しにしてその日は眠りについたのだった。

第三十四話 新たなる敵、その名はアルカデ！（後書き）

感想・評価をお願いします。

第三十五話 滉巻く陰謀（前書き）

今回は悪役サイドの話です。

第三十五話 涼巻く陰謀

第三十五話 涼巻く陰謀

何処とも知れぬ山の中、あらゆるもののが凍りつく場所。吹き荒れる吹雪の中、巨大な要塞が佇んでいた。その要塞は山にそうようにして建られていて、高い壁と塔がそびえている。そのいずれも黒くて滑らかな石のような材質で、かなり年月を経ているようだが、傷一つとしてついていない。

その要塞の地下深いところに一人の女がいた。女のいる地下室はほの暗く、中央に水槽がある。水槽には人型の機械が入っていた。西洋甲冑のような形をしたその機械からはコードが無数に伸び、胸部に緑色のクリスタルが嵌めこまれている。クリスタルは怪しく揺らめく光を放っていた。その微かな明かりを女は恍惚とした表情で見ている。長く艶やかな紫の髪を横に流し、潤んだ赤い瞳は穏やかに水槽を見つめる。

「ほう……。後少しだわ……」

すうっとしたの良い唇から吐息が漏れる。官能的なそれは聞くものを魅了する魔力があった。

空気が漏れるような音がした。さらに暗い室内に光が差し込む。女がけだるそうな動きで扉の方を見ると三人の男が立っていた。それぞれ黒い学生服のような軍服とマントを着用している。

「失礼いたします、ドクターソノラ様。緊急事態が発生しましたのでご報告に参りました」

真ん中に立っていた男が恐縮したように話す。女は苛立たしげに

髪をかきあげた。

「報告？ なんのそれは。早く言いなさい」

ソノラは良く通る高い声で言つ。その声には機嫌の悪さがありありと表れていた。男は小さくなりながら報告をする。

「無の精靈の回収に向かつていた第七小隊が壊滅しました」

ソノラの目が細まつた。そしてその鋭い眼差しで男を睨みつける。

「全滅ですか？ 原因は？」

「無の精靈を発見した際にその仲間と思われる三人と無の精靈の合わせて四人と交戦。その結果敗北し全滅しました」

ソノラの瞳の色が変わつた。赤い瞳が金色に染まる。その髪はにわかに逆立ち、黒紫色の稻妻がスパークした。

「負けた？ 十分な戦力は与えてあるはずだけど」

「は、それが敵の戦力が想定外なほど高くてですね……」

男は言葉に詰まつた。さらに男は顔色を悪くする。それをソノラは見逃さなかつた。

「言い訳は良い。見苦しいわ」

男の身体が宙に浮かび上がつた。男は衿元を苦しげにつかみ、

足をばたつかせる。顔から血の気が引いていき、身体の動きも緩慢になつていった。

「 もう良い」

男の身体が解放された。男は床に向かつて盛大に尻餅をつく。脇にいた男たちがすぐに彼に駆け寄つた。

「ワグナ、アルカデが出来てから何年になる？」

「 はあはあ、今年で十五年になります」

ワグナと呼ばれた男は部下に支えられながらもすぐに答えた。息は切れ、顔面蒼白としている。

「 そつだワグナ。正確には十五年と一ヶ月と二日だ。これが何を意味するかわかるか？」

ソノラは子供に問い合わせるような口調で尋ねた。聞かれたワグナは答えが分からずに戸惑うものの分からないものは分からない。彼はやむを得ず分からないと答えることにした。

「 い、いえ」

「 我々がいかに貴重な時間を無駄に使つたかだ！ 我々に与えられている時間は限られている。今しか機会はないのだ、今しかな。それなのに……」

ソノラの顔が憎悪に歪んだ。瞳が再び金を帯びる。

「我々は何の目的も達成できていはない！ そう何の目的もだ。分かることかワグナ！ 私は長い長い冷凍睡眠から目覚めて五十年後、満を待してこのアルカデを設立した。だがこの様はなんだ。あんな簡単なお使いすらできないとは。私は馬鹿と愚か者は大嫌いだ。……そつだなもし次に私を失望させたら……」

ソノラがワグナの方をキッと睨む。ワグナは心臓をソノラに掴まれたような心地がした。背筋を冷や汗が流れる。

ソノラが黒いエナメル質の手袋をした手を振った。バシャリと水が飛び散るような音がした。

「ぬわあああ！」

ワグナは目に写った衝撃的な“物”に驚愕した。そりで彼は血まみれになつていていた自分の身体を見て喉が裂けるほど悲鳴を上げる。

「そつなるわ。死にたくなかつたらせいやいしつかり働くことね

ソノラは首から上が消失したワグナの部下とそれを見て狂つたように叫び続けるワグナの姿を見てささやいた。そして妖艶に微笑む。

「ふふ、良い感じよ。もっと見ていたいぐらいだわ。でもそろそろ働いてもらわなくちゃ」

ソノラは手を上に向けた。それに合わせてワグナの身体が直立不動の姿勢を取る。

「ドラグナー王国への侵攻時期を早める。準備しなさい」

ソノラはそつけない態度でそつとつた。それを聞いたワグナの顔が露骨に引き攣る。

「む、無理です。あそこは古代竜が守護しております。今の戦力では……」

ワグナは恐怖に怯えながらもソノラの命令を拒否した。しかしそんなことなどソノラには想定済みだ。彼女はワグナに近づき、彼を指差して言つ。

「飛行戦艦を使えば良いわ。戦力はこれで足りるはずよ」

「飛行戦艦ですか？ あれは発掘は出来たのですが復旧に手間取つております。使うには後一ヶ月は見ていただきかないといけませんが」

「なら一週間でなんとかしなさい。完璧でなくともいいから一週間よ。最近魔族も騒がしくなつてきたし、いよいよ時間がないから」

ソノラはそういうと部屋の中央に戻つた。そしてそいつにワグナに告げる。

「もし、死にたくないのならば確実に一週間でやることね。そうでなければ死あるのみよ」

そういうとソノラはワグナを自由にした。ワグナは任務を遂行するべく、廊下を血相を変えて飛んで行く。ソノラは彼がいなくなつたところで扉をしめ、再び水槽の中を見つめはじめた。

「やれやれ。使えない部下を持つと苦労するわ。でもそれもあとわざかだけどね。ふふ、ふふふ、あーははは！」

他に誰もいなくなつた部屋に、ソノラの高笑いだけが響きわたつた……。

第三十五話 潟巻く陰謀（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第三十六話 今明かされし伝説！（前書き）

後書きにお知らせがあります。更新停止のお知らせなどではないですがお読み下さい。

第三十六話 今明かされし伝説！

第三十六話 今明かされし伝説！

街に帰ってきた僕らは氣絶させたアルカデのメンバーたちを冒険組合に預けると、とりあえず宿屋へ向かった。もう夜になりかけていたからである。そして宿屋で夕食を取るため食堂へと一階から降りていく。

「ふう、今日は疲れたな。まったくあいつらは一体なんだったんだ？ アルカデなんて組織は聞いたことがないぞ」

咲がぐつたりして言った。その身体はテーブルに寄り掛かっていてお行儀が悪い。

「咲、疲れたのは分かるけどその姿勢はダメだよ

「さすがに田舎侍だけのことはあるの」

僕が注意すると、さらにナルが少し厭味つたらしく言う。咲は背筋を伸ばすとナルの食事の様子を食い入るように見はじめた。しかしナルは皿の山を作つてはいたが、咲の期待するようなマナー違反はしていなかった。

「くつ、文句がつけられない！」

咲が思わず漏らした。ナルは勝ち誇つたような視線を咲に送る。咲の額に血管が浮かんだ。しかしそもそも咲が悪いことだったので怒れない。ナルは咲が怒らないのでさらに調子に乗る。

それがしばらく続いた後、ついに咲が爆発しそうになつたところでスフィアが二人の間に割つて入つた。

「一人とも子供みたいだぞ。それくらいで喧嘩しない」

スフィアはそういうて一人に水を飲ませて落ち着かせる。だが、ナルの方がふと思つところがあつたのか「うつぶやいた。

「……私は子供じやないの。それに私が子供だつたらスフィアは大年増になる」

スフィアは耳が良い。よつてナルのつぶやきは一言一句彼女の耳に入った。

「……僕は師匠や博士に報告するから先に部屋に戻るよ」

「わ、私も疲れたから戻るぞ」

僕と咲はスフィアのただならぬ気配を察知した。そして、その背筋がゾクリとする感覚に冷や汗をかきながらもその場から後退していく。そうして僕と咲は階段の前たどり着くと全速力で駆け上がり、二階の部屋に避難した。

「なんだとナルウ！ もう一度言ひなさい！」

「聞ひえてたの！」

ついにスフィアが爆発したようだ。しかしながらも負けてはいないうまい。口喧嘩をする声がはつきりと一階からしてきた。

「な、なあ白河、今日はここにで眠らせてくれないか。私にはあの一人の相手は無理だ！」

咲が強張った表情で僕に頼んできた。女の子を部屋に泊めるのはちょっと……でもあの二人と一緒に嫌だつし……といつも危険だ。

「分かった。だけど今夜だけだからね？」

「ありがとう。世話をなるべく」

やれやれ。僕はため息を一つつくと、かばんから博士から貰った通信機を取り出した。そして、師匠と博士に回線を繋ぐ。この通信機は同時に二つの回線を繋げるのだ。その様子を咲は後ろから覗き込んでいる。

『おお白河。わしの方は分析作業は順調だぞ』

『私の方も特に何もないわ。順調に旅を続ける。勇者は相変わらず不気味だけね』

二人は元気そうな様子だった。むしろ博士の方に至つては少し声が大きすぎるくらいだ。

『一人とも元気そうで良かつた。実はこっちでちょっと困つたことがあって……』

僕は一人に脳間に起きたことを説明した。二人は僕の説明に頷いていたが、その声色もやがて険しいものとなっていた。

『なるほど。おそらくクレナリオンを開発したのもそ奴らの仕業だな。本当にやつかいことだ』

『ただでさえ魔王がいるの……』の先輩ひしたらこいんだひつ『

弱気な僕は頭を抱えて唸る。そこで師匠が話に入ってきた。

『魔王に関してはこちらでなんとかするから、白河はそのアルカデとか言ひ連中をなんとかしなさい。放つておくとくべでもないことをするわよ』

魔王は何とかするつて……。まあそれはいいとして師匠が何やら意味ありげに、ろくでもないことをすると言つたように思えた。まるで何かやらかすと分かっているかのようなくちぶりだ。何かアルカデのことを知つているのだろうか？

『師匠、どうして何かやらかすと分かるんですか？』

僕がそう聞くと、師匠は一瞬間を置いて勿体振る。

『アルカデとか名乗つてゐるからよ。アルカデって言つのは今から遙か昔に滅びた国だつてことは確か教えたわよね？』

『ええ、はい』

『さうよね。でも確か何故アルカデが滅びたまでは教えなかつたはずだわ。それを今から話してあげる』

『これから師匠の長い話が始まつた。僕は後ろにいた咲を横に座らせて、一緒に静かに話を聞く。

『アルカデといつのは非常に文明の発達した国で当時の魔王を滅ぼし、地上に大帝国を築いていたわ。でもそんな国が滅びる原因となつたのは一人の科学者のせいなの。名前は確か……ソノ……なんだつたつけ？　まあいいわ。話を続け』

『ちょっと待つたその科学者の名前はソノラといふんじゃないのか！』

咲が突如として師匠の話を遮つた。そういうえばあいつらドクターソノラ様とか言つてたような気がする。

『やうやうソノラよ。どうして知つているのかしら？』

『いや、連中を率いている奴がそいつに乗つているんだ』

咲の言葉に師匠が呆然とした。しかしさすがは師匠と言つべきかすぐに精神を立て直す。

『うーんまさか本人？……さすがにそれはないわね。話を続けるわよ。そのソノラという科学者は若くして天才と呼ばれ、名声を欲しいままにしていたわ。だけどそんな彼女にも越えられない存在がたつた一つあつた。何かわかる？』

たつた一つの越えられない存在？　僕にはさっぱりわからない。そう思つていると博士が小さくつぶやいた。

『神か』

まさか。それはないだろ。僕がそう思つていると、師匠が僕に

とつて意外なことを言つた。

『「」名答。その通りよ。彼女は神といつ存在を超えるとして、神に敗れた』

当たり前だ。そんなことできるはずがないだろ。だが天才が当てもなく無謀なことをするだろ？ 僕の頭に嫌な想像が生まれる。

『その結果アルカデは滅びたわ。ただいろいろな話があつてね、中にはソノラはまだ生きてるなんて学説もある。もっとも今ソノラとか名乗つてる敵の親玉は偽物だろ？と私は思つけどね。話はこれでおしまい。そろそろ遅いし通信切るわよ？』

師匠はそこまで言つと通信をやめようとした。それを僕が止める。

『待つてください。師匠、そのソノラとか言つ科学者めじつやつて神に挑んだんですか？』

僕がそう尋ねると、師匠は僕の質問に歯切れが悪そながらも答えてくれた。

『その方法はよく分かつていね。資料もほとんどないし、数少ない資料は全部教会が厳重に封印しているもの。ただ私が知つてるのは精靈を利用した強力な兵器を造つたといつことぐらいかしらね。それ以上は知らないわ』

なるほど。もしかしてその兵器とやらを復活させるために入ニアをさらおうとしたのか？やつらはスフィアを魔族に対抗するた

めの兵器の鍵と言っていたが、実は神を倒すための兵器の鍵なんじや……。

僕はしばし思考の海に沈む。部屋の中が何とも言えない重苦しい空気になった。

『そろそろ通信切るわ。お休みなさい』

『わしもまた調査をせねば。何か分かつたら連絡するから待っておれ』

師匠と博士はともに通信を切った。咲はまだ考え込んでいる僕を見て、話しかけてくる。

「白河、そんなに考えても仕方がないぞ。今日はもう寝てまた明日にしよう」

疲れていた僕は咲の提案を受け入れて、身体を洗うとベッドに潜り込んだ。咲もその後に続く。こうして僕らはひとまず眠りについた。ちなみに僕と咲を見て、翌日スフィアとナルが大騒ぎしたのは想定外だった。

第三十六話 今明かされし伝説！（後書き）

まずは読んでくれてありがとうございます！

お知らせのことについてなのですが、実はこの小説のタイトルを変えようかと思っているのです。改めて読んでみるとやはり、特徴がなさすぎるのです……。

それについてもし新しいタイトルに関して意見などがある読者様は感想やメッセージで作者までお知らせください。参考にさせていただきます。

第二十七話 ある日森の中で…? (前編)

今日は短いです

第三十七話 ある日森の中で！？

第三十七話 ある日森の中で！？

「本当に何もなかつたつて」

翌朝、ナルとスフィアに睨まれながら、僕と咲は朝食を取つて、ベッドで一緒に寝ていたのはさすがにやばかったようで、ナルとスフィアはカンカンだ。

「そうは思えないの」

ナルが冷ややかに言い放つ。その視線はあたかも凍りついているかのようだ。

「まあまあ。白河はそんなことしないぞ。なあ白河？」

スフィアが優しい顔で僕を見据えてきた。しかし目が異様に鋭い。

怖い、怖いよ咲い！

僕は咲の顔を見て助けを求める。咲は穏やかに微笑んだ。

「白河と私は一人が喧嘩してから一緒に寝ただけだ。あ、あんことやそんなことなんて……まったくしてないぞ」

咲！ そんな言い方したら逆に疑われるよ！ 僕は近い未来に起こる出来事を想像して椅子に座つたまま後ろに下がりはじめる。だが案の定、僕が心配したように一人は下がる僕を恐ろしい目つきで睨みつけてきた。僕はもうただ笑うしかない。そうしている

うちに一人は僕に詰め寄ってきた。

「人間だもの。過ちはある。だから今回は許してあげるの。でも次は……」

僕に顔を近づけていたナルが首を手刀で切る動作をした。僕は恐さのあまり無言で何度も頷く。スフィアは何も言わずに咲の方をまっすぐ見ていた。咲はスフィアの威圧感に圧倒されている。

「わ、そろそろ時間も遅いし出発しないか。次はドラグナー王国だぞ。長旅になるから早く行こう

咲は声を絞り出して言った。ナルとスフィアもそれに賛成した。いつもよりやぐ今回の騒動は収まつたのだった。

あれから様々な準備を済ませて僕らは大きな森を抜ける小さな道を馬車で走っていた。周りはすべて森に囲まれている景色だ。これを見て、さつきから思っていたのだがこの辺りはほんとに森ばかりだ。ただ、この大陸は砂漠や雪山、草原など以外はほとんど森林らしいけど。そんな景色を見る事に飽きてしまつた僕は馬車の中を見回す。馬車のなかではいつものナルが本を読み、咲が地図を見ていた。

「咲、地図見せて」

「ああ、もちろん良いぞ」

咲に許可を貰つた僕は地図を覗き込む。地図には山や森やら

様々な絵が描かれていて、等高線と記号で表された日本の地図とはかなり異なっていた。

「ここが今いる位置だぞ。そして、この大森林を抜けたらいよいよドラグナー王国だ。ただこの大森林を抜けるのに丸三日はかかる」

咲が地図を指差して解説をしてくれた。ほつほつ、後少しで新しい国に着くのか。楽しみだな。

「ドラグナー王国は魔法と竜で有名。その王国の首都のすぐそばに目的地の竜の山があるの」

ナルがにわかに話しへ入ってきた。そして脅かすよつて怖い話を始める。

「ただドラグナー王国までつながっているこの大森林は別名霧の森。すごく霧が出やすくて危険なの。ちなみにその霧に乘じて山賊が襲つてきたりもするつても怖い森よ。森の奥に入つたら最後、ほとんど出られない」

ナルは凄みを効かせて言つた。咲と僕は互いに身を寄せた。すると、馬車の外から声がした。

「おーい、霧が出てきたぞ。もつ遅いし今日はこの辺りで泊まる」とこじこじ。

「このタイミングでかよ！　僕は心の中で激しいツッコミを入れた。しかし天候が変わるはずもない。仕方なく僕らは馬車を道の端に止め、泊まる準備をする。

薪を集め、火を起こし、夕食の準備が終わった頃には辺りは霧で白

く染まっていた。

「ずいぶん濃い霧だな。止まつて正解だつた」

スフィアが雲の中にいるよつた状態になつた森の様子に思わずそう言つた。ほんとに、スフィアの言つたよつに止まつていなかつたら今頃遭難していたかもしだい。

「(レ)飯ができたぞー！ わあわあと食べよつ」

今日の食事当番の咲が出来上がりつた料理を運んできた。おお、今日のおかずは魚の干物のようだ。咲は見かけ通り和食が好きなようだ。

「いただきまーす」

僕は挨拶をしてから魚を食べる。他のみんなもそれぞれ違つた挨拶を済ませてから食べ始めた。

「(レ)の魚おこしー。なんて魚？」

「アイジって魚だ。私の故郷の方で良く捕れる魚でな、懐かしくてたくせん干物を買ってしまつた」

咲は少し遠い目をした。きっと故郷のことを思い出したのだろう。僕も咲に釣られて日本のこと思い出す。うーんなんか懐かしいなあ……。

「お代わりなー。」

僕と咲が感傷的になつてゐるとナルが皿を突き出してきた。

皿の中を見ると魚の骨だけが綺麗に残され、他はなくなつた。慣れない魚料理を良くもこれだけ綺麗に食べれるものだ。ナルは食事に関する才能でもあるのかも知れない。ちなみにスフィアはナルの横で魚の骨と戦つていた。

「さすがといふのがこれは。まあいい、好きなだけ食べれば良い。食糧にはまだゆとりがあるからな」

咲は慣れた様子でナルの皿の上に魚を送ると、自身は食事の後片付けをはじめた。

「片付けたら寝袋を用意しよう。今日は疲れた」

僕はそういって馬車の中へ戻り、寝袋を敷く。この世界の夜は早い。照明があまりないからだ。

「そうだな、今日は早めに眠ろう」

スフィアや咲もそういって馬車に戻つてくる。その後に続いて、ナルがお腹をさすりながら戻ってきた。かなりたくさん食べたようだ。

「今日はもう寝る」

スフィアが寝袋に潜ろうとしたその時、遠くから甲高い悲鳴が聞こえてきた……。

第二十七話 ある田舎の中だー? (後編)

感想・評価お願いします!

第三十八話 世間は意外と狭い？（前書き）

最近忙しくて投稿遅めでした。すいません。

第三十八話 世間は意外と狭い？

第三十八話 世間は意外と狭い？

森の中で悲鳴を聞いた僕らは、すぐに悲鳴の聞こえた方へと向かつた。霧が立ち込める夕闇の森の中を走り抜ける。そうして少し走つたところで男に取り囲まれた女の子を見つけた。男たちは五人で武器をそれぞれ手にしている。ほぼ間違いなく山賊だ。

「まず……」

「どうかしたの？」

その光景を見たナルが、何故か具合悪そうにして後ろに引っ込んだ。そしてスフィアが心配そうにナルを見る。

「確かに気分が悪くなる光景だな。あの山賊たちは私が何とかするからナルは休んでいるといい」

咲がそういうと先陣を切つて森の中から山賊たちの方へと出て行つた。山賊たちの視線が突如現れた咲に集中する。僕もいかなくては！ そう思つて僕が出て行こうとするとスフィアの手が僕を遮つた。

「スフィア？ どうして」

僕が止めた理由を聞くとスフィアは咲を一瞥して言った。

「咲にやらせてあげよう。咲は正義感の塊のような奴だから。ああ

「いつ輩は自分でやらないと気がすまないだろ？」「

そう言われて僕は改めて咲の顔を見た。いつもと同じような穏やかな表情をしているが、目に鋭い光が宿っている。

「ああ、咲はあいつらみたいなのがよっぽど許せないんだろ？な……。」

そう思つた僕は咲の様子を木陰から見守ることにした。

「ほう、こりゃまた美人だぜ！」

「今日はほついてらあ！かわいい娘を一人も抱けるぞ！」

咲の顔を見た山賊たちは口々に汚い言葉を言いながら彼女に近寄つていぐ。それに対して咲の視線は冷ややかだ。

「さあお嬢ちゃん、俺達と楽しもうぜ。気持ちいいからよ！」

一人の山賊が咲に手を伸ばした。咲はただ黙つて山賊を睨みつけている。

次の瞬間だった。

「ふざや……」

山賊は超高速で後ろに回り込んだ咲に首筋を叩かれ、あつさりと氣絶せられた。それを見た周りの山賊たちは動搖して後ろに下がる。

「ち、ちつとあやるじゃねえか。ただそいつは俺達の中じゃ一番弱いんだぜ。悪いことは言わねえからおとなしくしてな」

一人の山賊が震えた声でそういって、山賊たちは全員で咲の周

りを取り囲んだ。すると咲の周りをぐるりと四人がかりで囲つたおかげで、山賊たちに余裕が戻つた。

「四人まとめて相手じゃ手も足も出ないのか？ 腰のもんが本物なら俺達を斬つて見ろよ」

「げらげら笑いながら山賊たちが咲を囲し立て始めた。咲はうつとうしそうな顔をすると、ただ一言だけ言つた。

「お前らなど斬つたら刀が錆びる」

「」の一言は氣の短い山賊たちを怒らせると、十分だった。すっかり猿のように顔を赤くした山賊たちが咲を罵る。

「」のくそアマア！ 許しちゃ置けねえ

山賊たちは一斉に咲に飛び掛かかる。剣に斧にナイフにメリケンサック。様々な武器の軌道を咲は瞬時に見切ると、滑らかな無駄の一切ない動きでそれらを回避した。そしてまたたく間に盗賊たちの腹や鳩尾に拳を決めていく。ものの数秒で盗賊たちは全員地面に寝転ぶこととなつた。

「咲！」

僕はすぐに咲の元へ駆け寄る。咲はそれを満面の笑みで迎えてくれた。

「心配してくれたのか？ 私があんなのに負けるわけないだろ？」

咲はいつもの調子でそうこうと、縄でぐるぐる巻きにされてい

た女の子の方に向かつた。

「大丈夫だつたか？ 今解放してやるからな」

咲の刀がひらりと一閃した。縄とさるべつわが切られ、女の子は自由になる。

「助かりましたわ。感謝しておきます。私の名前はアメリ。あなたたちの名前はなんですか？」

女の子は僕らの名前を聞いてきた。しゃべり方がなんか凄くお嬢様だ。髪の毛も金色でカールしている。まったくどうしてこんな森の中にいたんだろう。

「私は桜坂 咲、そつちにいる男が白河 輝彦。あとあつちにいるのがスフィアで、それから……あれナルはどこだ？」

咲がみんなを紹介しようとすると、ナルがいなくなっていた。さつきまでいたはずだけど……おかしいな。

「すまない。仲間を探してくるから待つてくれないか？」

「ええ、いいですわよ。ただ一人では不安ですわ。できれば誰か残つて欲しいですわね」

アメリは不安げな顔をして言った。僕ら二人は顔を見合わせる。

「それなら男の僕が行こう。女の子が残つた方が良いだろしね

「それもそうだな。じゃあしつかりナルを見つけてきて」

スフィアがそういうと咲も頷く。僕はそれを確認すると、森の中へと入つて行った。そしてしばらく辺りを散策したところで霧の中でも目立つ銀色の頭を見つけた。

「おーいナルウ！ どうしてそんなところにいるんだよ！」

僕が呼び掛けるとナルはこちらをチラリと見た。そして呟つ。

「私は今、名前を他人に知られちゃいけない病にかかっているの。だから無理」

なんのせそりや。僕は呆ながらもナルに言つた。

「何を言つてるんだよ。ほら、行くよ」

僕は少々強引だが、ナルの手を掴んだ。そしてナルをみんなのいる方に引っ張つていく。

「あら、あなたもしかしてナルさん？」

意外なことにアメリがナルを見て真っ先に声を上げた。さらに興味津々といった顔でナルを執拗に見る。ナルは顔を俯け、アメリから目をそらした。

「どうして目をそらしますのー。まさか私のことを忘れてしまいましたの？ ほら、学園で同じ組だったアメリですわよ」

目を逸らされたことに少し怒つたらしいアメリは大声でナルに言つ。それを聞いたナルはさらに露骨に目を逸らして言つた。

「知らないの。アーリーと同じ組になつたことなんてない……あ……」

ナルはしまつたとばかりに口を押された。だがもつ遅い。

「アーリーなんてあだ名、知つてるのは同じ組の人だけですわ。やつぱりあなたはナルでしたのね」

アメリはしてやつたりといつ顔になり、ナルを見る。ナルも、もう観念したのか目を逸らすのをやめてアメリの顔を見た。

「どうしてこんなところにいたの？ それにアーリーは出かける時はいつも付き添いがいたはず。一人でいるのはおかしいの」

ナルが苦い顔をしながらアメリに尋ねた。アメリはため息をつくと話し出す。

「それが、ハイランドに用があつて出掛けたのですけれど、帰りに先程の山賊に襲われまして。その時護衛たちは私をおいて逃げてしましましたわ。あの、それよりもナル、あなたの方こそどうしてましたの？ 突然学園を辞めたりして」

アメリの問い掛けにナルは口ごもる。なるほど、これがいやだつたのか。

「答えたくないんですね？ ならもう良いですわ。私、話したくない人から無理矢理に聞こうとするような不躾な真似はいたしませんの」

アメリはそう言ってにこやかに微笑んだ。それにつられてナルの方も表情が緩む。

「何だかわからないがうまく行つたようだな。それなら今日はもう遅いし休むことにしよう。アメリも一緒にどうだ？」

一人をずっと見ていた咲がそう言つとアメリは頷いた。こうして僕らの旅に同行者が増えたのだった……。

第三十八話 世間は意外と狭い？（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都（前書き）

今回は短めです。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都

第三十九話 森を抜けたら魔法の都

五人に増えた僕らの一一行は、森の中をひたすら南に向かつて移動していた。

「へえ、あなたたちそんな目的で旅をしていらしたのですね。私はすこし信じがたいですわ」

馬車の中での退屈しきこと僕に旅の話を聞いていたアメリが驚いたような顔をする。

やつぱり普通はそういう反応だよな……。僕がアメリの様子を見て何か複雑な感覚になつていると、アメリが予想外の事を言つてきた。

「あれ、でもたしか竜の山は登るのに管理している学園の許可が要りますわよ。あなたたちもう許可はお取りになりまして?」

「許可? そんなものいるのか。そんなの誰も取つてない気がするぞ。」

「登るのに学園の許可なんていらなかつたはずな」

ナルが読んでいた本をパタリと閉じてアメリに反論する。その声はわずかに上擦つっていた。

「昔はそうでしたわ。でも最近ダタールで大変な事件がありましたでしょ? それを受けて制度が変わりましたの」

アメリはさも当然のように言った。それを聞いてナルが呆然とする。そりやそうだ。ダタールでの事件の時すでにナルは僕らと一緒にいたんだから。

「アメリさん、その許可は条件がきつかつたりするのか？」

一人の前に座っていた咲が困惑したようにアメリに尋ねた。するとアメリは肩を落として首を縦に振る。

「あなたたちは外国の方ですから難しいかもせんわね」

アメリは険しい顔をした。みんなも困ったような顔をして押し黙る。そうして馬車の中が陰鬱な雰囲気になったところで、急に外から光が差し込んできた。あの暗い森を抜けたのだ！

「あれがドラグナー王国の誇る魔法都市ルーフィアですわ！」

御者台に身を乗り出したアメリが興奮したように叫ぶ。アメリの視線の先には 大きな街があつた。湖の隣にある小高い丘に沿うように建物が立ち並び、その丘の頂上には赤い城のような建物が建つていて。そして一番特徴的なのはその城のような建物の中心に聳える高い塔だ。赤い煉瓦の建物とは対照的に真っ白なその塔は青い空に映えて美しい。

「あの塔はいったい何なの？」

僕は気になつたのでアメリの方を見て聞いて見た。するとアメリは困ったような顔をする。

「あれはシースライトタワーですわ。この街の象徴ですの。私はこれぐらいしか知りませんわ」

アメリはそう言つとナルの方を見た。後はナルに任せるとことらしい。

「もつと詳しいことでしたらナルさんの方が知っていますわ。そうですわよね？」

ナルはくたびれたような顔をした後で、アメリの言葉に頷いた。さらに彼女は手に持つていた本から視線を塔に移すと説明を始める。

「シースライトタワーは古代の時代から建つてている塔で材質は不明。その地下には古代の遺産が封じられてるそうよ。何でもエレメントを司る機械だとか何とか……。その古代の遺産を後の時代の魔法使いたちが守るために塔の周りに集まつた。それが今のルーフィア魔法園の原形となつたの」

魔法園なんて響き、それを聞いただけでも格好良いよな。僕も一週間ぐらい在学したいものだ。

「その魔法園つてどんな所なの？ 僕も一応魔法使いだから興味あるんだけど」

好奇心が抑えられなかつた僕はナルに質問する。ナルはそんな僕の質問に丁寧に答えてくれた。

「ルーフィア魔法園はドラグナー王国が設立している学校よ。魔法使いの素質のある十三才から十八才までの子供が通うわ。でも学校というよりは研究機関としての側面が強くて、実用的な魔法とい

うよつ学問としての魔法を学ぶといひよ

面白そうだなあ。ホーツの親戚みたいな感じなのか？
そつやつて僕が想像を膨らませていると、咲が話しかけてきた。

「ところで許可についてはどうするのだ？ あそこに見える龍の山に住むとこう古代龍。その力を借りねばオルガ様の浮島には辿り着けないぞ」

咲はそう言って丘の後ろにある黒い山を指差す。僕はその山を注意深く見た。その雲を貫く山は岩で覆いつくされ、不気味な紫の靄がかかっている。まさに魔境といった雰囲気だ。

「許可に関しては私とアーリーでビリビリかしようと思つ。だから心配しないで大丈夫」

ナルはアメリを見た。アメリは任せとおけと言わんばかりの笑顔でナルを見つめ返した。僕らは少しほつとするとまた龍の山を見る。それだけ人を引き付ける不思議な魅力が龍の山にはあった。

「あれが龍の山か。なるほど強大な魔力を感じる。それに精靈もたくさん住んでいるようだ」

スフィアが馬を操りながら山の山頂の辺りを見て言つ。精靈さん同士わかるようだ。

そういうしていりうちに馬車はルーフィアの前まできた。スフィアは道の端で馬車を止める。

「ありがとうございました。私はここからは歩いて学園まで帰りますわ。あなたたちも一緒に学園に来ます？」

アメリカが馬車から降り立つと、魔法学園の方へと続く道をさして言ひ。

「とりあえず僕らは馬車を置いてからにするかな。それじゃまた学園でね！」

僕らはいっしごとまづルーフィアの街中へと向かつたのだった……。

第三十九話 森を抜けたら魔法の都（後書き）

感想・評価をお願いします！

第四十話 学園長と盛しげ依頼（前書き）

祝日ですので連日投稿です。

第四十話 学園長と怪しい依頼

第四十話 学園長と怪しい依頼

僕らは街の端にあつた馬を預かる業者に馬車を預けると、魔法学園に向かった。街を歩くロープをきた魔法使いらしき人々とすれ違いながら坂を登る。すると、魔法学園の威容がはつきりと見えてくる。その赤い煉瓦で構成された外觀はどこか古い日本の大学のように見えなくもないが、雰囲気が異なっていた。ましてその奥に聳える高い高い塔などはさらに独特の雰囲気だ。

その魔法学園に僕らはナルの案内で入つていく。

「とりあえず職員棟へいくわ。事務的なことはそこで行つてはいるはず」

先頭を歩いていたナルはそう言つて、真正面にある一際大きな建物に入つて行つた。それに僕らも慌てて続いていく。ここは常時かなりの人数が出入りしているらしく、その人々に紛れて僕らはすんなりと中に入る事ができた。中に入つて見ると、大きなエントランスになつていた。豪奢なシャンデリアが照らすその中を人が盛んに行き来している。

「へえ、結構騒がしいところなんだね」

イメージとは違う様子に、僕はナルに率直な感想を言つ。ナルは聞き慣れた感想なのかなめらかに返事をした。

「職員棟は出入りしている業者さんとかが良く来るもの。それ以外にも今の私たちのように学園に用がある人が来たりするし。だけど

教室棟や宿舎は静かなの

「ナルなんだ。なるほど」

僕はそういうとまた歩き出したナルに続く。ナルは長い階段を三階まで登り、廊下を歩く。両端に小さな石像の飾られた廊下はいかにもと言つた感じだ。

「遅かつたですわね。待つてましたわよ」

木製の扉の前にアメリが立つていて。彼女は盛んに手招きしている。扉には事務室と書かれていた。

僕らは素直にアメリの手招きに従い、扉に近づく。

「それじゃ入りますわよ」

アメリは扉を開けた。中では背の低い老婆が書類と格闘していた。僕らには気がついていないようだ。

「おばあさん、おばあさん！」と見切げてくださいまし。私たちあなたに用がありますのよ

アメリがおばあさんを何度も呼ぶ。するとようやく僕らに気がついたようでこっちを見てきた。

「おやおや何のようだい……ってあんたナルかい？ 久しづりだねえ。わたししゃ懷かしいぐらいだよ

おばあさんは驚いた様子でそう言つと両手を広げた。ナルもそれに応じて、おばあさんの胸に飛び込む。どうやら一人は知り合いら

しい。

「私も会えてうれしいの。でも今日は言わなきやいけない用がある」

ナルはおばあさんから離れると、事情を説明し始めた。するとおばあさんは険しい顔になる。

「困ったねえ。竜の山に登るには学園長先生の許可がいるんだよ。それが無いことは手続きできないねえ。ごめんよナルちゃん」ナルが説明を終えるとおばあさんはそう言った。その言葉にアメリが噛み付く。

「ちょっとどうぞうござうにかなりませんの？ あんなに大きな山なのですから何人か隠れて登つたところでばれませんわよ」

それはいけない気がするな。そう僕が思つと案の定思つた通りの答えが帰つてきた。

「それはダメだよ。規則があるからね。どうしても登りたいのなら、学園長先生の許可を得てきておくれ」

「そうですね。そう致しますわ」

アメリはそう言つて扉を開け、部屋を出て行つた。僕らもすぐ後に後を追つ。

事務室からひさりに階段を登つた廊下の先でアメリが腰に腕を当ててイライラしたように僕らを待つていた。

「まったく気の利かない人でしたわ。少しひらい良いでしょ」

アメリはおばあちゃんの対応にこりついていたよしだった。それをスフィアが年長者じけなだめる。

「まあまあ、そう怒らない。怒ると身体に悪いぞ。それよりここが学園長の部屋なの？」

スフィアは何も書かれていな扉を見てなだめるついでに質問をした。アメリは深呼吸すると、気分を落ち着かせたのかゆっくりと質問に答える。

「ええそうですわ。ここが学園長先生の部屋ですわよ。何も書かれてませんからわかりにくいかもしれませんけど」

スフィアはアメリの答えに納得したように首を振る。それを確認したところでアメリは扉についていた金色の呼び鈴を鳴らした。カランカランと澄んだ音がする。すると中から老人の声がした。

「誰じや？ 用があるのなら入りなさい」

「失礼します」

威厳のある声に僕らはみんな緊張しながら返事をした。そして部屋に入る。部屋の真ん中に大きな机があつた。そこに白い鬚を蓄え、大きな黒い三角帽子をかぶった老人が座っていた。

「ほう、これはまた珍しいお客様じゃの。して、わしに何の用かな

？」

学園長は僕らを見ると興味深そうな笑みを浮かべた。そこでナルが代表して事情を説明する。その話が進むにつれて学園長の顔は険しくなつていった。

「ふつむ……。どうやら大変なことが起きたみたいじゃ。みじこ、許可を出せり。ただし一つやつて欲しいことがある。頼まれてくれんかの？」

学園長はそう言つて僕らの顔を見回した。何を頼むつと聞つたのだろうか。厄介な気配しかしない。しかし、これは引き受けねばならない。

「わかりました。引き受けます」

ナルも引き受けのしかなにことがわかつたのかそう言つた。それを聞いて学園長は顔をほころばせる。

「おお、頼まれてくれるか。その依頼の内容なんじゃがの、最近この学園で黒い影のような物が田撃されておるようなのじゃ。先程まではさほど気に留めておらなんだがの、お前さんたちの話を聞いたらどうにも気になつての。これの調査をして欲しい。情けない話だが、学園の教師よりお前さんたちの方が実力はありそうじゃからの」

学園長はそうこうと机の上に置かれた小さな鈴を鳴らした。するとしばらくして、廊下からバタバタと音がしてくる。そして扉が勢い良く開かれる。

「お呼びですかあ学園長先生」

扉を開け部屋に入ってきた女性は舌足らずな高い声で言った。
たぶん大人なんだろうけど……中学生くらいにしか見えない。

「フリー先生、実はの……」

学園長はフリー先生を呼ぶと説明を始めた。フリー先生の感嘆の声が漏れ聞こえてくる。

「わかりましたあ！ 私が皆さんのお世話をすれば良いんですね！」

そう言つてフリー先生は学園長にビシツと敬礼した。学園長は生暖かい手でそれを見ると、じつちに視線を移す。

「心配じやの？……。でも仕事がない先生は他におらんしの。お前さんたが、これから先のことは」こちらのフリー先生に頼んだから、「よろしくですう！」

フリーは先生は一回一回して挨拶をした。不安だ、すごく不安だ……。この場にいるほとんどの全員がそう思つた。スフィアだけは違つているように見えたが。

「よ、よろしくお願ひします」

僕がみんなの代わりに振るえ氣味の声で言つた。するとフリー先生は手を出してきた。なので僕はがつちりフリー先生と握手をするのだった。いつになく不安になりながら……。

感想・評価をお待ちしております。

第四十一話 怪しき者へ 陰陰魔法教師

第四十一話 怪しき者へ 陰陰魔法教師

「調査は夜に行います。それまであなたたちはこの部屋で休んでいて下さい」

フィー先生は建物の端の小さな部屋に僕らを案内すると、そいつで部屋を出て行つた。とりあえず僕は部屋に置かれていたソファーに腰掛ける。うん、なかなか坐り心地の良いソファーだ。

「私もそろそろ部屋に帰りますわね。でもまた夜になつたら来ますから、調査に連れて行つて下さいましね」

アメリはそのまま部屋から出て行つとしたので慌てて僕は声をかける。

「ねえ、ちょっとー 調査に連れて行くのは無理だよ。危ないからー

「平氣ですか。学園長先生はああ言つてましたけど、この学園に強い魔族が侵入することなんて不可能ですもの。だから大丈夫ですよ。それに私、治療魔法が使えますから何かあつた時でもきっとお役に立ちましてよ」

アメリはどこからか金色の扇を取り出して、高笑いを始める。

……大丈夫かなこの人。

「大丈夫。アメリは馬鹿っぽいけど、見た目ほどは馬鹿じゃないわ

ナルが僕に耳打ちをした。いつのまにナルは読心術をマスターしていたんだ？

「ナルさん？ 今遠回しに私を馬鹿にしましたわね！」

アメリカが額にシワを浮かべて叫ぶ。ナルはその大声に耳を押された。

「うるさいの。 それはあなたの被害妄想」

ナルのきつい言葉にアメリカが固まつた。危険を感じた僕は一人から距離を取る。

「ムキイーー！ も、もう帰りますわ！ それでは『機嫌よつ』！」

アメリカはドアを勢い良く閉め、足音を響かせながら部屋から出て行つた。

「ナル、 あれはやり過ぎ」

「私もあれはどうかと思つべ」

スフィアと咲が口々にナルを非難する。しかし、ナルは無表情なままこいつ言つた。

「ああ見えてアメリカはいじめられて喜ぶタイプ。だから問題ないわ。むしろあれくらいしないと本人が満足しないの」

衝撃のカミングアウトに部屋の空気が凍りついた。どこからか寒い風が吹き抜けた気がする。

「……そつなのか」

「しゅ、趣味は人それぞれだからな！」

スフィアと咲はそう言つたきり黙り込む。そんな微妙な空気のまま時間が過ぎて行つた。

「さて出発しますよ～ってあれ、何なのですかこの空氣」

日が暮れてフィー先生がやつて來た。しかし彼女は部屋の中の妙な空氣に驚く。するとナルがボソッと言つた。

「私の冗談をみんなが間に受けたの」

何……冗談だと。

「ナ、ナル……騙したなあ！」

スフィアが真つ赤になつて怒る。ナルは立ち上がり、広い部屋の中を逃げる。

「だ、大丈夫だぞ白河。あの悪魔からは私が守つてやる」

「じやくせに紛れて咲が僕の身体を抱き寄せ、がつちりとガードする。

「一時休戦なのー！」

「くつ、やむを得ないか！」

咲と僕の様子を見たナルとスフィアは、手を取り合って接近してきた。咲は僕をさらに強く抱き寄せる。

「咲？ 抜けがけはダメだぞ？」

「そうなの。その手を白河から離して」

黒いオーラを放ちながら一人は仁王立ちする。咲は一人をキリリと睨み返した。一触即発。やばい空氣だ。
「こういう時はどうしたらいいんだ？」

「こりつ喧嘩しちゃダメなのですよ～」

フリー先生が教師らしく一喝した。まったく迫力はなかつた。でも、三人はおとなしくなる。

「それでは行きますよ。まずは庭園からですぅ」

フリー先生はドアを開けて僕らを廊下に呼ぶ。僕らはすぐに廊下に出了た。

廊下は魔法の光で薄ぼんやりと照らされていて、飾られている彫刻が不気味さを醸し出している。

「私がお邪魔する前に勝手に出掛けないでくださいいましー！」

「うわあつー」

後ろからアメリが話し掛けってきた。僕はびっくりして飛び上がる。

「人をお化けみたいに扱わないでくださいかしら」

アメリは不機嫌そうにそう言うと強引について来る。フィー先生は何か言いたそうだったが、アメリの気迫に押されたのか黙つていた。

そうしているうちに僕らは庭園の入口に着いた。

「この庭園にあるシースライドタワーの周辺で黒い影はよく見られるそうですよ。だから注意してくださいです」

シースライドタワーは月明かりを反射して淡い輝きを放つていた。僕らはその根元に広がる庭園をゆっくりと歩き、辺りを見回す。庭園には様々な花が咲き乱れ、植えられている樹木と合わせて幻想的な雰囲気だ。

「気だ。誰か来るぞ」

咲が鞘から刀を抜き放つ。白銀の刃が煌めいた。僕も杖を構えて魔法の用意をする。スフィアやナル、フィー先生も戦闘準備をする。ちなみに戦えないアメリはみんなの後ろに逃げ込んだ。

木々の間から怪しい人影が見えた。紫色の長髪に、病的に白い顔。彫りが深くてギョロリとした目が気味悪い。

「誰だ！ ただものではないな！」

咲が不振な男に刀を突き付けた。それに男は驚いたような声を出す。

「一体何の真似だ。フィー先生、事情を説明してくれたまえ」

男はフィー先生の姿を見つけると、鋭い目で睨む。フィー先生は素つ頬狂な声を出した。

「ふえ、クレイブ先生ですか？　どうしてこんなところに？」

先生だつて？　こんな警察がみたら間違いなく職務質問しそうな人なのに？

「見回りだ。フィー先生の方こそぞびつしているのだ？　生徒たちまで引き連れて」

クレイブ先生は僕らを見回した。僕らはひとまず武器を仕舞つ。

「学園長先生からの命令で黒い影の調査をしていたんですね。こちらの人たちは学園長先生が頼んでくれた助つ人の人たちで、アメリカさん以外は生徒じゃないのですよ」

フィー先生がそういうと、クレイブ先生は僕らを值踏みするような目で見てきた。そしてしばらくの間見続ける。

「ふうむ。頼りにはならぬやつだな。まあ気をつけて調査するがいい」

僕らから目を逸らしたクレイブ先生はそれだけ言い残して足早に歩き去つて行つた。

「ふう、やつといなくなつた。それでは調査を続けるですよ

フィー先生はクレイブ先生が苦手らしく、彼が見えなくなつたのを確認すると一息ついた。そしてまた調査を開始する。黒い影の調査はまだ始まつたばかりだ。

第四十一話 怪しき魔術
陰陰魔法教師（後書き）

感想・評価をお願いします。

第四十一話 謎の影と秘密の話

第四十一話 謎の影と秘密の話

魔法学園の庭園で僕らは影の調査を続けていた。木々の間や噴水の陰、あらゆるところをくまなく調べる。

「何も見つからないですわね。もう遅いですし、私は帰りますわ」

アメリはもう飽きてしまったのか、そういうと宿舎に向かって歩き始めた。彼女は夜の庭園を一人でずんずん歩いていく。

「一人で行動したら危ないですよ。あともう少しですから待つて下さ～い」

フリー先生がアメリを追いかけ、庭園の奥へと消えて行った。その場に残された僕らは互いに顔を見合わせる。

「僕らも後を追いかけた方が良いのか？」

僕がみんなに意見を求めるが、咲とナルが首を横に振った。

「いや、気は感じないから敵は多分いない。大丈夫だろ？」

「一応、魔法学園の教師はそれなりには強いはずなの。だから大丈夫」

大丈夫そうだな。安心した僕はこの場に残ることを提案する。

「それなら僕たちは調査を続けようと思つけど、スフィアもそれで良い？」

「私はみんなの考えに従おう」

意見を言わなかつたスフィアも賛成したので、僕らは調査を再開する。だが、しばらくしてもフリー先生とアメリは戻つて来ない。

「遅いなあ、様子を見に行こうか。咲、二人のいる場所は分かる？」

さすがに心配になつてきた僕は咲に聞いて見た。その問い合わせに咲はすぐに答える。

「え、と、ここから少し南に行つたところに二人そろつているぞ」

「よし、行つてみよ」

僕はみんなを連れて、咲の案内で一人のいる場所に向かつた。早足で庭園を歩くと、噴水を中央に配した広場が目に飛び込んできた。それと同時に何かが倒れているのも見えた。僕らは恐る恐るそれに近づいてみる。それはなんと幼く見える女性と金髪カールの少女だった！

「大丈夫か！」

咲はすぐさま一人に駆け寄つた。僕らもすぐに駆け寄り、二人の状況を確認する。

「大丈夫なの。命に別状はない」

脈を計つたナルが安心したような声で言つた。僕らは少しホッとする。すると、フリー先生が頭をさすりながら起き上がつた。

「いたたあ。頭が痛いのですよ」

「フリー先生、大丈夫ですか！」

「頭が痛いですけど他はたぶん大丈夫なのですよ」

フリー先生は僕の問いかにそつ答えると、辺りを見回した。そして杖を使って立ち上がる。

「影はもうどこかに逃げてしまつたようですね……」

フリー先生はさつきまでと違つて真剣な眼差しでそつとついた。僕らを緊迫した空気が包む。

「フリー先生、襲われたのはいつ頃?」

ナルが剣のような手つきをしてフリー先生に尋ねる。尋ねられたフリーはすぐさま答えた。

「ここに着いたらすぐに何かで殴られたのですよ」

「なるほど。咲、それぐらいの時間に変な気は感じなかつたの?」

「感じてないな。もし感じたならみんなにすぐに知らせたぞ」

咲の返答にナルは黙り込む。そして何かぶつぶつぶつぶやき出した。

「……おかしい、おかしいの。私も何の魔力も感じなかつた。犯人は何者……」

ナルがそつやつとづぶやいていると、広場の端に明かりが見えた。ぼんやりと見える姿からしてクレイブ先生だろう。

「うぬ……フリー先生これはどういふことですかな?」

クレイブ先生は倒れているアメリに気がつくと、青い顔をした。さらにフリー先生を問い合わせる。

「私は何もしてないですよ。影に、影に襲われたんですう」

「影? まさか本当に影に襲われたとかおつしやるつもりですか?」

クレイブ先生は疑わしげに顎をさすりながらフリー先生を見た。その態度にフリー先生は顔を赤くする。

「本当なのですよー。私は嘘はつきません!」

「ふうむ、とりあえず先生達を集めよつ。話はそれからで良いですからな」

クレイブ先生は学園長室で見たのと同じ鈴を取り出し、チリンチリンと鳴らす。それから五分とたないうちに先生達が二々五々集まってきた。

「クレイブ先生これは一体何事ですか?」

一人の先生が困惑したように尋ねる。それにクレイブ先生は至極冷静に答えた。

「フイー先生とこちらの生徒一名が噂の影に襲われたそうだ」

先生達の間に動搖が広がった。動搖した先生は隣近所の先生と口々にヒソヒソ話を始める。さらに誰それが犯人だと騒ぎ立てる先生まで現れた。

「皆の者、落ち着くのだ！」

杖をつきながら遅れてやつてきた学園長が怒鳴った。先生達は水をうつたように静かになり学園長の方を見る。

「まずは犯人探しよりも生徒達の安全を確保するのじや。フイー先生、クレイブ先生以外の先生方は宿舎に向かい生徒達が全員揃つてあるか確認してまいれ。それが終わったら職員室で会議じや。それでは行け！」

学園長が力強く言つと、先生達は宿舎に向かつて一斉に駆け出して行く。そうして先生達がいなくなつたところで学園長が僕らに話し掛けってきた。

「どうやら恐れていたことになつてしまつたようじや。君達はアメリカ君を保健室へ連れて行つてくれ。その後のことは明日また話そつ

「わかりました、学園長先生」

「つむ。アメリカ君のこととは頼んだぞ」

学園長はそう言って僕らの元を離れると、フイー先生の近くへ移動した。

「事情を聞きたいのでわしの部屋まで来てくれ。事が一段落してからでかまわんからの」

「わかりましたです」

「よし。クレイブ先生、ちとこっちは来てくれ」

学園長はフイー先生が了解したのを確認すると、クレイブ先生を近くに呼び寄せた。そして共に広場の端へ移動し、小声で話をする。僕は話の内容が気になつたので、アメリには悪いがこつそり近くで話を聞いていくことにした。

「クレイブ先生、鍵は大丈夫か？」

「もちろんです。私が肌身離さず持つておりますゆえ」

「よろしい。明日の午後一度”あれ”がきちんとあるか確認したい。鍵を開けてくれ」

「承知しました」

クレイブ先生がそういうと一人は何事もなかつたように職員棟へと戻つていつた。僕は一人のことが気になつたが、アメリを放つておくわけにもいかないので、保健室へと移動を開始する。

「鍵とか”あれ”って何だらう？ ナル何か知つてる？」

「知らないの」

保健室へと向かう途中でナルにも聞いてみたが、やっぱり何も知らなかつた。気になるなあ……。そう思いながら、僕は保健室にアメリを預けた。そして部屋へと戻り、眠りに着く。このとき怖いからみんなで寝よう、とかナルが言って大戦争が起きたのは思い出したくない。

第四十一話 謎の影と秘密の話（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第四十二話 先生の懶じい噂（前書き）

戦闘が最近なくてすみません。

第四十二話 先生の座じこ尊

第四十二話 先生の座じこ尊

翌朝、僕らはアメリの様子を見るべく保健室へと来ていた。アメリは白衣で服を着せられ、ベッドに寝かせられている。

「ふああ、あれ、ここはなぜじこですか？」

「気がついたね！ アメリは影に襲われて倒れてたんだよ。だから僕らが保健室に運んだんだ」

「やつしょば確かに頭を後ろから殴られたような気が……」

田を見ましたアメリは後頭部を押されると、そのままの姿勢で考え込む。

「どうしたの？」

考え込むアメリを心配そうにナルが覗き込む。アメリは弱々しい田でナルを見つめ返した。

「いえ、いま襲われた時のことを思い出すとしたら何も思い出せないんですの……。まるでモヤがかかるたよつで……」

「無理に想い出さなくていい。やつしょじ田せばここのの

「仕方あつません、やつせせていただきますわ」

ナルはアメリに布団をゆっくりとかけてあげようとした。するとアメリはいきなり布団をガバッと押しのける。

「ナルさんちよつと待つてくださいな。私はもう大丈夫ですわよ。だから休むのはもう止めて畠さんについて行きますわ」

「危ないの！ ここで寝ていた方がいい」

「私は襲われたまま黙つているような女ではありますんのよ？ 犯人を捕まえてキイキイ言わせてやりますわ」

アメリは首を絞めるような動作をした。どうやら犯人にかなりご立腹のようだ……。

「むう……言つても聞かなさそつ。みんな、アメリを連れていつていい？」

「私は構わんが」

「私も別に良いわ」

咲とスフィアは諦めたようにアメリの同行を許した。

「うーん……。他のみんなは許可したし……。どうしたものか。僕は深く悩む。僕がそうして額にシワを寄せていると、アメリが僕の顔をうるうるした目で、しかも上目遣いで見てきた。

「う、そんな顔されて逆らえるわけないじやないか。」

「まあ迷惑かけないなら」

僕が渋々許可を出すと、アメリの顔がどんどん明るくなつて行く。

「ありがとうございます。それでは早速調査に出発しますわよ！」

アメリはベッドから降りて高らかに宣言した。そして腰に手を当てて、指を虚空に突き刺す。

なんだかんだでノリの良いみんなはアメリカに呑わせ、
気合いを入れたのだった……。

「まずは聞き込みですわ！ とにかく聞いて見ますわよ！」

アメリカが廊下を踏み鳴らしながらビリーがの刑事のようなことを言っている。いつのまにか彼女がリーダーのようになつてゐるのはなんだろう……？

「アメリ、いまさらだけど授業は？」

ナルが思い出したように言った。そういえばそうだ。みんなが
アメリカの方に注目する。

「私は優秀でしてよ。一日ぐらい大丈夫ですわ」

サボるのかよ……。みんな呆れたように生暖かい目でアメリを見る。

「な、何ですの？」「ほ、ほりあそこそこいる生徒に聞き込みをしますわよ」

アメリは話題を無理に逸らすと、廊下を歩いていた女の子に声をかけた。

「そこのあなた！ 調査に協力してくださいましー。」

アメリはいつそ清々しいほど高圧的な態度で言い切ると、女の子をこっちに引っ張つてくる。

「あの、何ですか？ 私、忙しいんですけど」

眼鏡をかけた女の子はアメリの強引な態度に困惑したようにオロオロとしていた。そして、僕らにすぎるような顔を向けてくる。

「私たち影の噂について調べていますの。ほら、昨日謹々になつたでしょ？」

「あれについてですか？ 私は何もしらないんですけど」

女の子はいかにも興味なさげに答えた。まあ普通はそつだよなあ。

「そうですか。なら仕方ありませんわね。失礼しましたわ」

アメリはそれ以上聞いても無駄だと感じたのか女の子から歩き去つて行く。僕らもそれに続いて立ち去つとした。

「ちょっと待つてください！ あの、あなたはもしかしてナル先輩

ですか？」

女の子はナルの姿を見つけると、さつきまでとは打って変わってナルに積極的に話しかけてきた。話しかけられたナルはキヨトンとして立ち止まる。

「わ、うだな、うして？」

「私、先輩のファンなんですよ！ サインください。」

「え、それは別にいいけど……何故に私のファンなの？」

「先輩はとっても有名なんですよ！ 成績は常にトップでしたし、めちゃくちゃかわいい！ そして何より突然学園を辞めるつていうミステリアスな行動！ そのすべてに痺れるからです！」

「は、はあ……」

「と、うわで！」にサインを！

女の子は持っていた本を差し出した。ナルは訝しげな顔をしながらもスラスラとサインをする。

「やつたあ、ありがと、うこます！ お礼と言つてはなんですか、耳寄りな情報がありますよ」

女の子はナルから返してもらった本を大事そうに抱き抱えると、そつ切り出した。その時、前を歩いていたアメリがピクッと動いた。

「それは聞き捨てなりませんわ！ うしてさつを言つてはくださ

らなかつたんですねー!」

アメリが眉間にシワを寄せて、凄い剣幕で女の子を怒鳴る。女の子はアメリが怖かつたのか早口で話した。

「話します、話しますから落ち着いて! エーと、昨日襲われた現場の近くにいたっていうクレイブ先生には怪しい噂があるんですよ」

「へえ、どんなですの?」

「それはですね……」

その後、女の子が話してくれた内容をまとめるといつだ。クレイブ先生はフイー先生と同時期に国の研究所の推薦でこの学園に入つたそうだが、良く姿が見えなくなるらしい。さらに彼がいなくなつている時と重なるように例の影が目撃されているそうだ。ちなみに「この」とはあまり知られてはいないらしい。何でも、先生たちにすらあまり好かれてはいないクレイブ先生の行動を観察しているような人など、ほとんどいながらだそうだ。

「いよいよ本格的に怪しいですわね。まったくあの陰険教師は前々から何かやらかしそうだと思つていましたわ!」

女の子の話を聞き終わったアメリは顔を真っ赤にした。そして廊下を一日散にかけてゆく。

「ビリ行くんだよー?」

「クレイブのところに決まりますわー、あの陰険教師をとつめでやるんですから!」

腹が立つてしかたない様子のアメリは僕の質問に苛立たしげに答えると廊下をドタドタと走り、職員棟へと移動する。そして職員棟の廊下の端にある、クレイブと書かれたドアを勢い良く開け放つた……。

第四十二話 先生の怪しき尊（後書き）

感想・評価をお願いします。

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」（前書き）

また悪役サイドの話です。本編進まなくてすいません！

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」

極寒の山奥にあるアルカデの要塞。その最下層にあるソノラの研究室に、ワグナが報告をしにやって来ていた。

「ソノラ様、飛行戦艦の復旧が完了いたしました」

「あれからまだ五日だわ。ずいぶん早かつたわね。褒めてあげる」

ソノラは飲み差しのコーヒーをテーブルに置くと、珍しくいい仕事をした部下に機嫌を良くする。褒められたワグナはホッと胸を撫で下ろした。

「それで飛行戦艦はもう出撃できるのかしら？」

「もちろん。命令があればいつでも出撃可能です！」

「よし、ならば予定より早いが早速出撃！ 目的地はドラグナーのシースライトタワー！」

「はっ！」

ソノラがそのままや否やワグナとの取り巻きは命令を要塞中に伝えるべく司令室へと向かった。ソノラ自身も飛行戦艦の格納庫へと移動を開始することにする。

「行つてくるわね」

ソノラは研究室の中央にある水槽に手を振ると、扉を閉じて部屋を後にする。水槽の中にある機械の目が怪しく揺らめいた。

「『竜の瞳作戦』開始！ 総員、一号格納庫の飛行戦艦に乗船せよ！」

金属のプレートが張られたトンネルのような通路にけたたましいサイレンが鳴り響く。その大音響の中をソノラは悠々と専用の道を使って飛行戦艦へと歩く。数百メートルほど歩いたところでソノラの前に扉が現れた。扉には大きく「一号格納庫」と書かれている。

「暗証番号を『』に入力下さい」

ソノラは扉の脇に備えられた端末をチャカチャカといじつた。すると端末から赤い光が延び、ソノラの瞳に当たる。

「個人データ認識完了。暗証番号、個人データ共に異常なし」

扉はプシュと音をさせると、滑らかにスライドした。ソノラはカツカツと足音を立てながら扉の奥に入していく。

「これは素晴らしい。『昔見た時』と変わらないわ」

ドームのような部分から、三本に分かれた船体が伸びる独特的のフオルム。長年地底に埋まっていたにも関わらず鈍い輝きを放つ鉛色の装甲。そして装甲の合間から垣間見える無数の砲塔が異様なまで

の存在感を発している。その飛行戦艦の中央付近には「シリウス」という文字と獅子をあしらつたエンブレムが刻まれていた。

ソノラはかつて見た時と同じそれらを見て、愉悦の表情を浮かべた。そしてタラップを揺らし、戦艦「シリウス」に乗り込む。そしてソノラは長い通路を抜けて司令室に到着した。

「ソノラ様！」

「（）苦労。準備は完了したか？」

「もう間もなく完了いたします」

「せうか、ならば急ぎなさい」

「はっ！」

大学の講堂のようななすり鉢型をしている司令室にソノラが入ると、オペレーターたちが敬礼を決める。ソノラはそれを確認すると作業の続行を指示した。しばらくして全天モニターに光が点り、グラフやシリウスの船体が三次元的に表示される。

「メインジョネレーター起動。虚数空間展開。魔力抽出開始」

「メインコンピュータ起動。システムオールグリーン」

「魔力注入開始。メインエンジン起動。出力30%」

シリウスの船体が微かに震えた。司令室の下からわずかだがエンジンの駆動音が響いてくる。

「エンジン出力50%に上昇。反重力システム起動」

「全乗組員の乗船を確認。隔壁を封鎖。タラップ収納します」

金属同士がぶつかる嫌な音を奏でながら、次々と隔壁が下ろされてゆく。タラップも船内へと収納され、シリウスは周囲から切り離されたよくなつた。

「ソノラ様。格納庫の扉を開けます」

ワグナが要塞の方から無線で連絡してきた。オペレーターたちは無言で頷き、まだまだたくさんある作業を続行する。

「エンジン出力定格値に到達。安定化作業へ移ります」

「シリウス、浮上します」

軋むような音がして船体が大きく揺れた。ソノラは思わずバランスを崩してよろける。しかし、トップの醜態など無視するかのようにオペレーターたちは慌ただしくキーボードを叩き続けた。

しばらくして、ガクンと言う音がして格納庫の天井が開き始めた。いよいよ山々が揺れ動き、格納庫の天井が降り積もつた雪を吹き飛ばしながら開いていく。

シリウスの船体が地下から浮上し、空高く舞い上がつていった。鉛色の船体が弱い陽光を反射して威風堂々とした様だ。

「位相空間シールド展開。シールドシステムオールグリーン」

「目的地設定。ドラグナー王国、シースライドタワー」

モニターの左側に世界地図が表示され、その上で赤い点が一つ点滅する。大陸の北にある点が現在地で、南にある点がシースライドタワーを示しているようだ。

「全システムオールグリーン。ソノラ様、出発の『命令を!』

「よし、それでは飛行戦艦『シリウス』……発進!』

オペレーターの要請にソノラは腰に手を当てて、空中ビシッと指差した。紫の髪が靡き、瞳が金色を帯びる。その口から放たれた勇ましい号令は司令室に轟き渡つた。オペレーターたちもそれに呼応し、司令室に歓声がこだまする。

シリウスの後方から青白い炎が激しく噴き出す。シリウスは急加速し、シースライドタワーに向かって飛んで行つた。

第四十四話 飛翔！ 飛行戦艦「シリウス」（後書き）

飛行戦艦がSF的すぎるかも……。
感想・評価をお願いします。

ひとまず打ち切りのお知らせ（前書き）

大変重要なお知らせでありますのでお読みください。

ひとまず打ち切りのお知らせ

このたびなのですが、この小説をひとまず打ち切りにすることを決めました。

気分が乗らずほかの小説が増えてしまい、そちらがメインとなつてしまつているからです。

ですのでそちらが片付くまでこちらのほうを更新停止とさせていただきます。

楽しみにしてくださつていた読者の皆様には申し訳ありませんが、
「了承のほどなにとぞお願いします。

```
# # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # #  
# # # # # # # # # #
```

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083n/>

科学な異世界記録

2011年5月31日14時34分発行